



# 新撰女子國史

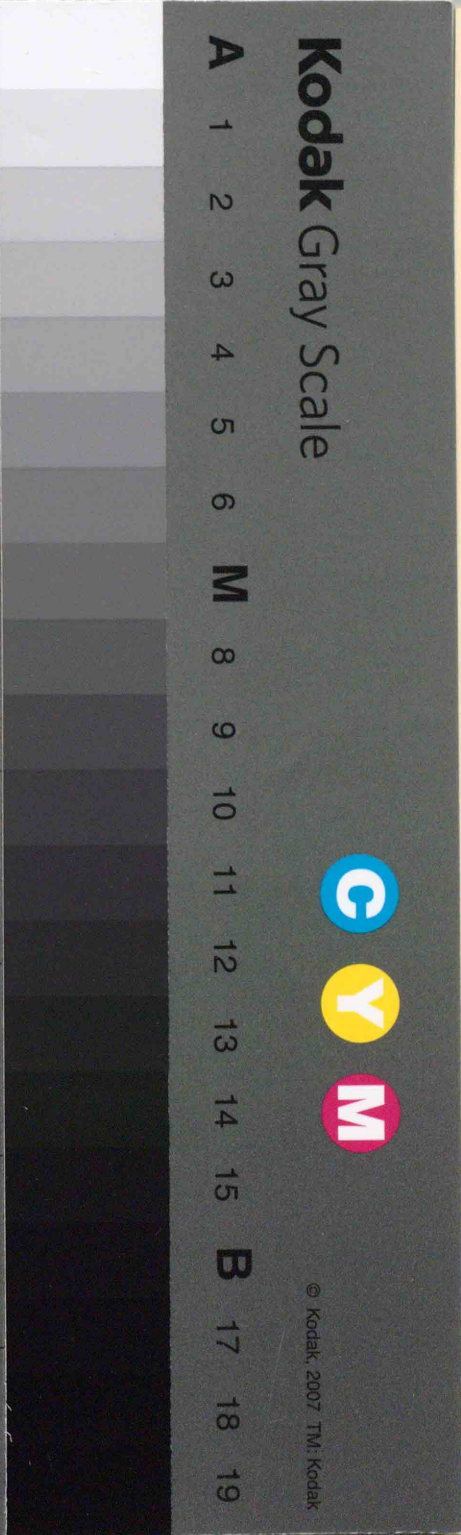
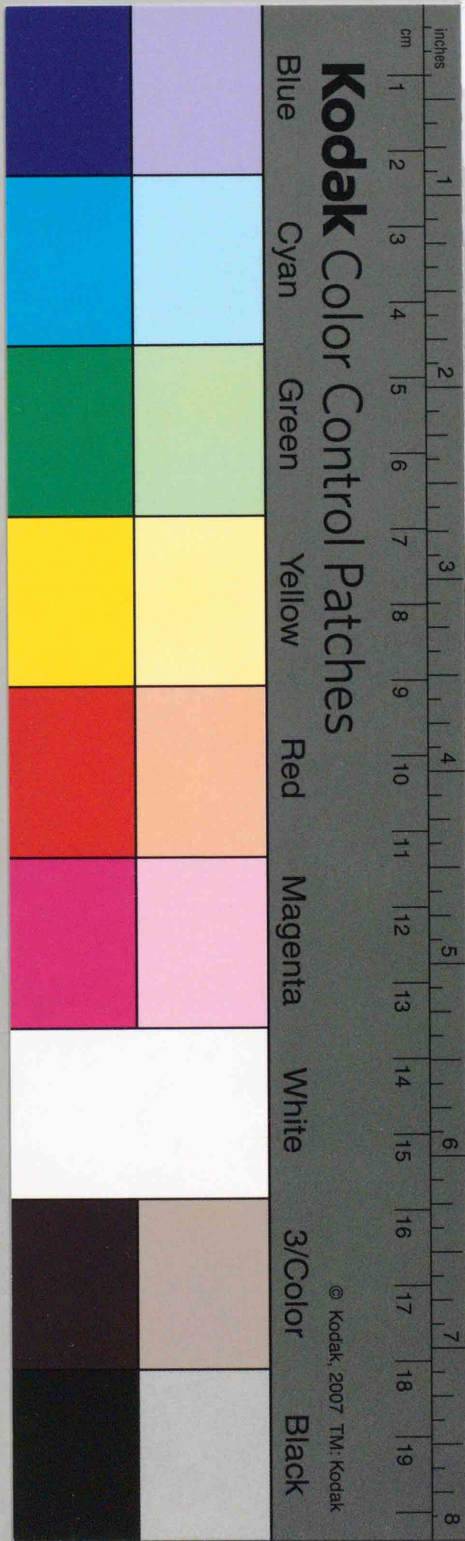
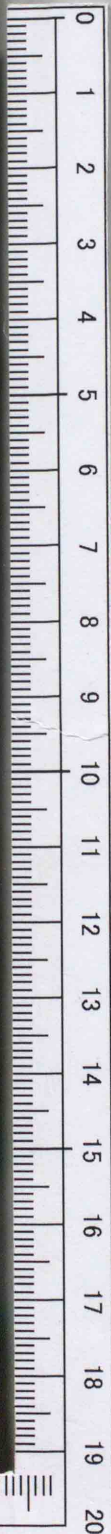
修文館藏版

低學年用

師範學校  
附屬中學校  
歷史研究會著

3759  
H18  
資料室

教  
4  
200



43008

教科書文庫

4
Z10.
42-1939
20000 35917



© Kodak 2007 TM: Kodak



資料室

375.9  
Hi 18

教科書文庫

4  
210  
42-1939  
2000035917

廣島高等師範學校  
附屬中學校  
歴史研究会著

# 新撰女子國史

低學年用

文部省檢定濟

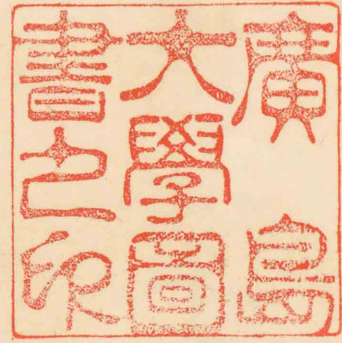
昭和十四年一月十六日  
高等女學校歷史科用

修文館藏版

広島大学図書

2000035917





皇祖の神勅

豐葦原千五百秋之瑞穗國是  
吾子孫可王之地也宜爾皇孫  
就而治焉行矣寶祚之隆當與  
天壤無窮者矣

聖 德

伏見天皇御製

いたづらにやすき我身ぞはづかしき

苦む民の心おもへば

明治天皇御製

照るにつけくもるにつけて思ふかな

わが民草のうへはいかにと

臣 節

海ゆかばみづく屍山ゆかば草むす屍大君の

邊にこそ死なめ顧みはせじ

君がため命死ぬべきますらをと

なりてぞ生けるしるしありける

例 言

一、本書は高等女學校及び實科高等女學校に於ける國史教科書として昭和十二年三月公布の文部省所定の要目に據り、低學年用として編纂したものである。

一、本書編纂の主旨は國體の本義を明徴にし國民精神を涵養することにあつて、殊に列聖の御聖徳と國民の臣節とに留意した。

一、小學國史に立脚し、その知識のもとに時代觀念を與へることに意を用ひ、このために各篇の終りに「時代の概括」の項を設けてその特色を把握し得るやうにとめた。随つて小學國史との重複を出來得る限り避けたが、重要事項は更に高い見地から繰り返したところが少くない。これは國史は繰り返すことによつて事實が一層明瞭になり、批判力もつくと思ふからである。

一、史實を常に全體的立場から記述することにつとめた。

一、國史は餘りに多くの事實を網羅すると大切な事が看過され、またその精神的方面が疎略になる。本書ではこの點に注意して根本的なものを撰し、枝葉多岐にわたる事はなるべく之を省いた。

一、年表の中にも時代の觀念變化・流轉等をあらはす工夫をした。

昭和十三年七月

著者識

# 新撰女子國史 低學年用

## 目次

第一篇	神代と上代	一
第一章	國のはじめ(神代)	一
第二章	國內の平定	四
一	神武天皇の神勅御實現	四
二	國力の充實	六
三	上古の風	九
第三章	皇威の國外發展と文化の進歩	四
一	半島の服屬と文化の輸入	四
二	支那との交通	一〇
三	政治の改革	二

神代と上代の概括……………三三

**第二篇 大化改新と奈良時代**……………二六

第一章 大化改新と律令の制定……………二六

第二章 奈良時代……………三三

一 統一の政治と佛教……………三三

二 唐風の文化……………三七

大化改新より奈良時代までの概括……………四一

**第三篇 平安時代**……………四三

第一章 政治教學の改革(平安時代の初期)……………四三

第二章 藤原氏の専權(平安時代の中期)……………四八

一 中央の情勢……………四八

二 地方の情勢と武士の起り……………五五

第三章 院政と武士の興隆(平安時代の末期)……………五九

平安時代の概括……………六六

一 院政と武士の中央進出……………五九

二 平氏の専横時代……………六三

**第四篇 鎌倉時代**……………六六

第一章 鎌倉幕府……………六八

第二章 幕府と北條氏……………七一

第三章 鎌倉時代の文化……………七七

第四章 北條氏の滅亡……………八二

鎌倉時代の概括……………八四

**第五篇 建武中興と吉野時代**……………八七

第一章 建武中興……………八七

第二章 吉野朝廷……………九〇

建武中興と吉野時代の概括……………九三

第六篇 室町時代

- 第一章 室町幕府の内治……………九五
- 第二章 室町幕府の對外關係……………九九
- 第三章 室町時代の文化……………一〇三
- 第四章 戰國時代の社會……………一〇六
- 室町時代の概括……………一一〇

第七篇 安土・桃山時代

- 第一章 國內統一……………一一一
- 第二章 西洋文化傳來の影響……………一二六
- 安土・桃山時代の概括……………一三〇

第八篇 江戸時代

- 第一章 幕府の確立……………一三三
- 一 封建制度の完成……………一三三

二 外交と鎖國……………一三五

- 第二章 文化の興隆(元祿の前後)……………一三八
- 第三章 幕府の中興……………一三四
- 第四章 幕府の衰亡……………一三六
- 一 文化の爛熟と社會の頽廢……………一三八
- 二 尊皇思想の勃興……………一三八
- 三 對外關係……………一四一
- 第五章 大政奉還……………一四五
- 江戸時代の概括……………一四八

第九篇 明治維新と明治時代

- 第一章 明治維新……………一五一
- 第二章 明治初年の施政……………一五六
- 第三章 立憲政治の確立と國內の整備……………一五八

第四章 國威の發展と文化・經濟の進歩……………一六三

明治時代の概括……………一七一

第十篇 大正・昭和時代……………一七四

第一章 歐洲大戰と國威の躍進……………一七四

第二章 東洋の形勢と我が國の世界的地位……………一七六

結論 國民の覺悟……………一八二

—(目次終)—



# 新撰女子國史 低學年用

## 第一篇 神代と上代

### 第一章 國のはじめ(神代)

天照大神 我が國は神代の昔、伊弉諾尊・伊弉冉尊の二柱の神が御開きになつた大八洲の地である。この二神は廣く天下を統治し給ふ神として天照大神を生み給うた。この故に大神は生れながらに天の下の君にまします御徳をそなへ給ひ、農蠶の御指導をはじめ、人民に恵を垂れ給ふ事多く、萬民は太陽の如く仰ぎ慕ひ奉つた。

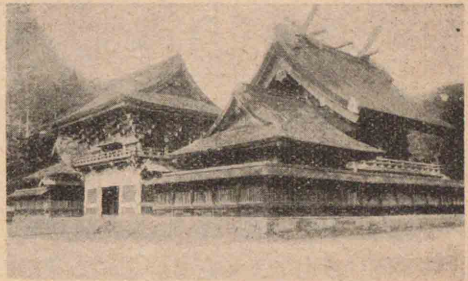
御徳

天叢雲劔



大國主命

出雲 大社



大神の御弟素戔嗚尊は出雲に降り、簸川上て天叢雲劍を得られたが、これは私すべきでないと思召され、大神に献上された。尊の御子大國主命は廣く附近の地を經營せられ、産業の開發や、醫藥の法を教へる等、力をつくされたので、人々は心服し、この地方の文化は最も早く開けた。時に大神は御子孫をして永く我が國を統治せしめようと思召され、大國主命にその御旨を諭し給うた。命は謹んでその經營せる土地を献上し、自ら杵築に住ましめ給うた。これが今の出雲大社で、命を御祀り申してある。勅をうけては必ず謹む我が國民の精神が遠い神代の昔から存したことがうかがはれる。

三種の神器

**御神勅** こゝに大神は皇孫瓊杵尊に神勅を下し、  
 豊葦原の瑞穂國は吾が子孫の君たるべき地なり。汝皇孫ゆいて治めよ。  
 行矣。寶祚の隆えまさんことまさに天壤と共にきはまりなかるべし。  
 と宣ひ、また八咫鏡・天叢雲劍・八坂瓊曲玉を御授けになり、  
 この鏡を見ること我を見るが如くせよ。  
 と仰せられた。

**天孫降臨** かくて尊は諸神を従はせられて日向にお降りになり、これより三代の間この地に於て徳をしかれ、萬民を慈み給うた。  
**國體の基** この御神勅によつて、我が國は萬世一系の天皇が統治し給ふべき國で、君臣の分は國土が出来た時より嚴として區別されてゐる。されば大神の御子孫であらせられる天皇は、大神の御心をうけつぎて、我が國を統治し、大神の御徳をひろめ給ふ御方であり、また國民が天皇に仕へ奉つて、皇運の發展を圖る事は、大神

に仕へて、その御徳にこたへ奉ることゝ同じである。神代の昔から神勅の御旨に随ひ、立派な國をつくつた歴史こそ世界に類のないものである。御歴代の天皇が皇位の御しるしとして三種の神器をうけつがせられるのは、大神より親しく皇位をうけ給ふ御精神のあらはれて、これにより宏遠なる國のはじめから連綿とつゞく皇室の尊嚴を拜し奉ることができる。

皇室御系圖(一)

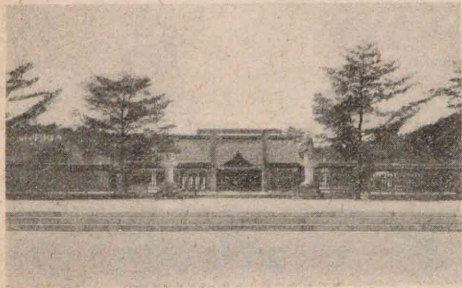
天照大神—天忍穗耳尊—瓊瓊杵尊—彦火火出見尊—鸕鷀草葺不合尊—神武天皇

第二章 國內の平定

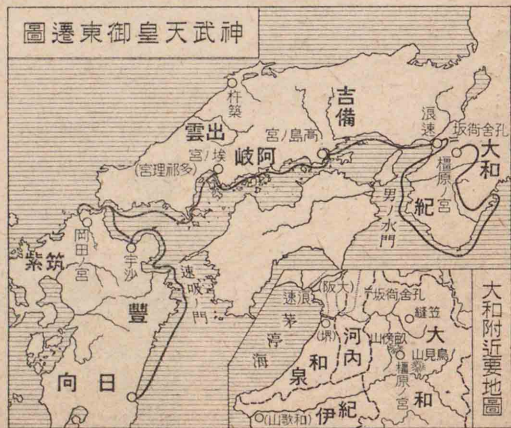
一 神武天皇の神勅御實現

御東遷 人皇第一代神武天皇は中央の要地にうつゝて萬民を

橿原神宮



安めようと思召され、御みづから兵を率ゐて日向を御出發になり、瀬戸内海を経て大和へ向はせられた。その途中、或はその御精神をとき、或はしたがはぬ者を討ち、様々の御苦心と多くの年月とを重ねられ、祖神の御加護を得て遂に大和を平定し給うた。ここに

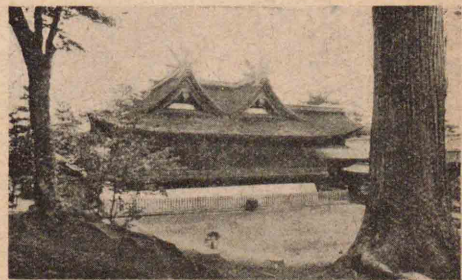


於て橿原の地に都を定め、おごそかに即位の禮を行はせられ、謹んで皇位について萬民を安らかにし、以て御神勅にそひ奉り、その御徳をひろめよう。」と仰せ給うた。明治五年、この年を紀

紀元節

吉備津神社  
四道將軍の  
一人吉備津  
彦命を祀る  
岡山縣

元元年と定め、ついで御即位の日を紀元節とし、國をあげて祝ひ奉るのである。  
**御政治** 天皇は創業の功臣を重く用ひ給うて祭事や武事をつかさどらしめ、地方には國造クニツクリ、縣主アガタスミを置いて治めしめられたので、大和の國を中心に國家が統一された。



天兒屋根命……天種子命	↓	中臣氏	祭事
太玉命……天富命	↓	齋部氏	祭事
天忍日命……道臣命	↓	大伴氏	軍事
饒速日命……可美真手命	↓	物部氏	軍事

二 國力の充實

**四道將軍** 崇神天皇は更にひろく神勅の御精神をひろめようと、思召され、東海北陸・山陽・山陰の四地方に皇族方を御使として遣

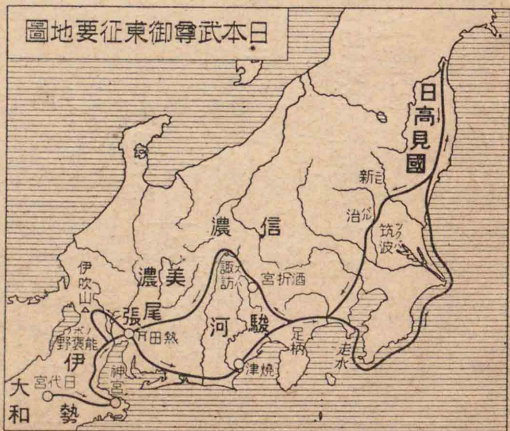
はされ、人民の指導・鎮定にあたりしめ給うた。之を四道將軍と申し、御子孫永くそれらの地に土着せられたので、皇威はひろくゆきわたるやうになつた。

九州東國の

鎮定 景行天皇

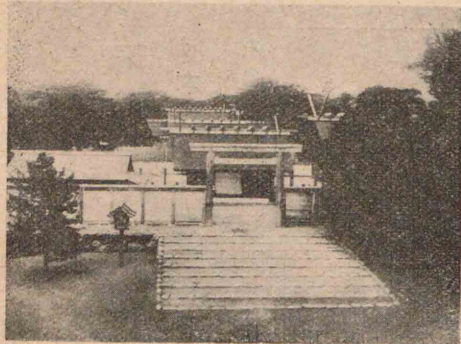
皇は更に遠方の地にも皇化

を及ぼさんと思召され、九州の熊襲を御親征になつたが、また皇子日本武尊をして熊襲及び東國の蝦夷を討たしめられた。かくて邊地に至るまで恰く皇化に浴し、蝦夷



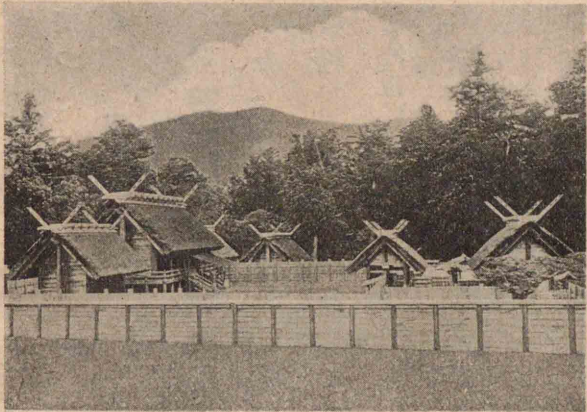
日本武尊

熱田神宮





皇大神宮

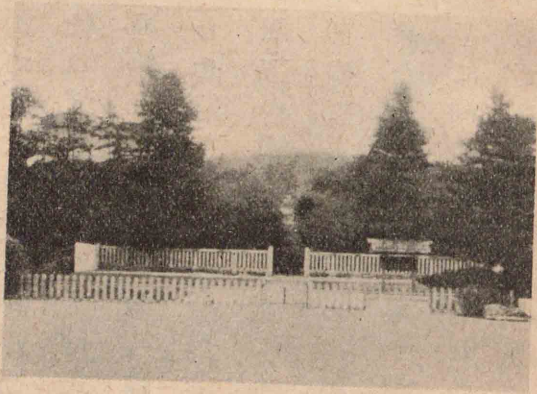


内宮

内宮と稱し、今尙昔ながらの神々しい御有様を拜し奉るのである。

皇大神宮 然るに第十代崇神天皇の御代になつて、敬神の御心深い天皇は、御鏡と起居を共にし奉ることをおそれ多く思召され、御鏡と共に大和の笠縫邑カサヌイに御遷し申し、御鏡を御神體として天照大神を祀らしめ給ひ、宮中には八坂瓊曲玉と共に新に作られた御鏡、御劍をとめて皇位の御しるしとし給うた。後世、宮中の内侍所に祀らせ給ふのはこの新しい御鏡である。垂仁天皇は更に伊勢の五十鈴川のほとりに宮をたて、御鏡を御劍と共に笠縫邑より遷し奉り、皇女倭媛命ヤマトヒメノミコトをして祀らしめ給うた。これ即ち皇大神宮で後、

仁徳天皇陵  
草薙劍



これより御歴代未婚の皇女を選んで齊宮とし、この制度は後醍醐天皇の御代までつづいた。また後日本武尊が御東征のみぎり、神宮に參拜し、神劍をうけて東にむかはれたが、途中その神威により賊の難をさけられてより草薙劍クサナギと申し上げ、尊の薨後、その妃宮簀姫がこれをして、熱田神宮に御祀り申しした。

埴輪

陵墓

國民は皇大神宮を國の祖神としてうやまひ奉ると共に、各祖先を氏神としてまつり、之に仕へて團結してきた。されば陵墓の如きは廣大なものが多く、その周圍に埴輪ハニワを埋め、



池をめぐらし、或は石でかこむ等鄭重を極めてゐる。また君親を慕つて殉死する風もあつたが、民を憐みたまふ垂仁天皇の御仁慈によつてとゞめられた。

**上古の産業** 我が國は古來瑞穂國といはれる如く農業本位の國で、神代の昔、大神が己に農蠶の法を教へ給うたのを始とし、御歴代の天皇は何れも國民の生活が豊かになることに大御心をとゞめ給うた。崇神天皇は「**農は國の大本なり**」と仰せになり、池溝を掘らせ、船をつくらせ、農業交通の發達をおはかりになつた。この頃四方の國々が次第にひらけゆくにしたがひ、國費も増加したので、初めて人口をしらべ、租税の法を定めて狩の獲物や織物を納めさせた。垂仁天皇もまた大いに農事を御獎勵になり、灌漑の設備などに御力をいたされたので、生活は豊かになり、人民皆太平を樂んで皇室の御恵に感謝し奉つた。

農業

上古の服装女子

絲を紡ぐ女  
徴古館陳列  
人形



**上古の生活** 當時の生活は簡單で丸木の

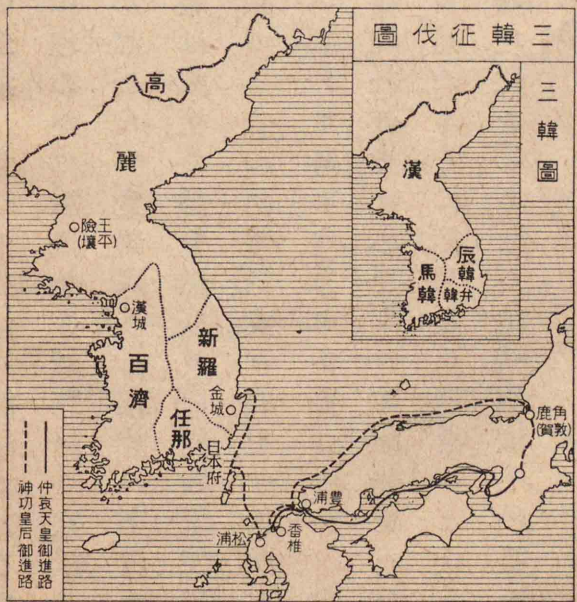
柱を地に埋めたて、屋根を茅で葺いた家屋の中に住んでゐた。食器は多く素焼の土器を用ひ、衣服は麻楮カウの絲を織り、或は絹物も使用され、筒袖の上衣に男は禪カウ、女は裳カウをつけ、美しい玉をつらねて身のまはりを飾つた。

かくの如く我が上古の人は純朴敬虔な心をもつて祖先を尊び、皇室に忠誠をつくし、美しい自然のもとに簡易な生活をいとなみ殊に女子は祭祀の上に重要な地位をしめ、また純情貞淑な物語を多く残した。

### 第三章 皇威の國外發展と文化の進歩

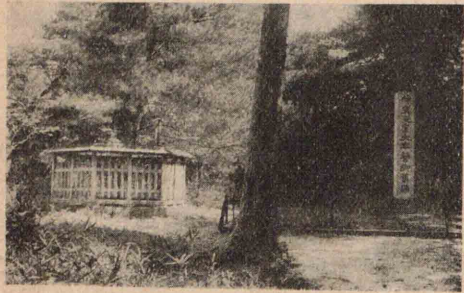
#### 一 半島の服屬と文化の輸入

**半島の形勢** 成務天皇の御代に至り、我が内治が全く整ひ、國力が充實してくると、それが朝鮮半島にも及び、兩者の關係が密接になつてきた。半島はその位置の關係から常に我が國及び支那の影響をうけてゐたが、我が國とは既に神代の昔から交通があつた。この頃、半島の南



神功皇后の新羅御親征

仲哀天皇  
大本營御舊跡  
香椎宮



部には小國が分立し、それ等の中から新羅百濟が起り、北部に國をたてた高麗と共に三國と稱して勢強く、支那の文化をうけて發達してゐた。又新羅と百濟との間に小國任那が介在して、常に新羅の壓迫をうけ、我が國の援を求めようとしてゐた。

#### 半島の服屬

崇神天皇の御代、任那が保護を求めてきたので天皇は將軍を遣はして之を援け、日本府の基をひらいて治めしめ給うた。仲哀天皇の御代になつて、熊襲は新羅と結んで、また叛いたので、天皇は神功皇后と共に九州に親征し給うたが、不幸にも香椎宮で崩御あらせられた。こゝに於て皇后は武内宿禰とはかり、軍を率ゐて遠く新羅を征し、之を降されたので他の百濟高麗も服するに至り、我が國威は半島に輝きわたつた。か

文物傳來

くて三國は我に忠誠を誓ひ、その貢船を相ついで送り、學問・美術・工藝等大陸の文化をさかんに傳へた。

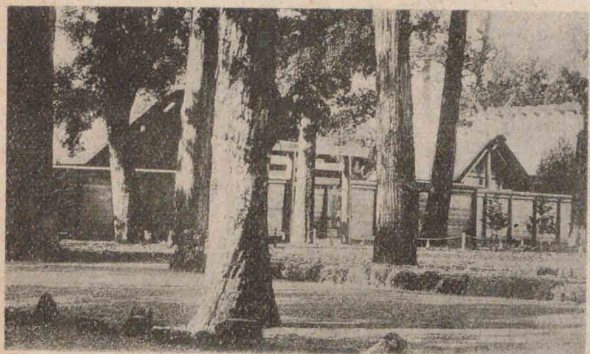
**學問の傳來** 半島より文化が入つたのは主として應神天皇以後である。天皇の御代に百濟から阿直岐王仁、北方から漢人阿知使主が來たり、學問を傳へたので、天皇は皇太子稚郎子をして王仁について學ばしめられた。王仁は來朝した時に論語及び千字文を献上したが、論語の教は我が國固有の尊祖・忠君の精神と調和して次第にひろまり、また當時來朝したこれ等の學者は朝廷に仕へ、子孫にわたつて記録の役をつとめ、我が國の學問の進歩に貢獻した。

**工藝の傳來** この頃支那の人弓月君が多くの人々を率ゐて來り、養蠶・機織の進歩した法を傳へ、また天皇は阿知使主を遠く南支那に遣はし、織縫に巧みな工女を御招きになつた。その後弓月君

の子孫は秦氏を、阿知使主の一族は漢氏を賜はり、我が國機織の進歩に貢獻する所が多かつた。

**産業の發達** かくの如く我が國の文物は全く皇室の御指導・御

皇后の養蠶御獎  
外宮  
大藏



獎勵によつて發達したもので、仁徳天皇は民力の休養を圖り給ふと共に、秦氏を諸國に配つて機織の業を普及し給ひ、また雄略天皇は皇后と共に養蠶・機織を御獎勵になり、農蠶の神である豊受大神を伊勢に祀り、支那・百濟から織工・陶工・畫工等を招かれたので、産物は益・豊になり、貢物を納めるために新に大藏を設けられた程であつた。

**佛教の傳來** これ等の輸入された文物の内、最も大きな影響を我が國に與へた



聖徳太子



排佛論と崇佛論  
物部氏滅ぶ

聖徳太子と佛教

時朝廷に於て大なる勢力を有し、常に相對立してゐた物部・蘇我の二氏は、これを機に排佛崇佛に別れて劇しい争ひをなし、遂に排佛派の物部氏が倒された。

**佛教の興隆** 用明天皇の皇子聖徳太子は推古天皇の攝政となられ、御英明にして學問に通ぜられると共に敬神の御心あつく、また佛教を深く信ぜられて、その興隆をはかり給うた。殊に佛教の

ものは佛教である。佛教は印度から支那・朝鮮に傳はつてゐたが、欽明天皇の御代に百濟から渡つてきた。新らしい宗教を入れることは我が固有の精神に影響することが大であるので、天皇はその可否を群臣にはかられたが、當



壁畫の一 部

金銅釋迦三尊



法隆寺全景

法隆寺は推古天皇の御代に建てられた寺で金堂・五重塔・中門共に世界最古の木造建造物である。實に世界に誇り得るもので釣合よき建築美は當時の技術が進歩してゐたことを示してゐる。

釋迦三尊は金堂内に安置せられる金銅佛で鳥佛師の作である。

壁畫は金堂の内壁に描かれた佛畫で本圖は西大壁の一部である。今日この壁畫の保存を圖つて様々の工夫がなされてゐるが、完全な方法がなく、實物大の寫真をとつて永久に傳へることになつた。

天壽國曼荼羅

聖德太子の  
薨後、太子の  
妃が追慕の  
ためにつくら  
れたもの。こ  
れは、我が國  
最古の刺繡  
畫である。

飛鳥時代

慈善事業



處に寺院の建立されるものも多く、造寺造佛の職工も朝鮮より來り、我が國にも鳥佛師の如き名工があらはれ、所謂美術史上の飛鳥時代をつくつたが、何れも大陸文化の風をうけたものであつた。また一般の思想にも影響したところが大きく、佛教の説く慈悲の精神は、やがて諸寺を中心に慈善事業を起すやうになり、民心をやはらげる事が大であつた。

研究に於てみづから經文を講じ給ひ、我が國情に適するやうに説かれた程で、我が國文化の發達に大なる御功績があつた。かくて太子の御建立になる四天王寺、法隆寺は國運發展の威容を示し、また之にならつて諸

## 二 支那との交通

**聖徳太子の外交** 支那の文物は多く朝鮮半島から傳はつてゐたが、半島には次第に内争がはげしくなつて、その文物に見るべきものが少くなり、また我が文化の程度も高くなつたので、直接、支那との交渉が必要になつてきた。當時支那には隋が起つて全國を統一し、その制度はよく整ひ、文化も立派であつたので、太子は隋と國交を結んで、その文物の長所をとり入れようとなされた。そこで小野妹子を使として國書を御送りになつたが、あくまでも對等の禮を以て交り、國家としての面目を維持された。太子はまた高向玄理・南淵請安・僧旻などを留學生として妹子に従はしめられたが、其の後も我が國人の留學する者多く、隋が亡んで唐が起つても彼等は風浪の難を凌いで渡航し、中には留學すること三十餘年にわたる者さへあり、歸朝の後にはその習得した知識により、我が國

## 隋との國交

## 唐との國交

の制度・文物などあらゆる方面の改革進歩に貢獻するところが大であつた。

## 三 政治の改革

## 社會制度

## 社會改革の必要

上古の我が社會は血筋を以て區別された氏の團體からなり、各氏の人々は直接、氏上ウジノカミによつてまとめられてゐた。また職業は氏毎に定まつて代々世襲するならばして、たとへ才能のある者でも家柄の低い者は上の官につくことができなかつた。かくて家柄のよい者は地位が高く、朝廷に仕へて益、勢力を得、他の小さな氏を併せて多くの土地、人民を私有するに至つた。蘇我氏の如きは最も甚しく、物部氏を滅ぼしてその富を收め、政權を専らにし、やがて臣下としての本分を忘れた行爲をさへなすに至つた。また大陸文化の影響をうけて社會が進歩した時代には、この世襲の制度は不適當な點が多かつた。

冠位十二階  
十七條憲法

蘇我氏の無道

聖徳太子の御改革 聖徳太子はこの弊害を改めようと思召され、冠位十二階を定めて功ある者に之を與へ、以て人材登用の途を御ひらきになり、また十七條憲法を御つくりになつて官民を戒め、國民たるの道を親切に教へたまうた。「詔をうけては必ずつゝしめ、」國に二人の君なく、民に二人の主なしなどの條を始めとし、我が國體の精神に儒佛の長所を巧みに取り入れ、穩かに政治の改革を圖り給うたのである。蘇我氏の横暴も太子の御徳に抑へられてゐたが、不幸にも太子は中道に薨じ給うたので、改革の御意志も果し給はず、却つて蘇我蝦夷、入鹿親子の無道がつより、太子の御子山背大兄王の御一族をさへ滅ぼし奉つた。

蘇我氏滅ぶ

中大兄皇子の御英斷 中大兄皇子は英明にましまし、蘇我氏の無道を憤りたまひ、志を同じくする中臣鎌足等と力を協せ、皇極天皇の四年、三韓使節の朝貢の日を期して敢然蘇我氏を倒し、以て政

治の一大改革を行はうとせられた。

### 神代と上代の概括

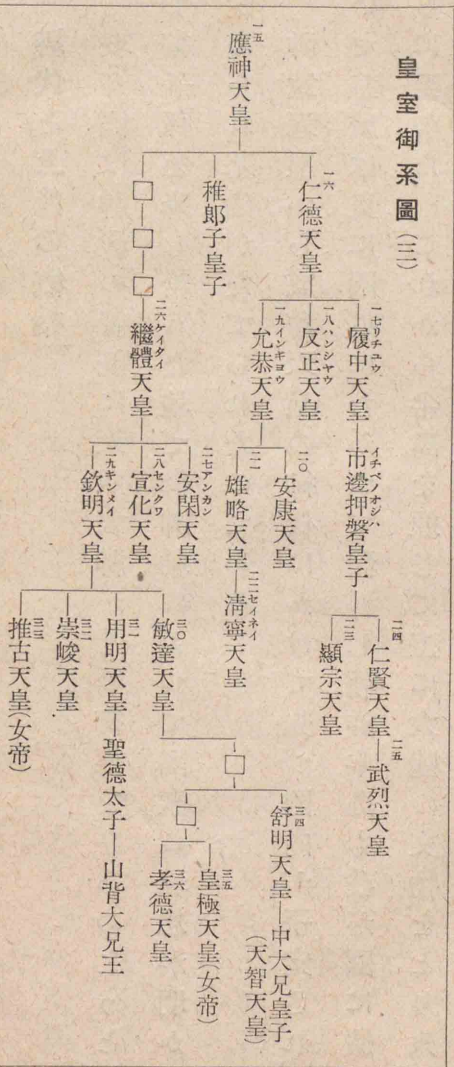
我が國は神代の昔、既に天照大神がその御徳をひろめようとして御子孫を降し給うた地で、御神勅によつて國家の理想が明かに定められ、基礎がたてられたのである。

神武天皇から成務天皇の御代にかけて先づ國內が平定され、ついで皇威は更に國外にむかつて發展し、朝鮮半島も我が國に服するに至つた。これから半島を通じて盛に大陸の文物をとり入れたので、我が國の進展が著しく、聖徳太子は支那との國交を開いて、直接その文物の輸入に力を致されたので、制度・風俗が大いに改まつた。然るにこの間、半島は次第に治め難くなり、また國內では諸豪族の争があり、やがて蘇我氏が勝つて獨り榮えたが、専横のあまり無道の行多く、國政を私し、臣道をさへ誤らうとしたので、穩かな

改革は困難となり、こゝに中大兄皇子の御英斷が行はれたのである。

上代に於ては神功皇后の偉大な御事蹟や、推古天皇が最初の女帝として、重大な時局にたち給うた事等あり、當時の女性が軍事上政治上にも立派な活動をした事がうかゞひ知られる。

皇室御系圖(三)



(一) 成務	五三	七八三	天皇の東國御巡幸。
(二) 仲哀	五二	七八六	御諸別王を東國に派遣せらる。
(三) 應神	八三	七九五	國・縣・邑里を分ち、國造・縣主・稻置等を増置せらる。
(四) 應神	九二	八五三	熊襲親征。
(五) 應神	九二	八六〇	神功皇后の新羅親征。
(六) 應神	九二	八六一	神功皇后攝政の始。
(七) 應神	九三	九四三	百濟縫衣女を貢す。弓月君歸化す。

國力の發展 (半島の經營)

服屬

第一神代年表

神代	時代	天皇	紀元	重要事項	概	要	對外關係
(一)神	天	武靖	元	橿原宮に即位式を擧げらる。	皇威發展		
(二)綏	皇	德寧	元	御鏡・御劔を笠縫邑に遷さる。	皇大神宮		
(三)安	代	昭德	元	四道將軍を派遣せらる。	皇大神宮		
(四)懿	一	安靈	元	初めて人民に調を課す。	皇大神宮		
(五)孝	第	昭安	元	任那初めて入貢す。	皇大神宮		
(六)孝	期	靈安	元	御鏡・御劔を伊勢に遷さる。	皇大神宮		
(七)孝	一	昭安	元	殉死を禁ず。	皇大神宮		
(八)孝	統	靈安	元	熊襲親征。	皇大神宮		
(九)開	一	靈安	元	武内宿禰の東北視察。	皇大神宮		
(一〇)崇	第	靈安	元	日本武尊の蝦夷征伐。	皇大神宮		
(一一)垂	一	仁垂	元	日本武尊の葬去。	皇大神宮		
(一二)景	時	行景	元	天皇の東國御巡幸。	皇大神宮		
(一三)成	代	務成	元	御諸別王を東國に派遣せらる。	皇大神宮		
(一四)仲	上	哀仲	元	日本武尊の葬去。	皇大神宮		
(一五)應	代	神應	元	熊襲親征。	皇大神宮		
(一六)履		德仁	元	神功皇后の新羅親征。	皇大神宮		
(一七)反		中	元	神功皇后攝政の始。	皇大神宮		
(一八)允		正	元	百濟縫衣女を貢す。弓月君歸化す。	皇大神宮		
(一九)安		恭	元	阿直岐來朝す。	皇大神宮		
(二〇)雄		康	元	王仁來朝し、論語・千字文を獻す。	皇大神宮		
(二一)清		略	元	阿知使主等來朝歸化す。	皇大神宮		
(二二)顯		宗	元	難波に都し給ふ。	皇大神宮		
(二三)仁		賢	元	三年間調等を免じ給ふ。	皇大神宮		
(二四)武		烈	元	使を吳に遣はし給ふ。	皇大神宮		
(二五)武		武	元	豊受大神を伊勢に祀り給ふ。	皇大神宮		

半島 國内 平定 半島 服屬

半島 國内 平定 半島 服屬

半島 國内 平定 半島 服屬

半島 國内 平定 半島 服屬

半島 國内 平定 半島 服屬

半島 國内 平定 半島 服屬

半島 國内 平定 半島 服屬

半島 國内 平定 半島 服屬

半島 國内 平定 半島 服屬

半島 國内 平定 半島 服屬

半島 國内 平定 半島 服屬

半島 國内 平定 半島 服屬

半島 國内 平定 半島 服屬

半島 國内 平定 半島 服屬

半島 國内 平定 半島 服屬

半島 國内 平定 半島 服屬

半島 國内 平定 半島 服屬

半島 國内 平定 半島 服屬

第一神代と上代年表

神代	時代		紀元	重要事項	概	要	對外關係
	天	皇					
(一)神武元	神武元	崇神	元	橿原宮に即位式を挙げらる。	皇威發展	國內平定	半島
(二)崇神	崇神	垂仁	五六九	御鏡・御劔を笠縫邑に遷さる。	皇大神宮	國內平定	半島
(三)垂仁	垂仁	景行	五七三	四道將軍を派遣せらる。			
(四)景行	景行	成務	五七八	初めて人民に調を課す。	國力の發展 (半島の經營)	國內平定	半島
(五)成務	成務	仲哀	六二八	任那初めて入貢す。			
(六)仲哀	仲哀	應神	六五九	御鏡・御劔を伊勢に遷さる。	産業の發展	國內平定	半島
(七)應神	應神	仁德	七四二	熊襲親征。			
(八)仁德	仁德	雄略	七五五	武内宿禰の東北視察。	國力の發展 (半島の經營)	國內平定	半島
(九)雄略	雄略	孝德	七五七	日本武尊の熊襲征伐。			
(一〇)孝德	孝德	孝安	七七三	日本武尊の蝦夷征伐。	産業の發展	國內平定	半島
(一一)孝安	孝安	孝靈	七七七	日本武尊の薨去。			
(一二)孝靈	孝靈	孝昭	七八三	天皇の東國御巡幸。	國力の發展 (半島の經營)	國內平定	半島
(一三)孝昭	孝昭	孝安	七八六	御諸別王を東國に派遣せらる。			
(一四)孝安	孝安	孝德	七九五	國・縣・邑里を分ち、國造・縣主・稻置等を増置せらる。	産業の發展	國內平定	半島
(一五)孝德	孝德	孝德	八五三	熊襲親征。			
(一六)孝德	孝德	孝德	八六〇	神功皇后の新羅親征。	産業の發展	國內平定	半島
(一七)孝德	孝德	孝德	八六一	神功皇后攝政の始。			
(一八)孝德	孝德	孝德	八四三	百濟縫衣女を貢す。弓月君歸化す。	産業の發展	國內平定	半島
(一九)孝德	孝德	孝德	九四四	阿直岐來朝す。			
(二〇)孝德	孝德	孝德	九四五	王仁來朝し、論語・千字文を獻ず。	産業の發展	國內平定	半島
(二一)孝德	孝德	孝德	九四九	阿知使主等來朝歸化す。			
(二二)孝德	孝德	孝德	九七三	難波に都し給ふ。	産業の發展	國內平定	半島
(二三)孝德	孝德	孝德	七七六	三年間調等を免じ給ふ。			
(二四)孝德	孝德	孝德	一一二二	使を吳に遣はし給ふ。	産業の發展	國內平定	半島
(二五)孝德	孝德	孝德	一一二二	豐受大神を伊勢に祀り給ふ。			
(二六)孝德	孝德	孝德	一一二八	司馬達等來朝す。	産業の發展	國內平定	半島
(二七)孝德	孝德	孝德	一一二八	近江毛野、新羅征伐の命を受く。筑紫國造磐井叛す。			
(二八)孝德	孝德	孝德	一一八二	百濟王佛經・佛像を獻ず。	産業の發展	國內平定	半島
(二九)孝德	孝德	孝德	一一八二	百濟曆・醫・易等の博士來朝。			
(三〇)孝德	孝德	孝德	一一八七	任那の日本府亡ぶ。	産業の發展	國內平定	半島
(三一)孝德	孝德	孝德	一一八七	百濟寺工・佛工等來朝。			
(三二)孝德	孝德	孝德	一一八七	物部氏亡ぶ。	産業の發展	國內平定	半島
(三三)孝德	孝德	孝德	一一八七	聖德太子攝政となり給ふ。四天王寺を建つ。			
(三四)孝德	孝德	孝德	一一八七	冠位十二階を定む。	産業の發展	國內平定	半島
(三五)孝德	孝德	孝德	一一八七	十七條憲法を定む。			
(三六)孝德	孝德	孝德	一一八七	小野妹子を隋に遣はす。法隆寺を建つ。	産業の發展	國內平定	半島
(三七)孝德	孝德	孝德	一一八七	妹子歸朝し、隋使來る。妹子再び隋に赴く。			
(三八)孝德	孝德	孝德	一一八七	隋亡び、唐興る。	産業の發展	國內平定	半島
(三九)孝德	孝德	孝德	一一八七	聖德太子薨す。			
(四〇)孝德	孝德	孝德	一一八七	遣唐使の始。	産業の發展	國內平定	半島
(四一)孝德	孝德	孝德	一一八七	唐使來朝し、留學僧等も共に歸朝す。			
(四二)孝德	孝德	孝德	一一八七	留學生高向玄理等歸朝す。	産業の發展	國內平定	半島
(四三)孝德	孝德	孝德	一一八七	蘇我入鹿、山背大兄王を害し奉る。			
(四四)孝德	孝德	孝德	一一八七	蘇我氏亡ぶ。	産業の發展	國內平定	半島
(四五)孝德	孝德	孝德	一一八七	蘇我氏無道、滅ぶ。			

半島より文化の輸入

佛敎  
聖德太子(攝政)内治  
外交・隋との交通  
支那との關係  
唐との交通

蘇我氏專權時代

日本府滅ぶ

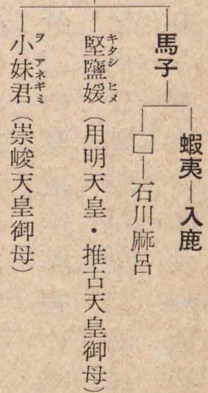
經營困難となる

服屬

唐 隋 支那

蘇我氏系圖

武内宿禰—蘇我石川—滿智—韓子—高麗—**稻目**





## 第二篇 大化改新と奈良時代

### 第一章 大化改新と律令の制定

政治改新の御精神 蘇我氏の滅亡によつて政治上有力な豪族が滅んだので、従来の制度を改め、改新の政治をする時が至つた。孝徳天皇が御位につかれるや、始めて年號を定めて大化とし、中大

兄皇子は皇太子として、鎌足と共に改新の中心にお立ちになつた。その御精神は豪族の専横に弊害の多くなつた政治を、再び神勅の御精神に基づいて朝廷中心の政治に改め、世襲の制度を廢して人材をあげ、當時中央集權の



藤原鎌足

よく行はれた唐の制度を採用して制度を一新せんとするにあつた。皇太子は南淵請安について學ばれ、また改革の顧問として唐より歸朝した高向玄理、僧旻をあげてその準備を進められた。

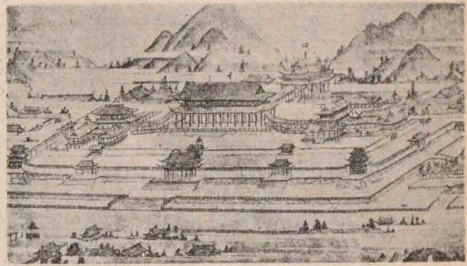
**改新の内容** 改新の御精神は大化二年の詔によつて内容が明かに示された。その主要な點は、(一)有力者の私有してゐた土地人民を全部公地、公民とし、(二)戸籍を作り、班田收授の法により人毎に口分田を給し、(三)官職の世襲を廢し、(四)中央の官制を定め、地方には國司郡司を置いて治めしめ、(五)税制を定めて租庸調の法を設けたこと等である。これ等は實に空前の大改革で、その實行には大困難が横たはつてゐたが、皇太子は「天に二日なく、國に二王なし。この故に天下を兼ね併せて萬民を使ふべきはたゞ天皇のみ」と仰せられ、人々に先だつて御所有の土地、人民を朝廷に獻じ、新政の實行を促し給うた。聖徳太子の改革の御精神はこゝに實

皇太子の御盡力



近江令

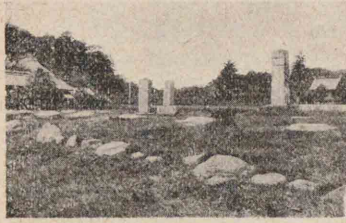
太宰府想像圖



太宰府都府樓

福岡縣太宰府附近にある。

大寶律令



臣鎌足に命じて近江令を定めしめ、教育の制をつくるなど改新の大業をすゝめられ、また西國の防備を固めて國防を嚴にされたが、唐とは國交を復し、その文化の輸入につとめられた。鎌足は天皇の御信任あつく、その功によつて藤原の姓を賜はり、子孫は朝廷に仕へて大いに榮えた。

**律令の整備** 天武天皇また國政の改革に御力を注ぎ、近江令の改定をはじめ、諸制度をととのへられたが、文武天皇の御代に至つて忍壁親王及び鎌足の子不比等に勅して法令の整備をなさしめ、遂に大寶律令となつて完成した。大化改新以來の御歴代の御苦心が此處に成果を得たのである。  
**律令の内容** 大寶律令は唐の制度をもとにし

官制

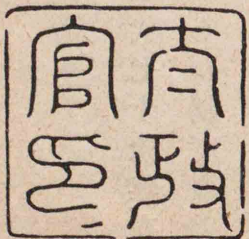
軍備

教育

刑法

太政官印

てゐるが、尙我が國風に適するやうに改められたところが少くない。令は官制で中央には神祇官、太政官を置き、太政官のもとに八省を屬さしめてゐるが、神祇官を上地位に置いて、わが敬神祭政一致の風を重んじた。また地方には國司、郡司を置き、九州には特別に太宰府を置いて國防外交のことを統べしめ、軍備は一般より徴兵し、都に衛府、諸國に軍團、邊要の地に防人を置いた。また新制度のもとに政務を行ふ官吏を養成するため、都に大學、諸國に國學を設けて貴族、官吏の子弟を教育した。律は刑法で笞杖、徒、流、死の五階級にわけ、君父に對する罪を特に重くし、忠孝の道の大切なことを示した。これより律令をもとに全國が統一され、すべての政令が朝廷より出る中央集權の制が確立した。



## 第二章 奈良時代

### 一 統一の政治と佛教

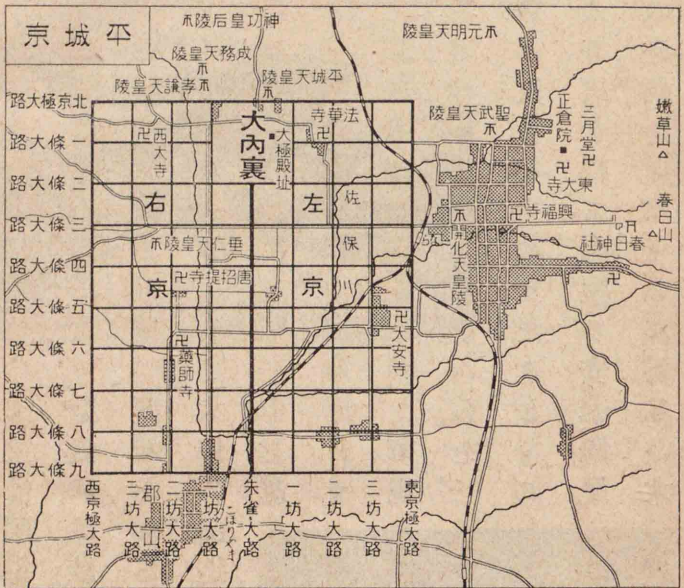
**奈良時代** 奈良時代とは元明天皇の御代から七代七十餘年、奈良に都せられた間をいひ、大寶律令は完成し、全國はその制度のもとに統一の政治が行はれ、佛教に、學問に、經濟に、美術工藝に、すべて華々しい唐の文化をうけてその極勢を示した。

**奈良の都** 元明天皇の御時、奈良の地に都をお奠めになつた。それまでは皇居を一代毎に代へられる慣はしであつたが、國力の増進と中央集權の完成で、一層政務が複雑になり、また唐との關係も繁くなつてきたので、交通の便ある地に立派な都を經營する必要を生じた。こゝに於て唐の都城の制にならつて奈良の地に宮殿をはじめ、諸官省の建物をととのへて壯大な構につくり、國家の

平城京

九州・沖繩の服屬

渤海入貢



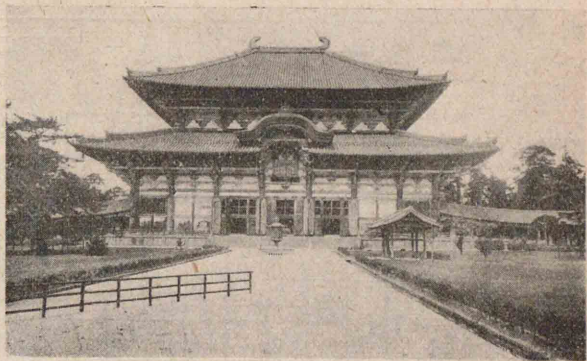
威嚴を示し、政治上の便宜をおはかりになつた。之を平城京といひ、統一の政治を行ふ中心となつた。

**國威の發展** この新興の意氣は更に邊地にも及び、元正天皇の御代には九州隼人の服屬をはじめとして沖繩一帯も皇化に浴し、また聖武天皇の御代には今の滿洲國の地に起つた渤海の入貢があつた。

國分寺  
國分尼寺

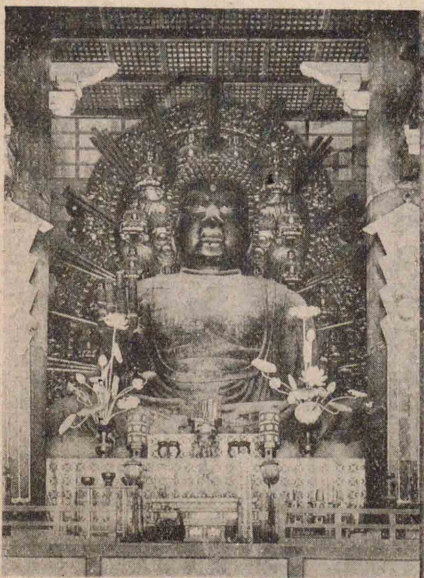
東大寺

大佛



寶の奴と仰せ給うたこともこの加護を得て國家の安泰、國民の幸福を願はせられた尊い大

聖武天皇と佛教 奈良時代に於て最も華々しく發達したのは佛教である。聖武天皇は國毎に國分寺・國分尼寺を建て、特に奈良には壯大な東大寺を造つて大佛を安置せられる等、佛教の興隆につくされた。大佛の鑄造には天皇親しく御袖をもつて土を運ばれ、また御親らを三



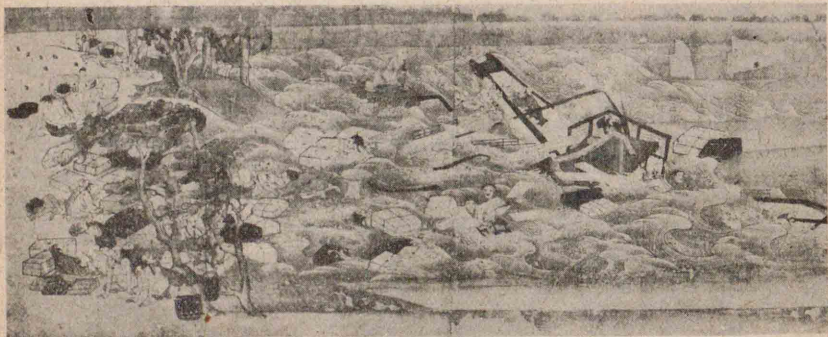
光明皇后

鑑真來朝圖

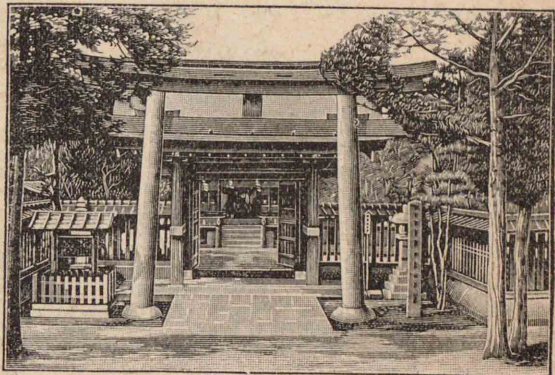
唐の名僧、天平正寶五年來朝、唐招提寺を開く

御心に出るのであつた。されば造寺造佛にあつて色々の御心勞を重ね給ひ、その費用の増大するにつけても常に國民の苦しみを偲ばれ、官吏を戒められた。

慈悲の教と慈善事業 佛教が隆盛を極めると共にその説く慈悲のおしへは社會にひろまつた。光明皇后は御仁徳高く、篤く佛を信じ、悲田院・施藥院を設けて、御親ら貧民孤兒の救済にあたらせ給ひ、和氣清麻呂の姉廣虫は出家の後、多くの棄兒を養育した。また多くの寺々は國家貴族の保護をうけて何れも都の附近に建てられ、僧侶は學問の研究や國利民福の祈禱、社會の教化につくし、行基の如



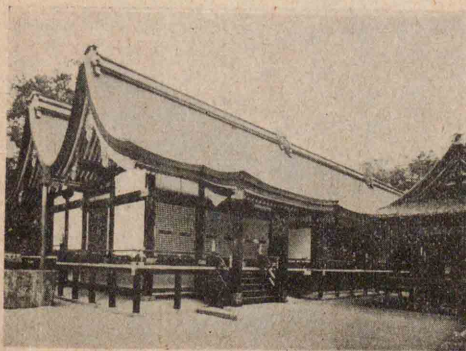
護王神社  
和氣清麻呂  
を祀る。



く徳識高く、諸國を歩いて教化のかたはら、諸處に橋をかけ、道を修めるなど社會事業に貢獻し、世の尊信をうけた僧侶も少くない、また印度・支那から遙かに海を渡つて來朝し、教化につくした名僧もあつた。

### 僧侶の僭越

しかるに朝廷の御保護に慣れた僧侶の中には、その身分を忘れて政治に干渉し、わがまゝな振舞をなす者も出た。稱徳天皇の御代、僧道鏡は勢力のあるまゝに、遂に皇位に上らうとする非望をさへ抱くに至つた。和氣清麻呂は禍のその身に及ぶの



宇佐八幡宮

清麻呂の誠忠

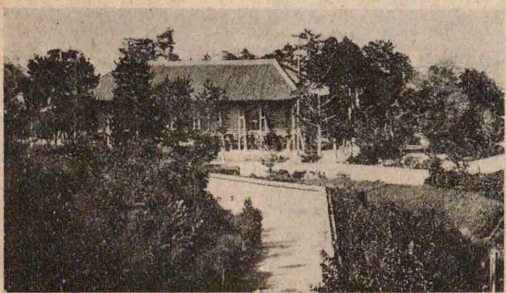
### 改革の必要

も恐れず、國家のため敢然として立ち、宇佐八幡の神教を奏上して君臣の分を説き、道鏡の野心を挫いた。大神の御神勅がここに輝き、國民を指導し給うたのである。しかもこの間常に背後にあつて清麻呂をたすけあげましたのは姉の廣虫であつた。然し諸寺の勢力がなほ強く、政治に干渉して互に争ひ、或は朝臣と衝突し、また造寺・造佛のため國費の不足をきたす等、多くの弊害を生じたので、再び政治の改革をなす必要がおこつた。

## 二 唐風の文化

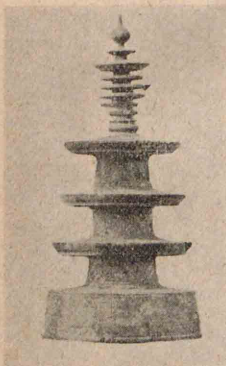
### 佛教と美術工藝

この時代の佛教は輸入されたまゝの南都六宗であつたが、その隆盛は造



百萬塔

中に印版の經文を収めて諸大寺に寄せられた



天平時代

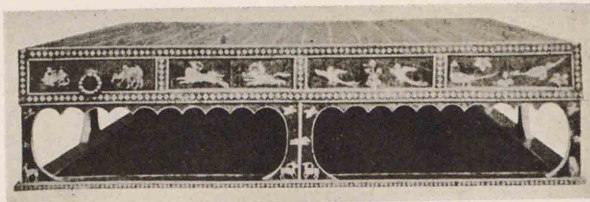
吉祥天畫像  
藥師寺藏



天皇の御用度品等が帝室の御物として今なほ多く残つてゐるが、何れも大陸の影響をうけた當時の美術工藝の發達を偲び得るものである。

**學問の進歩** 學問もまた唐の風をうけて漢詩文が盛で、唐に學んで名聲を博した吉備眞備や阿倍仲麻呂等が出たが、また漢字の音訓を利用して國語をうつす事も盛になり、我が古來の和歌を集めた萬葉集ができ、雄健な歌が多く、柿本人麻呂山部赤人・大伴家持などは殊に知られた歌人であつた。

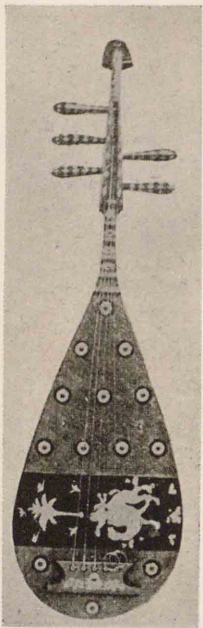
漢學  
和歌



(一)



(四)



(二)



(三)

一 紫檀棊局

紫檀材の碁盤、目盛や側面・脚部の飾りには精巧な象牙をはめこんである。

二 螺鈿紫檀五弦琵琶

貝と龜甲とを用いた螺鈿の琵琶。

三 鳥毛立女屏風圖

顔面と手とは粉地に彩色して描いてあるが、著衣と配景の樹石には鳥の羽を貼りつけてあつたのでこの名がある。

以上三點は何れも正倉院の御物で當時の美術・工藝の進歩を物語つてゐる。

四 日光菩薩像

東大寺法華堂に日光・月光兩菩薩がある。寫眞は日光菩薩で端嚴な姿の中に温雅な風貌がうかがはれる。

田子の浦ゆうちいでて見れば眞白にぞ

富士の高嶺に雪は降りける 山部 赤人

また萬葉集の中には女流歌人も多く、額田女王ヌカダノミコは殊に有名である。

にぎたづにふなのりせんと月待てば

しほもかなひぬいまはこぎてな。額田女王

**國史の編修** 國史の編修は國家の尊嚴を悟つて之を傳へんとする國民の自覺のあらはれて、唐の文化を知るにつけて我が國史を明かにしようとする風が強くなつてきた。聖德太子が編修された國史は不幸にも傳はらなかつたが、天武天皇は之を遺憾に思召され、再び編修を御企てになつた。元明天皇はその御志を繼いで、太安麻呂オホヤスヲに命じ、稗田阿禮ヒトエダノアレイの誦み習つた昔の傳を漢字に記さしめ給うた。これを古事記コトジキといひ、現存する最古の史書で古語がよく保存されてゐる。元正天皇は更に舍人親王等トネリに勅して當時の

古事記



日本書紀

風土記

貨幣

開墾

和同開珎

古記録を考へあはせて日本書紀を撰ばしめられた。これが平安時代の中頃までつゞいて編修せられた六國史の一つをなす正史である。また中央集權が確立し、地方の事情を知る必要があつたので、元明天皇は諸國の地理物産傳説などを記して献上せしめられた。これを風土記といひ、今日に残る最古の地理書である。

**産業の發達** 一般の進歩につれて産業の發達も著しく、銅・鐵・金などを採る術も進んだ。元明天皇の御代には物々交換の不便を改めるため、和同開珎といふ貨幣が鑄られ、聖武天皇の御代頃、盛に金銅の佛像が出來たのも當時の鑛産物の増加を示してゐる。また農蠶機織の術も進み、開墾地の私有も許され、盛に開墾が獎勵された。



**風俗の華美** かくて風俗も大陸の風をうけて華美になり、都には碧い瓦に朱塗の柱の美しい寺院や

宮殿が聳え、一般の家屋もまた美しく並びたち、大路小路を通る都の子女は綾羅長袖の衣を身にまといつて

青丹よし奈良の都は咲く花の 匂ふが如く今さかりなり  
白銀の目貫の太刀を下げ佩きて 奈良の都をねるは誰が子ぞ

と、その全盛をうたはれるに至つた。然しこれ程の大きな變化を我が國に與へた文化もまだ隋唐の模倣で、我が國風にしつくりと融け合つてゐなかつた。都の華々しさにひきかへ、地方は未だ開けず、貧しい不便な生活が依然として續けられ、

家があれば筥にもる飯を草枕 旅にしあれば椎の葉にもる  
と歌はれた如く都と田舎との文化に大きな差があつた。

大化改新より奈良時代までの概括

この時代は唐と盛に交通して、その文化を入れた時代である。大化改新より大寶律令の制定までは法令制度に革新を重ねられ



第二 年表 大化改新より奈良時代年表

時代	律令制定時代	奈良時代
天	(三六) 孝 (三七) 齊 (三八) 天	(四三) 聖 (四四) 元
皇	德 明 智	武 正 武
年	大化 即位 即位	神龜 養老 靈龜
號	元 元 元	元 元 元
紀	元 元 元	元 元 元
元	一三〇五 一三〇六 一三〇九	一三九〇 一三九一 一三九二
重要事項	初めて年號を建つ。 改新の大詔を發せらる。 八省・百官を置く。 阿倍比羅夫蝦夷・肅慎を討つ。 比羅夫の蝦夷再征。 比羅夫の肅慎再征。 新羅征討のため九州に幸す。 百濟亡ぶ。 天津遷都。 高句麗亡ぶ。 藤原鎌足薨す。	沖繩の人民入貢す。 大寶律令成る。 和同開珎。 奈良奠都。 太安麻呂古事記を上る。 風土記を上らしめらる。渤海の建國。 阿倍仲麻呂・吉備眞備等唐に留學す。 藤原不比等、大寶律令を修正す。 日本書紀成る。 渤海初めて入貢す。 藤原光明子を皇后に立てらる。 施薬院・悲田院を設く。 諸國に國分寺を建てしむ。 大佛を造らしむ。 東大寺大佛の鑄造を始む。 唐僧鑑眞來朝す。
概	大化の新政始まる 皇威北日本海に及ぶ 半島經營中止	大化の新政完成す 奈良時代 唐風の文化
要		
對外關係	半島 支那 唐	經營中止
		るれ入を化文に盛りよに生學留

(四六) 孝  
(四七) 淳  
(四八) 稱  
(四九) 光

仁 德 仁 謙

神龜  
養老  
靈龜

元  
元  
元

一四二五  
一四二六  
一四二九  
一四三〇

僧道鏡太政大臣禪師となる。  
和氣清麻呂・同廣蟲流さる。  
道鏡を逐ひ、清麻呂・廣蟲を召還す。

僧侶の我儘  
佛教の隆盛

(四五) 聖  
(四六) 元

武 正

神龜  
養老  
靈龜

元  
元  
元

一三八七  
一三八八  
一三八九

渤海初めて入貢す。  
藤原光明子を皇后に立てらる。  
施薬院・悲田院を設く。  
諸國に國分寺を建てしむ。  
大佛を造らしむ。  
東大寺大佛の鑄造を始む。  
唐僧鑑眞來朝す。

大化の新政完成す  
奈良時代  
唐風の文化

(四〇) 天  
(四一) 持  
(四二) 文  
(四三) 元

明 武 統 武 文

即位  
大寶  
和銅

元  
元  
元

一三五九  
一三六一  
一三六八  
一三七〇

沖繩の人民入貢す。  
大寶律令成る。  
和同開珎。  
奈良奠都。  
太安麻呂古事記を上る。  
風土記を上らしめらる。渤海の建國。  
阿倍仲麻呂・吉備眞備等唐に留學す。  
藤原不比等、大寶律令を修正す。  
日本書紀成る。  
渤海初めて入貢す。  
藤原光明子を皇后に立てらる。  
施薬院・悲田院を設く。  
諸國に國分寺を建てしむ。  
大佛を造らしむ。  
東大寺大佛の鑄造を始む。  
唐僧鑑眞來朝す。

大化の新政完成す  
奈良時代  
唐風の文化

(三五) 孝  
(三六) 天  
(三七) 齊

明 智

即位  
即位

元  
元  
元

一三〇五  
一三〇六  
一三〇九

初めて年號を建つ。  
改新の大詔を發せらる。  
八省・百官を置く。  
阿倍比羅夫蝦夷・肅慎を討つ。  
比羅夫の蝦夷再征。  
比羅夫の肅慎再征。  
新羅征討のため九州に幸す。  
百濟亡ぶ。  
天津遷都。  
高句麗亡ぶ。  
藤原鎌足薨す。

大化の新政始まる  
皇威北日本海に及ぶ  
半島經營中止

半島  
支那  
唐

經營中止

(四三) 聖  
(四四) 元

明 武 統 武 文

即位  
大寶  
和銅

元  
元  
元

一三五九  
一三六一  
一三六八  
一三七〇

沖繩の人民入貢す。  
大寶律令成る。  
和同開珎。  
奈良奠都。  
太安麻呂古事記を上る。  
風土記を上らしめらる。渤海の建國。  
阿倍仲麻呂・吉備眞備等唐に留學す。  
藤原不比等、大寶律令を修正す。  
日本書紀成る。  
渤海初めて入貢す。  
藤原光明子を皇后に立てらる。  
施薬院・悲田院を設く。  
諸國に國分寺を建てしむ。  
大佛を造らしむ。  
東大寺大佛の鑄造を始む。  
唐僧鑑眞來朝す。

大化の新政完成す  
奈良時代  
唐風の文化

(三六) 孝  
(三七) 齊  
(三八) 天

明 智

即位  
即位

元  
元  
元

一三〇五  
一三〇六  
一三〇九

初めて年號を建つ。  
改新の大詔を發せらる。  
八省・百官を置く。  
阿倍比羅夫蝦夷・肅慎を討つ。  
比羅夫の蝦夷再征。  
比羅夫の肅慎再征。  
新羅征討のため九州に幸す。  
百濟亡ぶ。  
天津遷都。  
高句麗亡ぶ。  
藤原鎌足薨す。

大化の新政始まる  
皇威北日本海に及ぶ  
半島經營中止

半島  
支那  
唐

經營中止

第二 年表 大化改新より奈良時代年表

太字は小學國史年表にあるもの

半島 支那 唐

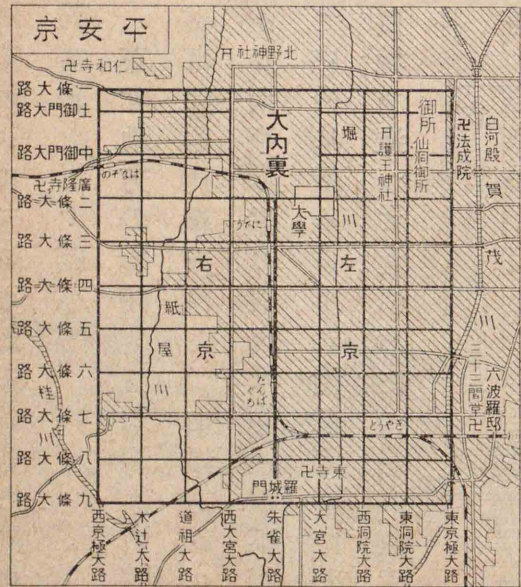
經營中止

るれ入を化文に盛りよに生學留

第三篇 平安時代

第一章 政治教學の改革平安時代の初期

平安奠都 桓武天皇即位せられるや、奈良時代の弊害を改め、國政を一新して皇威の發展を圖らうと思召され、山川美しく、四方の國々から上つて來るのに便利な今の京都の地に都を御遷しになつた。之を平安京と申し、平城京よりも規模が大きく、よく整つて莊嚴を極め、



桓武天皇



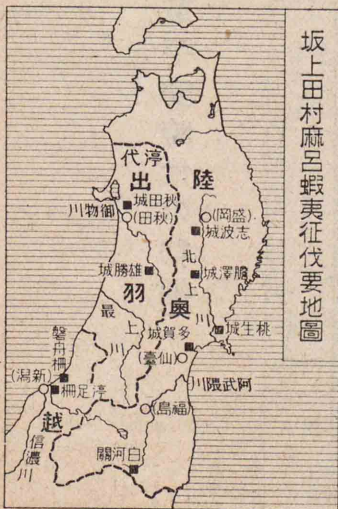
坂上田村麻呂

聖武天皇の御代、陸奥の國に多賀城を造つて之にあつたが、桓武天皇は坂上田村麻呂を征夷大將軍として鎮めしめ、膽澤城に鎮守府を置かれてからは、東北は全く皇威に浴し、その開拓が著しく進んだ。

制度の改正

天皇は地方の開

明治の初に至るまで千餘年の間、概ね帝都として續いた。  
**東北地方の開拓** 日本海岸の蝦夷は阿倍比羅夫によつて鎮定されたが、太平洋岸の蝦夷は交通が不便で充分に鎮める事が困難であつた。



坂上田村麻呂蝦夷征伐要地圖

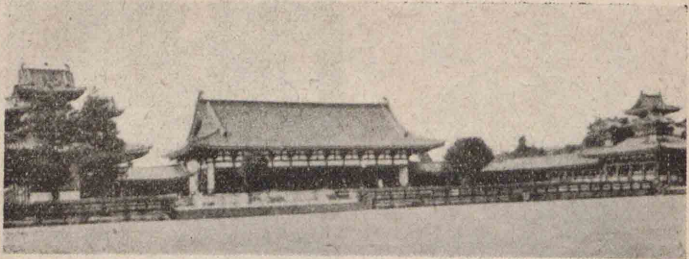
最澄

平安神宮

京都にあり、桓武天皇の御代に遷されたものである。

藏人所  
檢非違使

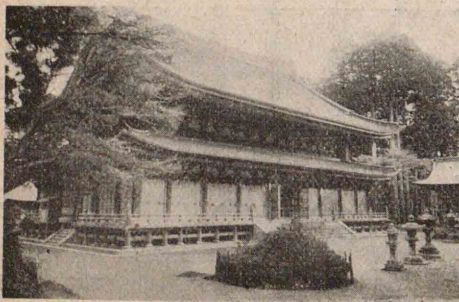
延暦寺



拓と民力を養ふことに留意あそばされ、官吏を戒めてその理非を調査せしめられたが、嵯峨天皇は時勢の變化に伴ひ、新に藏人所を置いて機密の文書をあつかはせ、檢非違使を置いて京都の警察裁判をつかさどらしめ給うた。かくて律令は國情に適するやうに次第に改められてきた。

佛教の改革

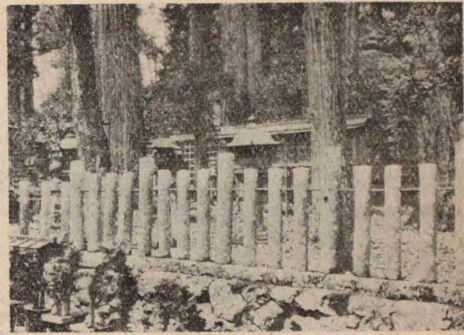
奈良時代には都の諸寺が勢力を争ひ、わがまゝな僧が出て弊害が甚しかつた。



天台宗  
眞言宗  
高野山奥院廟所

空海

漢文學



ので、桓武天皇は最澄・空海の二名僧により、その革新を圖り給うた。二人は共に唐に渡つて佛教を學び、歸朝の後、前者は天台宗、後者は眞言宗を開いたが、この兩宗は何れも深山に堂塔を設けて教理の研究と國家鎮護の祈禱につとめ、前代の佛教のやうに都に寺を建てて政治に關係することを改めた。また二人は世間をめぐつて、布教のかたはら社會事業に力を盡したので、世人はその徳を慕ひ、その教へは益普及するに至つた。

**學問教育** 當時なほ唐との交通は盛に行はれ、その文化を取り入れたので、學問は唐の影響をうけて漢文學が最も隆え、嵯峨天皇は

嵯峨天皇御宸筆

空海筆

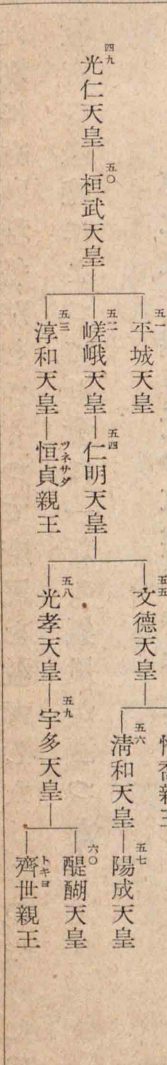
三筆  
學校

風を秦郊迎鶴為芝塞  
空蒼梧重刺去深麓霧光  
風を雲書自天解吟  
披之閱之如揭雲霧卷

と共に三筆と稱せられ、その名をうたはれ給うた。教育機關としては京に大學が備はつてゐたが、學問の隆盛に伴ひ、貴族は各學校を起してその子弟を教育し、藤原氏の勸學院などは有名で、空海は

殊に學問を好ませられ、詩文・書道をよくし給うた。學者としては小野篁・都良香などが有名で、書道に於ても唐の風をうけて名筆家多く、殊に嵯峨天皇は空海及び橘逸勢

皇室御系圖(五)



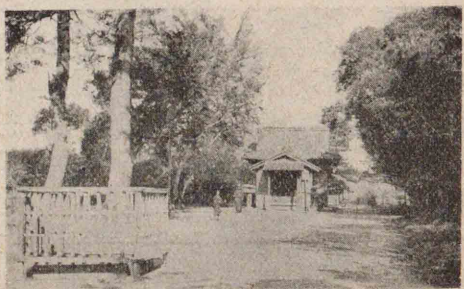
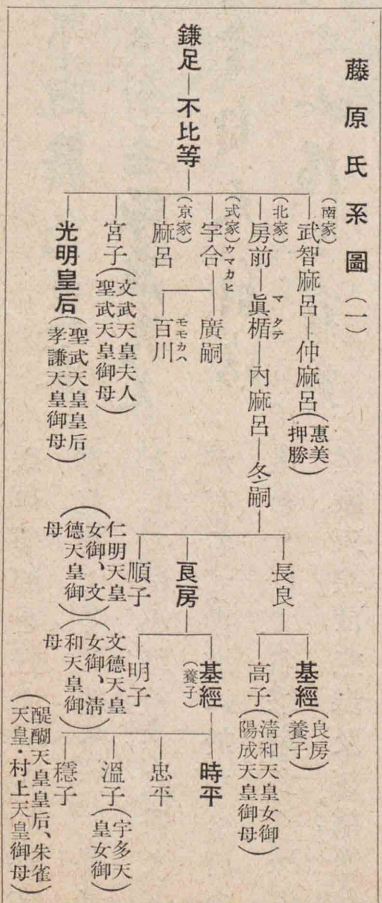
また別に綜藝種智院をつくつて庶民を教育した。このやうに學問教育の隆盛によつて社會に一新の氣風が漲つた。

### 第二章 藤原氏の專權平安時代の中期

#### 一 中央の情勢

#### 藤原氏の權勢

桓武天皇から仁明天皇に至る約七十年間は天皇が親しく政治をおとりになり、世の中がよくひきしまつたが、藤原氏が次第に勢力を得て專權を極めるやうになつてから初期の立派



太政大臣

攝政

榎

菅原道真  
住の跡  
(福岡縣)

關白

菅原道真

な政治も次第に亂れてきた。藤原氏は鎌足、不比等の功によつて一族さかえ、文德天皇の御代に良房は人臣として始めて太政大臣となり、ついで外戚として清和天皇の攝政となつた。その子基經に至り、宇多天皇は、大小の政務を悉く基經を経て奏下せよと命ぜられたので、世に之を關白と稱した。以後天皇御幼少の間は攝政となり、御成年の後には關白となる例が開かれたが、何れも藤原氏が獨占し、その一門は朝廷の外戚として高位高官にのぼり大いに威を振つた。

藤原氏の他氏排斥 宇多天皇はこの情勢を憂ひ給ひ、菅原道真をお用ひになつて藤原氏を抑へんとなさつた。醍醐天皇は父帝の御志をつぎ、藤原時平を左大臣、道實を右大臣として共に政務を

はげましめ給うたが、道眞は遂に讒せられて太宰府に遷された。然しその配流の地に於ても常に皇恩の有難さに感泣しつゝ三年にして薨じた。なほこの外に藤原氏の爲に排斥されて勢力を失つた氏も少くなく、かくて藤原氏は獨り全勢を誇るに至つた。

延喜天曆の世

かゝる間に於ても醍醐天皇が常に大御心を民政にとゞめ給ひ、寒夜に御衣を脱して民の困苦を偲ばせられた御仁慈や、村上天皇の政務に御勵みになつた御高德により、延喜天曆の聖代は後世の慕ひ奉る御代であつたが、ともすれば藤原氏の專横は天皇の御徳を覆ひ奉る事が多かつた。

御仁政

醍醐天皇



藤原氏の極盛

藤原氏に對抗する他の氏がなくなると、やがて一族、親子兄弟の間に權力争を生じたが、冷泉天皇から後冷泉天皇

藤原氏全盛

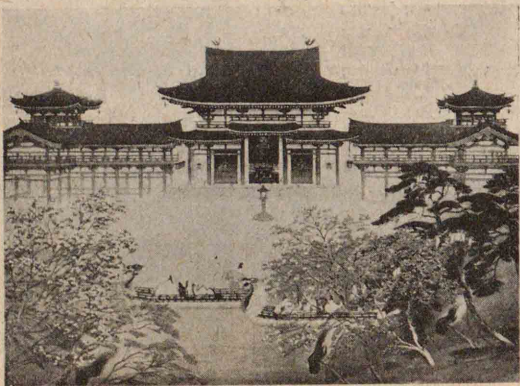
遣唐使廢止

朝臣榮華

國文學

に至る百餘年の間は全く政權を私し、道長に至つては榮華の極に達してその法成寺を建てるや、子の頼通は「公事を怠つてもこの御堂の工事を怠るな」と、役人に命じた程で、全く天下の政治と一家の私事とを混同した。國風の文化 宇多天皇の御代に遣唐使が廢せられ、間もなく唐が滅んだのでその影響をうけることが少くなり、我が國風の文化が発達するに至つた。しかも朝臣の榮華の風が著しかつたため、學問、宗教、美術、風俗に我が國風の優美な一面が強くあらはれ、ともすれば柔弱に流れんとする傾向があつた。

國文學 かくて初期に盛であつた漢文學は漸く衰へ、假名の發達に伴つて國文學が隆盛を極め、藤原氏全盛の頃にはその極に達





紫式部  
石山寺所藏  
の畫像によ

女流文學者

した。紀貫之は歌文に長じ、土佐日記を著はし、また醍醐天皇の勅を奉じて古今和歌集を撰したが、これより和歌の勅撰が屢行はれるやうになつた。この頃は女子の地位が高まり、その教養は男子をしのぐものがあり、藤原氏が競うてその女を入内せしめる際に、才女を選んでこれに侍せしめたので、多くの女流文學者が輩出したが、紫式部・清少納言は殊に有名で、その著はした源氏物語・枕草紙は國文學の模範とされてゐる。この他にも和泉式部・小式部内侍・伊勢大輔などの文才すぐれた女流が多かつた。



大江山いくのの路の遠ければ

まだふみも見ずあまのはしだて

小式部内侍



鳳凰堂本尊阿彌陀如來像



堂 鳳 鳳 院 等 平

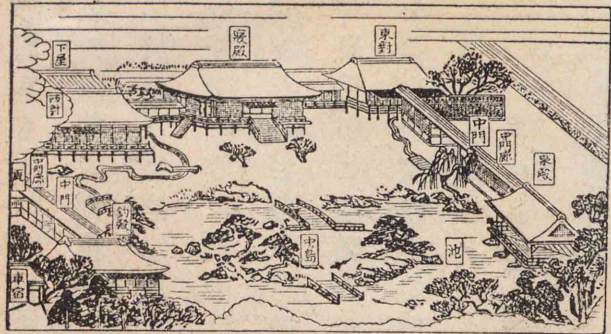
傳藤原行成筆

書道

本地垂迹説

寢殿造

平等院  
彫刻  
繪畫

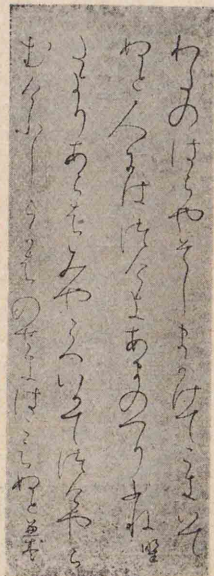


いにしへのならの都の

八重櫻けふ九重に

にほひぬるかな

伊勢大輔



書道の上にもこの風があり、草假名が発達して我が獨特のものが完成し、小野道風や藤原行成が名手として知られた。

**佛教と美術工藝** 佛教には神佛同體の説が盛になつて、傳來の佛教を漸く國風化し、また貴族の間に阿彌陀佛信仰が行はれ、美しい寺堂を建てて現世に極樂淨土をあらはさうとする風が起つて來た。宇治の平等院の如き建物を始めとして、彫刻繪畫

阿彌陀如來像 佛師定朝の傑作で相好の圓滿、安靜の姿は極樂淨土を思はせ、藤原時代の氣風と淨土教の理想を代表するものである。  
平等院鳳凰堂 は藤原頼通の營んだものである。宇治川の清流に臨んで風光明媚、この世に極樂淨土を求めんとした當時の風と、自然との調和を尊重した當時の建築とを偲び得る。



武門 武士

地方の亂と武士

方に下つて多くの土地人民を所有し、地方の豪族もまたこれ等の  
 人々の膝下に集まるやうになつて武門武士の階級が起り、彼等は  
 地方の秩序を維持して次第に勢力を得るに至つた。これ等の内  
 で最も有力になつたのは清和天皇の後である源氏と桓武天皇の  
 後である平氏とて、共に武家の棟梁として勢強く、承平・天慶の亂、安  
 倍氏の亂(前九年の役)及び清原氏の亂(後三年の役)等、當時諸處に起つた叛亂  
 は何れも彼等の手によつて鎮定された。殊に源氏は東國の諸亂  
 を相ついで平定し、恩威をしいたので、その武名が益あらはれ、東國  
 の武士は多くその配下となつた。また後三年の役に源義家を援  
 けた藤原清衡(トヨヒコ)は勢力を得て子孫は榮え、陸奥の雄として威を振つ  
 た。これらの地方の士民は都の朝臣が日夜歌舞に耽つて柔弱に  
 流れるに反し、質實剛健の昔ながらの風を保つてゐたから、地方を  
 根據として立つた武士の勢力は次第に大となり、やがては實權を

にぎるやうになつてきた。

承平・天慶の亂

朱雀天皇の御代

平將門は、伯父常陸大掾平國香と争ひ、遂にこれを殺し、下總の猿島に據つて叛いた。また殆んど同時に藤原純友も伊豫によつて叛き、西國一帯を荒してその勢力が大であつた。平貞盛(ヒラサダノカミ)國香の子は藤原秀郷等と力を協せて將門を討滅し、源經基等は純友を討つて西國を平定した。

前九年の役

後冷泉天皇の御代

陸奥の豪族安倍頼時がその子貞任等と亂を起した。源頼義はその子義家と力を協せて頼時を倒し、ついで



勿來關

後三年の役

で出羽の豪族清原武則の援によつて遂に貞任を滅ぼした。義家と貞任



が戦場に於て歌を詠みあつた有名な話はこの時の事で、また義家は勿來の關を通つた時櫻花の散るをみて歌を詠むなど文雅の道にも深いたしなみがあつた。

後三年の役

源氏系圖(一)

清和天皇—貞純親王—源經基—滿仲

賴光……………賴政  
賴信—賴義—義家—爲義

平氏系圖(一)

桓武天皇—葛原親王—高見王—平高望

國香—貞盛  
良將—將門  
良文—忠常

前九年の役に功を立てた清原武則は鎮守府將軍に任ぜられて勢があつたが、白河天皇の御代に一

族の争が起り、奥羽が亂れたので、陸奥守源義家は藤原秀郷の後である清衡と力を協せてこれを平定した。

第三章 院政と武士の興隆(平安時代の末期)

一 院政と武士の中央進出

後三條天皇の御改革 藤原氏の專横と社會の紊亂に對して改革の御志を懷かれたのは後三條天皇であつた。天皇は御英明にましまし、藤原氏を抑へんとして親しく政務をとり給ひ、記録所を設けて政治に弊害を與へた莊園を整理し、國司の重任を禁じて地方政治の刷新をはかり、また質素の風を御奨励になるなど、時弊を改め、大いに善政を施された。

院政 白河天皇は後三條天皇の御志を繼がれ、御讓位の後、上皇として院の御所に院廳を設け、別當以下の役人を置いて政治を決

記録所

せられたので、朝廷の攝政・關白は有名無實となり、藤原氏は全く實權を失つた。

**僧兵** 然るに上皇は法皇（ハツソウ）となられ、佛敎を厚く保護されたので、従來多くの莊園を有してゐた寺院は更にその勢力を擴大し、世の不安に乗じて多くの僧兵を養ひ、その富強を誇つた。延曆寺・園城寺（エンジョウジ）・興福寺等は最も勢が大で、武器をとつて相争ひ、不満があれば京都に亂入して強訴するなどの暴行をもなすに至つた。

僧兵の暴行

源平二氏の興隆

かゝる都の騒に對し、朝臣は無力であつたので、地方に勢力のある武士に命じて治安を維持さすこ



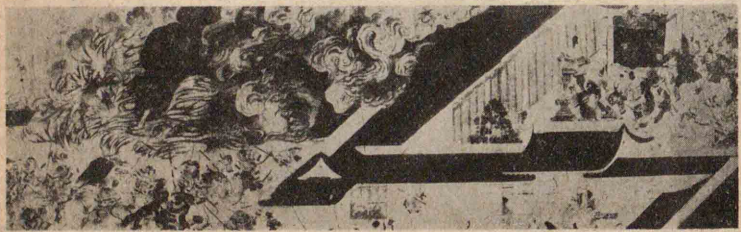
武士の中央進出

とになつた。これより武士が中央に進出することとなり、源平二氏が武士の棟梁として都の權門に仕へ、その勢力の擴大を圖るやうになつた。平氏は一時勢力を失つてゐたが、忠盛が出て瀬戸内海、海賊を平定してより西國に勢を振ひ、鳥羽上皇の御信任を得て益隆え、源氏と對立する程になつた。

保元の亂

平治の亂

當時藤原氏に内争が起り、左大臣賴長は兄忠通（タケミチ）に代つて關白たらんとし、源爲義（タケノリ）等の武士を集めた。然るにこれに反對した源義朝、平清盛等が兵を出して急に攻めたため、爲義等は破れて源氏の一族は多く討たれた。この亂は藤原氏が再び骨肉の争ひを繰返すのに、武士の實力を借りたもので、源平二氏も之を利用してその勢力を得んとし



平治の亂

たものである。かくて平氏の勢が大となつたが、之に反して義朝は全く孤立の姿となり、その勢力の挽回を圖つて起した平治の亂も遂に源氏に利あらず、平氏のみ獨り榮える時代となつた。この二亂は政權を武力によつて爭奪する先例を開いたもので、かくて無力な朝臣に代つて實力を有する武士が兵政の權を握る基をつくつた。

二 平氏の專横時代

公卿化

平氏の全盛 保元平治の二亂によつて源氏が衰へるや、清盛は官位が益進み、太政大臣となつて政治の實權を握り、またその女を入内せしめて外戚となり、一門は何れも高位高官に上つて榮華を極めた。かくて武士としての平氏は藤原氏を兼ねて全く公卿化し、その特色を失ふに至つた。しかし安藝の宮島に美しい社殿を

宮島

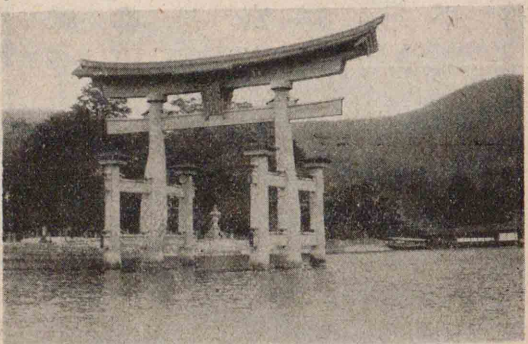
平氏討滅の企

後白河法皇

造營し、兵庫の港を修築して宋との貿易を開き、或は西國の開發をはかるなど、大いに經濟上の發展をも圖つた。



平氏の滅亡 平氏が藤原氏に代つて政治上の實權をとつたため、院政は名のみとなつたので、後白河法皇の近臣藤原成親等は平氏討滅を企てたが、事



現れて失敗に終つた。

清盛は進んで法皇をも幽し奉らうとしたが、子重盛は之を諫めて忠孝の道を全うした。然るに重盛は間もなく薨じたので、清盛の横暴は益つたり、やがて法皇を幽し奉

頼朝の擧兵

平重盛

頼朝の擧兵

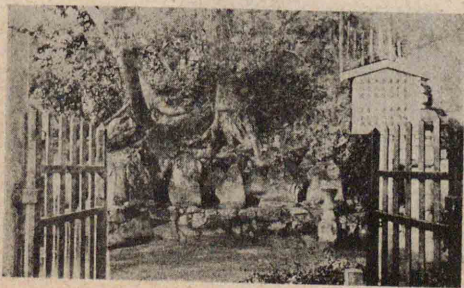


つた。源頼政は之を憤り、以仁王を奉じて兵を擧げ、宇治に敗死したが、王の令旨をうけた諸國の源氏が振ひ立ち、中にも伊豆に流されてゐた頼朝は鎌倉に據つて東國を固め、次第に勢力を有してきた。然るに柔弱に流れた平氏の軍はもろくも諸處

平氏墓

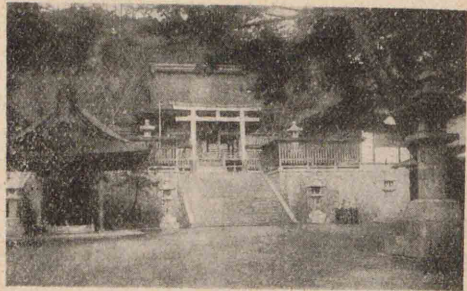
平氏滅亡

に破れ、やがて源義仲に攻められて支へ得ず、都を落ちて西國に逃れる悲運に陥つた。されど平氏はその挽回につとめ、再び勢力を集めて京都を回復しようとしたが、範頼、義經のために破れて遂に長門の壇浦ダンプラに全く滅ぶに至つた(壽永四年一八四五年)。この戦に畏くも御幼少の安徳天皇が平氏の一族と共に海中に入られた事は實に御痛



赤間宮

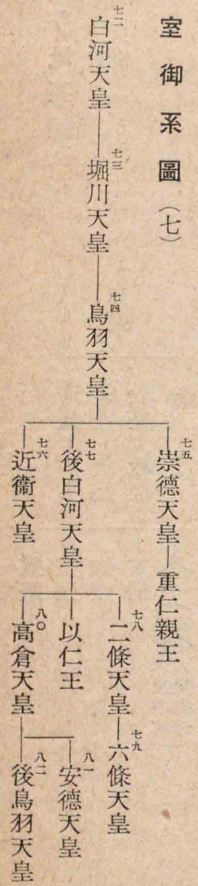
下關にあり  
安徳天皇を  
祀る。



ましい限りで、また平氏に非ざれば人に非ずとまでその全盛をうたはれた榮華も僅か十數年の夢に過ぎず、はかなくも西海の藻屑と消えた世の急變には、そゞろ當時の人々に深い感慨を與へたのであつた。

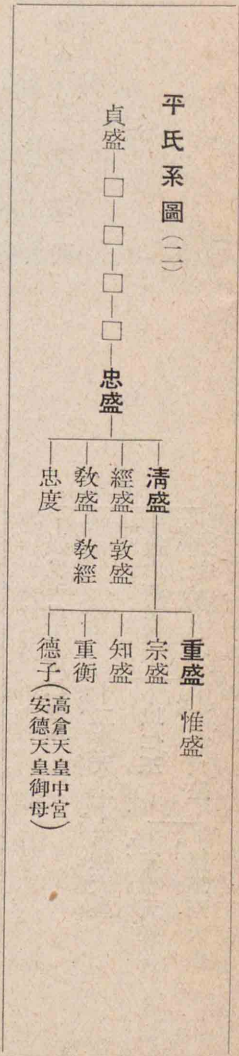
建禮門院は清盛の女で高倉天皇の中宮、安徳天皇の御母でいらせられるが、平家滅亡の後は大原の寂光院で安徳天皇の御冥福を祈らせつゝ、わびしい御生涯を終へられた。平家物語の大原御幸にこの御様子が詳しく記されてある。

皇室御系圖(七)





平氏系圖(一)



平安時代の概括

桓武天皇の平安奠都より平氏の滅亡に至る約四百年間を平安時代といふ。初め約七十年間は改革の時代で皇威がよく振ひ、制度は改められ、唐の影響をうけて漢文學が隆盛を極め、新しい佛教が興つて社會はよくひきしまつた。藤原氏が外戚として權を專らにするや、攝關政治が行はれ、榮華に耽つて政治は亂れ、地方の武士が次第に勢力を得て來た。またこの頃、唐との交通も絶え、優美な國風文化が發達し、國文學に於ける女子の活動が目覺ましかつた。後三條天皇以後藤原氏は抑へられ、政令が皇室から發せられ

安時代中期攝關政治

(六二) 村	(六三) 冷	(六四) 圓	(六五) 花	(六六) 一
雀	上	融	山	條
延喜	承平	天慶	應和	元
三五	四五	六三	四三	元
一五六一	一五八七	一五九六	一六〇〇	一六二一
道眞太宰府にうつさる。	渤海亡ぶ。	平將門、國香を殺す。	藤原純友誅せらる。	經基王源姓を賜はる(清和源氏)。
道眞太宰府に葬す。	古今和歌集成。	唐亡ぶ。	將門誅せらる。	
地方亂る	武士起る	唐滅ぶ		宋起る

た。後三條天皇以後藤原氏は抑へられ、政令が皇室から發せられ

第三年表 平安時代年表

時代	天皇	年號	紀元	重要事項	概	要	對外關係
(五〇)桓武	延曆	七	一四四八	最澄延曆寺を開く。 平安奠都。	佛教の改革		
(五一)平城	大同	元	一四五四	坂上田村麻呂に東北地方を討たしむ。	皇威北に及ぶ		
(五二)嵯峨	弘仁	七	一四六〇	坂上田村麻呂蝦夷を平ぐ。	社會教の改革		
(五三)淳和	和	二	一四六一	最澄空海唐に赴く。	學の改革		
(五四)仁德	明	二	一四六四	最澄歸朝して天台宗を傳ふ。	制度の改革		
(五五)文德	天安	元	一四六六	空海歸朝して眞言宗を傳ふ。			
(五六)清和	貞觀	一八	一四七〇	藏人所を置く。			
(五七)陽成	天安	二	一四七六	空海金剛峰寺を開く。			
(五八)光孝	仁	三	一五〇一	良房太政大臣となる。			
(五九)宇多	孝	三	一五〇一	良房攝政となる。			
(六〇)醍醐	寛平	元	一五〇一	基經關白となる。	攝關政治藤原氏隆盛時代		
(六一)村上天	寛平	六	一五〇七	高望王平姓を賜はる(桓武平氏)。	關白		
(六二)冷泉	仁	三	一五〇九	遣唐使を廢止す。	他氏排斥		
(六三)圓融	寛平	六	一五一一	藤原時平を左大臣、菅原道眞を右大臣に任ず。	地方亂る		
(六四)花山	承平	五	一五二一	道眞太宰府に薨す。	武士起る		
(六五)一條	延長	七	一五二七	古今和歌集成。			
(六六)三條	承平	五	一五二七	渤海亡ぶ。			
(六七)一條	天慶	三	一五三九	平將門、國香を殺す。			
(六八)後一條	長元	四	一五九一	高麗、朝鮮半島を一統す。			
(六九)後朱雀	治安	二	一六〇〇	將門誅せらる。			
(七〇)後冷泉	寛仁	三	一六〇一	藤原純友誅せらる。			
(七一)後白河	治安	二	一六〇一	經基王源姓を賜はる(清和源氏)。			
(七二)後三條	長元	四	一六〇一	刀伊の賊入寇す。			
(七三)白河	長元	四	一六〇一	法成寺成る。			
(七四)應徳	長元	四	一六〇一	藤原道長薨す。			
(七五)白河	長元	四	一六〇一	平忠常誅せらる。			
(七六)白河	長元	四	一六〇一	藤原頼通鳳凰堂を造る。			
(七七)白河	長元	四	一六〇一	前九年の役終る。			
(七八)白河	長元	四	一六〇一	記録所を置き、莊園を調査す。			
(七九)白河	長元	四	一六〇一	白河上皇の院政始まる。			
(八〇)白河	長元	四	一六〇一	御親政。藤原氏抑へらる			
(八一)白河	長元	四	一六〇一	院政			
(八二)白河	長元	四	一六〇一	僧兵			

唐との關係絶ゆ  
唐滅ぶ  
宋起る

第三年表 平安時代年表

時代	平安時代初期	平安時代中期	平安時代末期	院政時期	
天皇	(五〇)桓武	(六一)醍醐 (六二)朱雀 (六三)延喜 (六四)承平 (六五)天慶 (六六)應和 (六七)長元 (六八)寛仁 (六九)寛平 (七〇)治承 (七一)天喜 (七二)康平 (七三)延久 (七四)應徳 (七五)寛治 (七六)大治 (七七)保元 (七八)保元 (七九)平治 (八〇)仁安 (八一)治承 (八二)養和 (八三)壽永	(六〇)醍醐 (六一)朱雀 (六二)延喜 (六三)承平 (六四)天慶 (六五)應和 (六六)長元 (六七)寛仁 (六八)寛平 (六九)治承 (七〇)天喜 (七一)康平 (七二)延久 (七三)應徳 (七四)寛治 (七五)大治 (七六)保元 (七七)保元 (七八)平治 (七九)仁安 (八〇)治承 (八一)養和 (八二)壽永	(八一)安徳	(八一)安徳
年號	延暦七 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五	延暦七 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五	延暦七 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五	延暦七 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五	延暦七 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五
紀元	一四四八 一四五四 一四五七 一四六四 一四六一 一四六四 一四六五 一四六六 一四七〇 一四七六	一四四八 一四五四 一四五七 一四六四 一四六一 一四六四 一四六五 一四六六 一四七〇 一四七六	一四四八 一四五四 一四五七 一四六四 一四六一 一四六四 一四六五 一四六六 一四七〇 一四七六	一四四八 一四五四 一四五七 一四六四 一四六一 一四六四 一四六五 一四六六 一四七〇 一四七六	一四四八 一四五四 一四五七 一四六四 一四六一 一四六四 一四六五 一四六六 一四七〇 一四七六
重要事項	最澄延暦寺を開く。 平安遷都。 坂上田村麻呂に東北地方を討たしむ。 坂上田村麻呂蝦夷を平く。 最澄・空海唐に赴く。 最澄歸朝して天台宗を傳ふ。 空海歸朝して眞言宗を傳ふ。 藏人所を置く。 空海金剛峰寺を開く。	最澄延暦寺を開く。 平安遷都。 坂上田村麻呂に東北地方を討たしむ。 坂上田村麻呂蝦夷を平く。 最澄・空海唐に赴く。 最澄歸朝して天台宗を傳ふ。 空海歸朝して眞言宗を傳ふ。 藏人所を置く。 空海金剛峰寺を開く。	最澄延暦寺を開く。 平安遷都。 坂上田村麻呂に東北地方を討たしむ。 坂上田村麻呂蝦夷を平く。 最澄・空海唐に赴く。 最澄歸朝して天台宗を傳ふ。 空海歸朝して眞言宗を傳ふ。 藏人所を置く。 空海金剛峰寺を開く。	最澄延暦寺を開く。 平安遷都。 坂上田村麻呂に東北地方を討たしむ。 坂上田村麻呂蝦夷を平く。 最澄・空海唐に赴く。 最澄歸朝して天台宗を傳ふ。 空海歸朝して眞言宗を傳ふ。 藏人所を置く。 空海金剛峰寺を開く。	最澄延暦寺を開く。 平安遷都。 坂上田村麻呂に東北地方を討たしむ。 坂上田村麻呂蝦夷を平く。 最澄・空海唐に赴く。 最澄歸朝して天台宗を傳ふ。 空海歸朝して眞言宗を傳ふ。 藏人所を置く。 空海金剛峰寺を開く。
概	佛教の改革 皇威北に及ぶ	佛教の改革 皇威北に及ぶ	佛教の改革 皇威北に及ぶ	佛教の改革 皇威北に及ぶ	
要	社會教 學の改 革 制度の改革	社會教 學の改 革 制度の改革	社會教 學の改 革 制度の改革	社會教 學の改 革 制度の改革	
對外關係	唐	唐との關係絶ゆ 唐滅ぶ	唐滅ぶ	宋との通商	
攝關政治藤原氏隆盛時代	關白 攝政	關白 攝政	關白 攝政	關白 攝政	
御親政。藤原氏抑へらる	御親政。藤原氏抑へらる	御親政。藤原氏抑へらる	御親政。藤原氏抑へらる	御親政。藤原氏抑へらる	
藤原氏極盛	藤原氏極盛	藤原氏極盛	藤原氏極盛	藤原氏極盛	
地方亂る 武士起る	地方亂る 武士起る	地方亂る 武士起る	地方亂る 武士起る	地方亂る 武士起る	
他氏排斥	他氏排斥	他氏排斥	他氏排斥	他氏排斥	
刀伊の賊入寇す。 法成寺成る。 藤原道長薨す。 平忠常誅せらる。 藤原頼通鳳凰堂を造る。 前九年の役終る。 記録所を置き、莊園を調査す。 白河上皇の院政始まる。 後三年の役終る。 藤原清衡中尊寺を建つ。 鳥羽上皇の院政始まる。 保元の亂。 後白河上皇の院政始まる。 平清盛太政大臣となる。 藤原成親等の陰謀。 平重盛薨す。 源頼政の擧兵。源頼朝・同義仲等起る。賴朝侍所を鎌倉に開く。 富士川の戦。清盛薨す。 平氏の西走。義仲の入京。 義仲敗死す。一ノ谷の戦。賴朝公文所・問注所を開く。 屋島の戦。壇ノ浦の戦に平氏滅ぶ。	刀伊の賊入寇す。 法成寺成る。 藤原道長薨す。 平忠常誅せらる。 藤原頼通鳳凰堂を造る。 前九年の役終る。 記録所を置き、莊園を調査す。 白河上皇の院政始まる。 後三年の役終る。 藤原清衡中尊寺を建つ。 鳥羽上皇の院政始まる。 保元の亂。 後白河上皇の院政始まる。 平清盛太政大臣となる。 藤原成親等の陰謀。 平重盛薨す。 源頼政の擧兵。源頼朝・同義仲等起る。賴朝侍所を鎌倉に開く。 富士川の戦。清盛薨す。 平氏の西走。義仲の入京。 義仲敗死す。一ノ谷の戦。賴朝公文所・問注所を開く。 屋島の戦。壇ノ浦の戦に平氏滅ぶ。	刀伊の賊入寇す。 法成寺成る。 藤原道長薨す。 平忠常誅せらる。 藤原頼通鳳凰堂を造る。 前九年の役終る。 記録所を置き、莊園を調査す。 白河上皇の院政始まる。 後三年の役終る。 藤原清衡中尊寺を建つ。 鳥羽上皇の院政始まる。 保元の亂。 後白河上皇の院政始まる。 平清盛太政大臣となる。 藤原成親等の陰謀。 平重盛薨す。 源頼政の擧兵。源頼朝・同義仲等起る。賴朝侍所を鎌倉に開く。 富士川の戦。清盛薨す。 平氏の西走。義仲の入京。 義仲敗死す。一ノ谷の戦。賴朝公文所・問注所を開く。 屋島の戦。壇ノ浦の戦に平氏滅ぶ。	刀伊の賊入寇す。 法成寺成る。 藤原道長薨す。 平忠常誅せらる。 藤原頼通鳳凰堂を造る。 前九年の役終る。 記録所を置き、莊園を調査す。 白河上皇の院政始まる。 後三年の役終る。 藤原清衡中尊寺を建つ。 鳥羽上皇の院政始まる。 保元の亂。 後白河上皇の院政始まる。 平清盛太政大臣となる。 藤原成親等の陰謀。 平重盛薨す。 源頼政の擧兵。源頼朝・同義仲等起る。賴朝侍所を鎌倉に開く。 富士川の戦。清盛薨す。 平氏の西走。義仲の入京。 義仲敗死す。一ノ谷の戦。賴朝公文所・問注所を開く。 屋島の戦。壇ノ浦の戦に平氏滅ぶ。	刀伊の賊入寇す。 法成寺成る。 藤原道長薨す。 平忠常誅せらる。 藤原頼通鳳凰堂を造る。 前九年の役終る。 記録所を置き、莊園を調査す。 白河上皇の院政始まる。 後三年の役終る。 藤原清衡中尊寺を建つ。 鳥羽上皇の院政始まる。 保元の亂。 後白河上皇の院政始まる。 平清盛太政大臣となる。 藤原成親等の陰謀。 平重盛薨す。 源頼政の擧兵。源頼朝・同義仲等起る。賴朝侍所を鎌倉に開く。 富士川の戦。清盛薨す。 平氏の西走。義仲の入京。 義仲敗死す。一ノ谷の戦。賴朝公文所・問注所を開く。 屋島の戦。壇ノ浦の戦に平氏滅ぶ。	
平氏滅ぶ	平氏滅ぶ	平氏滅ぶ	平氏滅ぶ	平氏滅ぶ	

るに至つたが、後院政が行はれ、僧兵の横暴や、藤原氏の勢力争から  
地方の武士が都に出て勢を得るに至つた。かくて源平二氏が争  
つて先づ平氏が政權を握つたが、間もなく源氏が之に代つて兵政  
の權をとるやうになつた。

### 第四篇 鎌倉時代

#### 第一章 鎌倉幕府

鎌倉幕府の開設 平氏が滅ぶや、之に代つて頼朝は鎌倉にて政治を行つたが、武家特有の制度のもとに

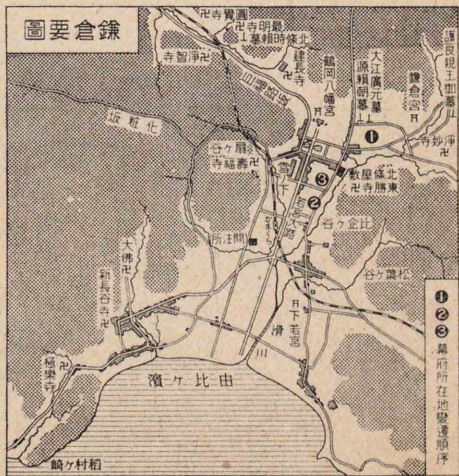


源 頼 朝

幕府の組織

幕府をつくつたので、律令は全く空文となり、これから長い間にわたる武家政治の例が開かれた。

初め頼朝が鎌倉に據つた時、武士を取締



る侍所や、政務を行ふ公文所(政所)、裁判をする問注所などを置いて附近を治めてゐたが、征夷大將軍に任ぜられてからは、この組織をもとにして天下の政治を行つた。これを鎌倉幕府と云ひ、征夷大將軍が武家の棟梁として朝廷より兵政の權を預り申すこととなつた。

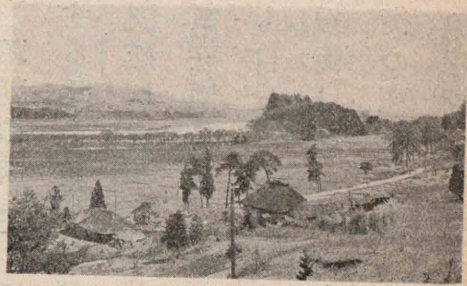
守護  
地頭  
藤原氏滅ぶ

頼朝の統一 これより先、頼朝は全國を自分の勢力の下に統一する爲、弟義經が頼朝の怒にふれて行方をくらましたのを機とし、朝廷に奏請して諸國に守護を置き、軍事警察をつかさどらしめ、公領・莊園には地頭を置いて土地の支配、租税の徴收にあたらせ、何れも自分の家人を之に任じた。また當時陸奥で勢力のあつた藤原秀衡はその富強を誇り、義經を保護して鎌倉に對抗してゐたが、秀衡の死後、泰衡は頼朝をおそれて義經を殺した。然るに頼朝はその時期の遅れたことを口實として之を討ち、平泉を陥れて滅ぼし

高館  
義經の居住した所、川は北上

武士道

頼朝墓



たので、さしも誇つた藤原三代の榮華も空しく  
廢墟と化してしまつた。

夏草やつはものどもが夢のあと 芭蕉

藤原氏系圖

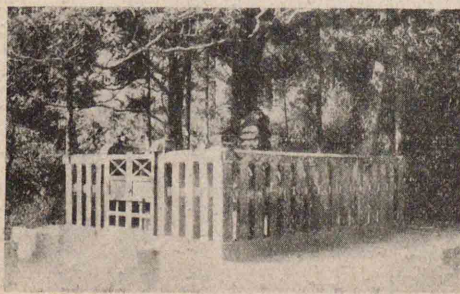
(四代略)

藤原三代  
清衡 基衡 秀衡 泰衡

政治の方針 頼朝は平氏

が都に出て柔弱に流れ、早く  
滅んだのにかんがみ、鎌倉に

據り、簡潔を尊び、質素儉約を旨とし、忠孝を重んじ、武藝を勵むなど、専ら武士としての修養を重んじた。鎌倉武士の名が後世までも名高く、武士の手本となつたのは、この美風が實行されたからである。また常に皇室を尊んで、その命を



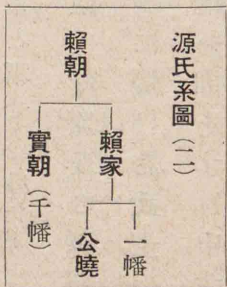
拜し、久しく亂れた社會を整へ、民力の涵養をはかり、時勢に適した政治を行つたので、幕府の基礎は全く確立した。

### 第二章 幕府と北條氏

#### 北條氏の隆盛

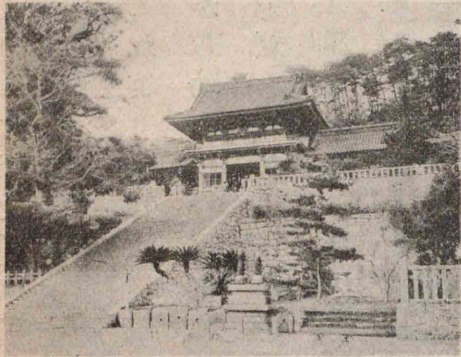
頼朝は立派な政治家であつ

たが、疑ひ深い性質をもち、弟の義經、範頼などを除いたため、却つてその翼を失ひ、源氏滅亡の因をつくつた。頼朝の薨後、長子頼家が將軍となつたが、幽閉の後殺害され、ついで將軍となつたその弟實朝も亦鶴岡八幡宮で公曉のために害せられたので、源氏の正統が全く絶えてしまつた。これ等の事變の背後に畫策をめぐらしたのは外戚



源氏の正統絶ゆ

鶴岡八幡宮



源氏の諸將亡ぶ

順徳上皇  
御火葬塚

である北條氏で、執權として幕府の實權を握り、  
ついで源氏恩顧の忠臣畠山重忠等を滅ぼした。  
これより北條氏に敵する者なく、京都の藤原氏  
から幼少の將軍を迎へ、自分は執權として政治  
を私し、わがまゝの行爲が多かつた。

頼朝の妻政子はよく夫を扶け頼朝の薨後も尼とな

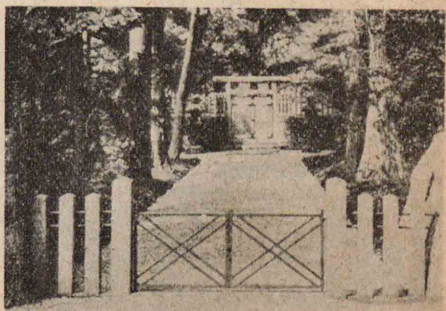
つて庶政をきき、殊に實朝

薨後の幕府をよく維持して基礎を固め、諸將の  
信望をあつめて世に尼將軍と稱せられた。

後鳥羽上皇



承久の變と義時の不臣 藤原氏の攝關  
政治も、平氏の專權も、鎌倉に於ける武士の  
政治も共に天皇の御親政を御たすけ申す  
べき臣下としての本分を過ぎる事が多か



追討の院宣

三上皇を奉遷

つた。當時京都に於ては後鳥羽上皇が院政をとつて居られたが、  
實朝の薨後、かねての御志である政權の回復を實行しようとしてされ  
た。然るに執權北條義時は勢をたのんで事毎に上皇の御旨に叛  
いたので、上皇は順徳上皇と共に承久三年、義時追討の院宣をお下  
しになつた。義時は之を知り、大軍を集めて西上させ、官軍を破つ  
て京都に入り、子の泰時が臣子の本分を説いて諫めたのも聞き入  
れず、後鳥羽上皇を隱岐に、順徳上皇を佐渡に、土御門上皇を土佐後  
に阿波に遷し奉る等、臣下として例のない惡逆を行つた。畏くも  
三上皇は各孤島僻地に御痛ましき御生涯を終へ給うたが、實に拜  
するさへ悲憤の涙を禁じ得ないところである。

われこそは新島守よ隱岐の海の 荒き浪風心してふけ。 後鳥羽上皇  
うき世にはかゝれとてこそ生まれけめ ことはりしらぬ我が涙かな。

土御門上皇

六波羅探題

時頼

この變後、義時は京都に六波羅探題を置いて一族を任じ、京都及び關西の鎮とした。

北條泰時時頼の政治 義時のかゝる

非行があつてもなほ北條氏が續いたのは、泰時時頼等の努力によることが大であつた。泰時は民政に意を用ひ、幕府に評定衆を置いて政務を相談させ、また武家法制の模範となつた貞永式目（シヨウエイ）五十一ヶ條を制定した。時頼もまた政治につとめ、民力の涵養を圖つて天下をよく治めたので、世の人々は北條氏に服した。



龜山上皇  
福岡市にある銅像



松下禪尼は時頼の母であるが、身を以て節儉の範を示し、子弟の教育につとめた事は後世まで美談とされる。

元寇 かくて頼朝以來の尙武の風

石壘

影響

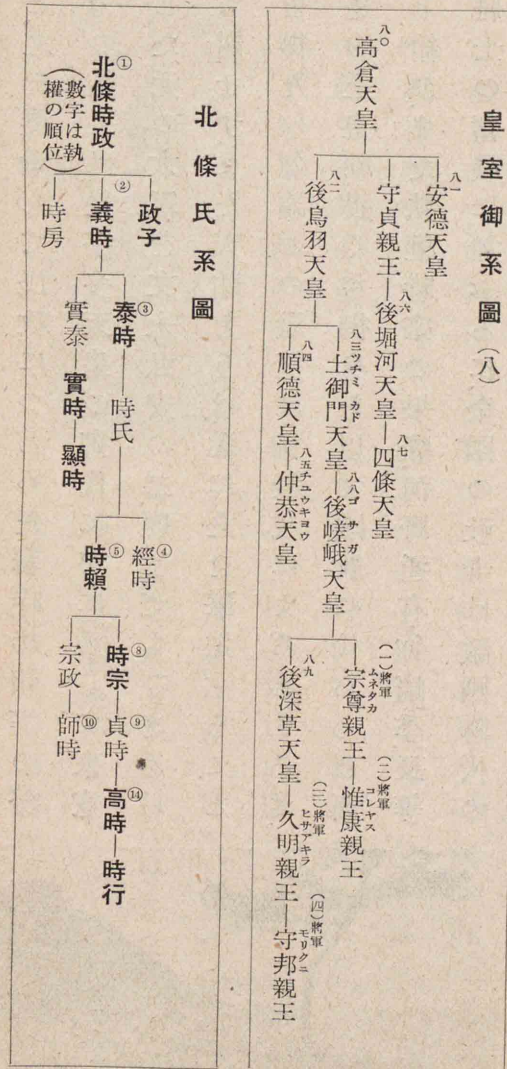
と、之を奨勵して民政につとめた泰時時頼等の努力の結果は、後宇多天皇の御代に勢に乗じて來寇した元の大軍を文永弘安の二度までもひきうけて屈せず、また天祐をうけ、遂に之を撃退することを得た。勿論この戦捷は御稜威によるところで、龜山上皇は畏くも御身を以て國難に代らんと祈り給ひ、また執權時宗の果斷、河野通有、竹崎季長等將士の奮戦に加ふるに、全國の社寺は敵國降伏の熱禱を捧げるなど、國をあげて愛國の精神を發揮し、以て未曾有の國難を退ける事ができた。この結果、國民の自覺を促し、我が國が神國であるといふ信念は益々強くなり、文永の役後進んで彼を討伐せんとする討晝さへ行はれ、その意氣は天を衝かんばかりであつた。





末の世の末の末までわが國は よろづの國にすぐれたる國。〔宏覺禪師蒙〕  
 時宗が異國征伐を企てたとき、尼真阿はわが子を進んで馳せ參ぜしめる  
〔古降伏祈願文〕  
 ことを申し出たが、その壯烈な記録が今日残つてゐる。  
 然し戦後の經營は非常に困難で、幕府は財政に苦しみ、將士の恩賞  
 にも事缺き、遂に衰亡の一原因となるに至つた。

皇室御系圖(八)



第三章 鎌倉時代の文化

文化の特徴 前代の文化が貴族本位であり、やがて柔弱なものとなつたが、鎌倉時代には武士が社會の中心となつたので、武士の氣風がその文化のすべての方面にあらはれ、こゝに我が國風の勇武の一面が發揮された。

犬追物

武士道と社會風俗 頼朝が質素をすゝめ、武勇を尊んだので、鎌倉武士の間には質實剛健にして恥を知り名を惜しみ、義を重んじて身命を輕んじ、武をねり忠孝にはげむ武士道が發達した。元來武士道は我が國固有の精神で、大君の邊にこそ死なぬ願ひはせじと古くからうたはれてゐた如く、武を以て皇室に仕へまつること



勇武の風

を本分とするが、勇武の風はこの頃より最も強くあらはれ、柔弱優美な前代の習は失せて、遊戯なども詩歌管絃の遊に代る、犬追物、流鏑馬、笠懸、狩獵等が盛となり、社會一般に華美をさけ、質實を尊ぶやうになつた。されば衣食住も質素と實用とを旨とし、豪華な寢殿造の邸宅は武家造となり、優美な衣服は簡單なものに變るなど、時代の精神がよくあらはれた。

學問　かく尙武の風が強かつたため、學問は一般に不振で、公卿や僧侶の間に行はれたにすぎなかつたが、文雅の道をわきまへる

金澤文庫

ことも武士道の尊い精神で、心ある武士の中には學問風流の道にいそしみ、神佛を崇び、修養につとめる者もあつた。源義家の雅情や平家滅亡の際に起つた當時の武士の優美な態度は、後世長く美談として傳へられ、またこの頃、金澤に文庫を設

金澤文庫

和歌

軍記物

榮

西



けた北條實時及び顯時や、當時第一流の歌人で、萬葉風の雄健な和歌に秀でてゐた源實朝などは、武士として特筆すべき人々であつた。和歌は比較的ふるひ、藤原定家、西行法師などは名高く、定家が後鳥羽上皇の仰せによつて撰した新古今集はこの時代の歌風をよくあらはしてゐる。また時代の風をうけて源平盛衰記、平家物語などの假名交りの軍記物があらはれ、人々に愛讀せられた。

山はさけ海はあせなん世なりとも　君に二心われあらめやも　實朝  
宋との交通と禪宗　平安時代の中頃から唐に代つて宋がおこ

り、清盛は之と貿易したが、鎌倉時代になつて我が商船の宋に到るものが多くなり、その文化の影響をうけたものが多かつた。殊に當時の武士の精神に調和したのは榮西(臨濟宗)、道元、曹洞

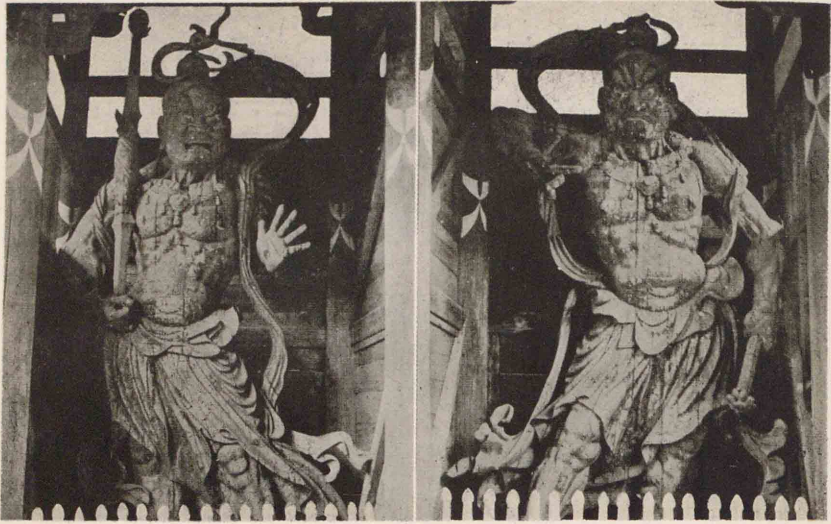
禪宗

宗)によつて輸入された禪宗で、その簡を尙び、精神鍛錬を重んじる風は、武士階級に多くの信者を得、時頼、時宗等も深く歸依して修養し、榮西の傳へた臨濟宗は幕府の保護をうけ、京都・鎌倉に宋風の禪寺が多く建てられた。

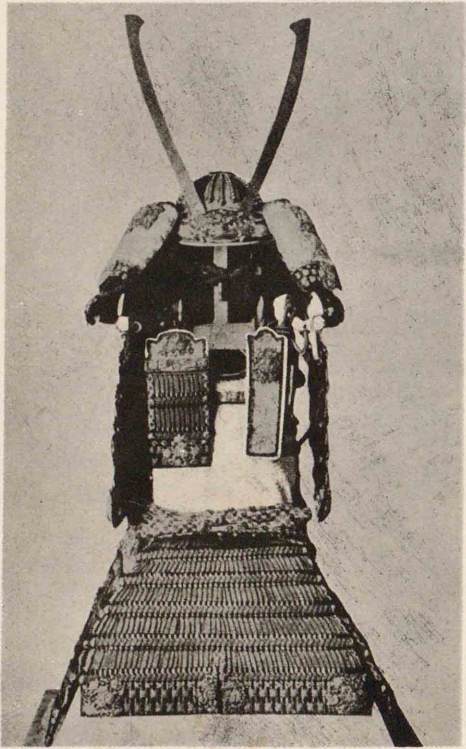
日蓮上人  
辻説法

國民佛教

平安時代に隆盛を極めた天台・真言の二宗も僧侶の中に勢にまかせてわがまゝをなすものが多かつたので、次第に一般の信仰を失つた。また當時世の中の急變を見た人々の中には、この世が無常であることを悟る



(一)



(四)



(二)



(三)

一 東大寺南大門仁王像

運慶及び快慶の作とされる。仁王像として比類のない傑作で、當時の雄健な氣風がよくあらはれてゐる。

二 圓覺寺舍利殿

舍利殿は北條貞時の造營で我が國に於ける禪院建築の古標本とされる。關東大地震後修造された。

三 北野天神緣起繪卷

筑紫の配所に於ける菅公の圖。

四 甲

胃

親鸞上人

淨土宗

日蓮宗

淨土眞宗

建築彫刻



者が多く、天台・眞言二宗の説く所はやゝ高尚にすぎたので、念佛によつて淨土に生まれようとする法然の淨土宗の如く、簡易な一般世人の耳に入り易い宗教が前代末より盛になつた。つゞいて日蓮が熱烈な信仰と意氣とをもつて開いた日蓮宗や、法然の弟子親鸞の淨土眞宗などが起つて庶民の信仰をあつめた。これ等は全く我が國人の精神に融合したもので、貴族及び武士階級に於ける禪宗と共に廣く國民全般に普及し、こゝに國民佛教が完成した。

美術工藝 美術工藝も時代の精神をよくあらはし、宋風の質實な禪寺、實用的な武家造が行はれ、彫刻も剛健な氣象をあらはして、運慶・湛慶の父子は殊に名高く、運慶等のつくつた東大寺南大門の仁王像の如き勇健な大作がある。又時代の要求に隨ひ、刀劍・甲冑

武器  
繪畫

瀬戸焼

等武器の精巧なものが製作されるに至り、殊に刀劍は最もすぐれ、栗田口吉光、岡崎正宗などの名工が出て日本刀の眞價を發揮し、繪畫も勇壯な合戦の繪卷物や實用的な肖像畫が盛に行はれた。また道元と共に宋に渡つた加藤景正は歸朝の後、瀬戸焼をはじめたが、これより陶磁器の製法が漸く發達してきた。

### 第四章 北條氏の滅亡

後醍醐天皇の朝威恢復の御企 幕府政治は武家が朝廷の大命を奉じて、その政治をなすべきものであるが、鎌倉幕府は往々にして政治を私し、あまつさへ朝廷の御意志に反する行ひをなすなど、我が國體にもとる行爲が多く、承久の變に於ける北條義

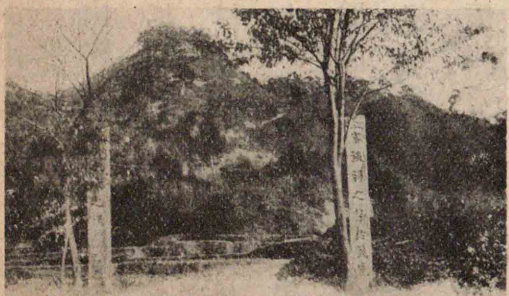


後醍醐天皇

笠置行幸

千早城址

時の態度は殊に悪虐を極め、天人共に許し得ないところであつた。後醍醐天皇は英明にましまし、常に大御心を民政にとゞめ給ひ、北畠親房等の賢臣をあげて改革される所多く、朝廷の御威光が次第にゆき互つた。この頃鎌倉にては執權北條高時が暗愚で政治を顧みず、人心が漸く幕府を離れんとする様子であつたので、天皇は政令全く朝廷より出た古への世にもどさうと思召され、遂に幕府征討を御企てになつた。然るに高時は之を知り、事にあづかつた朝臣を刑した。その後も天皇の御志は挫けず御計畫をすゝめられたが、再び謀がもれたので高時の大軍が京都にせまり、天皇は神器を奉じて笠置山に行幸せられた。さしてゆく笠置の山を出でしより



隱岐還幸

勤皇

天が下にはかくれ家もなし

の御製は不幸にして笠置山の行在所も陥ちて山路をたどり給ふ時に詠ぜられたもので、高時は遂に天皇を隱岐に遷し奉つた。

**北條氏滅亡** この間に河内の豪族楠木正成は笠置の行在所に參じて、正成一人生きてあらば必ず朝敵を滅ぼし天意を安んじ申さんと御誓ひ申し、敢然として天下の運命を雙肩にかけて忠義の旗を赤坂及び千早の城に翻し、護良親王は吉野に據つて勤皇の軍を募り給ふなど、その孤忠はよく天下の人々を憤起させ、肥後の菊池武時、伯耆の名和長年、上野の新田義貞等を始め、諸國に義旗を擧げる者多く、かくて京都の六波羅は足利高氏の手によつて陥り、鎌倉は義貞に攻撃されたため、北條氏は遂に滅び、鎌倉幕府は崩壊した。

幕府滅ぶ

鎌倉時代の概括

源頼朝が鎌倉に幕府を開いてより約百五十年、北條氏の滅亡までを鎌倉時代といひ、政治の權が公卿の手より武家の手に移つた時代である。この間に武家政治の形式が整ひ、法制の整備、新佛教の興隆、士風の發達等、世の中が一變し、すべてにわたり簡易、實際的になつた。殊に宗教に國民的なものが創造され、人心に深く感化を及ぼしたのであつた。

源氏は僅か三代にして滅んだが、外戚の北條氏が實權を占め、泰時・時頼等の指導によつて國內よく治り、尙武の風が盛で、二度にわたる元寇の難も之を見事に退けることができた。

然るに朝廷との關係に於てはさきに義時の專横によつて承久の變となり、後鳥羽上皇の御志も空しくなつたが、後には幕府の失政相つぎ、後醍醐天皇は諸國の忠臣と共に遂に北條氏を滅ぼして朝權を回復された。



第四年表 鎌倉時代年表

時代	天皇	年號	紀元	重要事項	概	要	對外關係
(八) 後鳥羽	文治	元	一八四五	源賴朝守護・地頭を設置す。	院政	臨濟宗	宋
	建久	二	一八四九	賴朝奥州を平定す。	鎌倉幕府(武家政治)		榮西歸朝
	建久	三	一八五一	僧榮西宋より歸りて臨濟宗を傳ふ。			
	建久	四	一八五二	賴朝征夷大將軍となる。	北條氏勢力を得		
	建久	五	一八五三	源範賴殺さる。			
(三) 土御門	正治	元	一八五九	源賴朝薨す。	源氏の正統絶ゆ		
	正治	二	一八六二	源賴朝將軍となる。			
	建仁	三	一八六三	北條時政執權となる。源實朝將軍となる。	承久の變		
	承久	元	一八六四	北條義時執權となる。			
(四) 順德	承久	二	一八六五	北條義時執權となる。	淨土眞宗		
	承久	三	一八七九	實朝害せらる。藤原賴經將軍となる。			
(五) 仲恭	元仁	元	一八八一	承久の變。六波羅探題を置く。	曹洞宗		
	元仁	三	一八八四	僧親鸞淨土眞宗を開く。北條泰時執權となる。			
(六) 後堀河	安貞	元	一八八七	僧道元宋より歸りて曹洞宗を傳ふ。	日蓮宗		
	安貞	元	一八九二	北條泰時貞永式目を定む。			
(七) 四條	仁治	三	一九〇二	北條泰時死す。	源氏		
	仁治	四	一九〇六	北條時賴執權となる。			
(八) 後嵯峨	寬元	四	一九〇六	北條時賴執權となる。	宋僧多く來朝す		
	建長	四	一九一三	宗尊親王將軍となる。			
(九) 後深草	建長	五	一九一三	僧日蓮法華宗を唱ふ。	宋滅ぶ		
	建長	五	一九一三	蒙古(元)の忽必烈(世祖)大汗の位に即く。			
(一〇) 龜山	文應	元	一九二〇	北條時賴死す。	元寇		
	弘長	三	一九二三	北條時宗執權となる。			
	文永	五	一九二八	蒙古國號を元と稱す。	鎌倉幕府滅ぶ		
	建治	二	一九三一	文永の役。			
(九) 後宇多	建治	二	一九三六	僧一遍時宗を唱ふ。外征を計畫す。	後醍醐天皇朝權恢復の御企		
	弘安	二	一九三九	元使を博多に斬る。			
	弘安	四	一九四一	弘安の役。	鎌倉幕府滅ぶ		
	弘安	七	一九四四	北條時宗死す。			
(九三) 伏見	正和	五	一九七六	北條高時執權となる。	鎌倉幕府滅ぶ		
(九四) 後二條	正中	元	一九八四	正中の變。			
(九五) 花園	元弘	元	一九九一	元弘の變。笠置遷幸。楠木正成義兵を擧ぐ。	鎌倉幕府滅ぶ		
(九六) 後醍醐	元弘	二	一九九二	隱岐遷幸。			
	元弘	三	一九九三	六波羅・鎌倉の陥落。北條氏亡ぶ。			

太字は小學國史年表にあるもの



第四年表 鎌倉時代年表

時代	天皇	年號	紀元	重要事項	概	要	對外關係
(八三)後鳥羽	文治	元	一八四五	源賴朝守護・地頭を設置す。 源賴朝を平定す。 源賴朝征夷大將軍となる。	院政	臨濟宗	宋
(八四)順德	承久	元	一八七九	實朝害せらる。藤原頼經將軍となる。 承久の變。六波羅探題を置く。 僧親鸞・浄土眞宗を開く。北條泰時執權となる。	源氏の正統絶ゆ	浄土眞宗	宋僧多く來朝す
(八五)仲恭	元仁	元	一八八一	僧親鸞・浄土眞宗を開く。北條泰時執權となる。	承久の變	曹洞宗	道元歸朝
(八六)後堀河	元久	元	一八六五	北條義時執權となる。	仁政		
(八七)四條	仁治	三	一九〇二	北條泰時死す。			
(八八)後嵯峨	寛元	四	一九〇六	北條時頼執權となる。			
(八九)後深草	建長	四	一九一三	宗尊親王將軍となる。			
(九〇)龜山	文應	元	一九二〇	蒙古(元)の忽必烈(世祖)大汗の位に即く。	日蓮宗		(蒙古)元
	弘長	三	一九二二	北條時頼死す。			
	文永	五	一九二八	北條時宗執權となる。			
	建治	一	一九三一	蒙古國號を元と稱す。	元寇		
(九二)後宇多	弘安	二	一九三六	僧一遍時宗を唱ふ。外征を計畫す。			宋滅ぶ
	正和	五	一九七六	北條高時執權となる。			
(九三)後伏見	正中	元	一九八四	正中の變。			
(九四)後二條	元弘	元	一九九一	元弘の變。笠置遷幸。楠木正成義兵を擧ぐ。	後醍醐天皇朝權恢復の御企		
(九五)花園		二	一九九二	隱岐遷幸。			
		三	一九九三	六波羅・鎌倉の陥落。北條氏亡ぶ。京都遷幸。	鎌倉幕府滅ぶ		倭寇

太字は小學國史年表にあるもの

第五篇 建武中興と吉野時代

第一章 建武中興

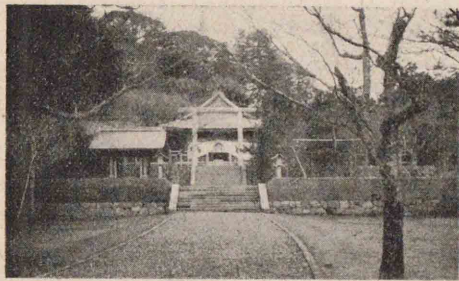
建武中興 北條氏が滅亡すると後醍醐天皇は京都に還幸になり、天皇親政の昔にかへさうとの御志を實行された。即ち記録所を再興して親しく政を御聞きになり、兵亂後の訴訟は雑訴決斷所を設けてこれを裁かせ、武者所を置いて武士を監督させられた。また護良親王を征夷大將軍に任じ、北畠顯家を陸奥守とし、義良親王を奉じて奥羽を治めさせ、足利直義を相模守とし、成良親王を奉じて關東を鎮めしめ給うた。かくて政權再び昔の如く朝廷にかへり、高氏・義貞・正成・長年等、功績のあつた者は何れも厚く賞せられた。この時年號を建武と改められたので、世にこれを建武中興と

中央

地方

云つてゐる。

中興の大業破る 天皇は御熱心に政治に勵み給うたが、朝臣武家の間にとかく圓滿を缺き、朝臣は政治に不慣れのために政務がとゞこほり、また恩賞に不平をもつ者も多く、新政の實行が進まなかつた。その上當時の武士には大義に暗く、却つて武家政治の昔を慕つて天皇の大御心を解し得ない者さへあつた。足利高氏は、初め北條氏に仕へてゐたが、後官軍に歸順して六波羅を陥れたので、最も重く賞せられ、天皇の御名の一字、尊を賜はつて尊氏と改めた程であつた。然るに自己が源氏の出身であるため、武家政治再興の野心を懷き、新政を喜ばない武士にひそかに恩徳を施して機會を待つてゐた。英明なる護良親王は早くか



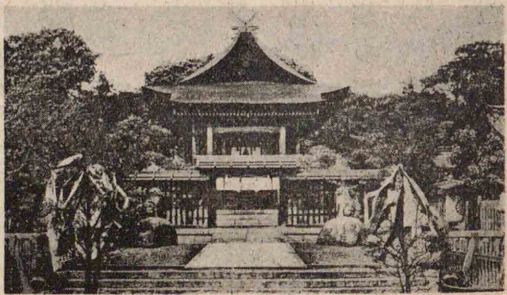
鎌倉宮  
護良親王を祀る。

ら尊氏の心底を察せられたが、讒言にあつて鎌倉に幽せられ給うた。しかるに北條時行（高時の子）が亂を起して鎌倉に攻め入つた際、直義はこれをさへ得ず護良親王を弑し奉つて逃れたが、尊氏はすかさず時行を討ち、遂に直義と共に鎌倉に據つて叛いた。義貞は命をうけて尊氏を討つたが破れ、尊氏は京都に攻め上つたけれども、陸奥の北畠顯家がその後を追ひ、義貞、正成等と力を協せて賊軍を京都に破り、西に走らせた。然るに尊氏は九州に於て菊池氏を破つてからその勢大となり、大軍を集めて東上し、之を迎へ撃つた官軍を兵庫附近で破り、ついで京都に入つたので、中興の大業はこゝに全く破れた。この戦に正成は僅

尊氏の叛

湊川神社

ら尊氏の心底を察せられたが、讒言にあつて鎌倉に幽せられ給うた。しかるに北條時行（高時の子）が亂を起して鎌倉に攻め入つた際、直義はこれをさへ得ず護良親王を弑し奉つて逃れたが、尊氏はすかさず時行を討ち、遂に直義と共に鎌倉に據つて叛いた。義貞は命をうけて尊氏を討つたが破れ、尊氏は京都に攻め上つたけれども、陸奥の北畠顯家がその後を追ひ、義貞、正成等と力を協せて賊軍を京都に破り、西に走らせた。然るに尊氏は九州に於て菊池氏を破つてからその勢大となり、大軍を集めて東上し、之を迎へ撃つた官軍を兵庫附近で破り、ついで京都に入つたので、中興の大業はこゝに全く破れた。この戦に正成は僅



嗚呼、忠臣補子に墓

ら尊氏の心底を察せられたが、讒言にあつて鎌倉に幽せられ給うた。しかるに北條時行（高時の子）が亂を起して鎌倉に攻め入つた際、直義はこれをさへ得ず護良親王を弑し奉つて逃れたが、尊氏はすかさず時行を討ち、遂に直義と共に鎌倉に據つて叛いた。義貞は命をうけて尊氏を討つたが破れ、尊氏は京都に攻め上つたけれども、陸奥の北畠顯家がその後を追ひ、義貞、正成等と力を協せて賊軍を京都に破り、西に走らせた。然るに尊氏は九州に於て菊池氏を破つてからその勢大となり、大軍を集めて東上し、之を迎へ撃つた官軍を兵庫附近で破り、ついで京都に入つたので、中興の大業はこゝに全く破れた。この戦に正成は僅

湊川の戦

かな兵を以て直義の大軍にあたり、惡戰苦闘の結果、遂に湊川で壯烈な戦死をとげた。

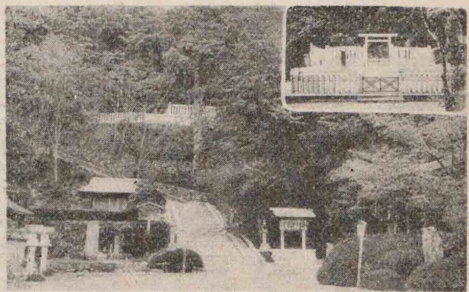
第二章 吉野朝廷

官軍の不振と後醍醐天皇崩御 延元元年、後醍醐天皇は吉野に行幸せられ、此處で政治をとり給うた。然るに當時義貞は皇太子恒良親王<sup>ツネナガ</sup>を奉じて北陸に赴き、勤皇の兵を集めて一時勢を振つたが、遂に敗れ、親王は捕へられて後害され給ひ、義貞も藤島に戦死した。この頃顯家もまた和泉に討死し、北畠親房が義良親王を奉じて東國に赴き、官軍を集めようとした計畫も暴風に妨げられて果されず、官軍の勢は日々に傾いた。かゝる御困難の間にも天皇は常に大御心を萬民の上にとゞめさせられ、

世治り民安かれと祈るこそ わが身につきぬ思なりけれ

顯家戦死  
義貞戦死

後醍醐天皇陵



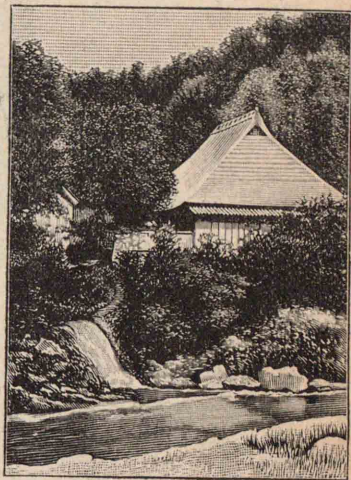
と詠ませ給うた。また曾て飢饉がつゞいて萬民が苦んだ時には、朕の不徳からかく飢饉になるのであれば、天は朕を罰せよ。何の罪があつて一般の人民を苦めるのかと仰せ給うて朝の供御をとゞめられ、貧困者を救ふ費用に致された。然るに京都恢復の御志も遂に空しく、朕の心にかゝる事は朝敵を悉く滅ぼして四海を泰平ならしめんと思ふばかりである。朕の身はたとへ吉野山の苔に埋るとも朕の魂は常に京都の天を望むであらう。もし朕の命にそむくことがあれば君も繼體の君でなく、臣も忠烈の臣ではないぞと仰せ給うて崩御あらせられた。かゝる内に諸國の官軍次第に勢力を失つたが、宗良親王は遠江を根據地として回復を圖り給ひ、常陸に據つた親房は東奔西走、國事に盡力

天皇崩御

神皇正統記

賀名生の遺址

正行戦死



いた。然るに正行が戦死したため、賀名生の行幸となり、親房また  
薨じて南風益、競はず、菊池武光は筑後川に賊軍を破つて勢を得た  
が、後漸く不振になつた。

後龜山天皇京都還幸 かくて正中九年、後龜山天皇は多年の戦  
亂に萬民の困苦が益、加はることを憐み給ひ、足利義滿の切なる奏  
請を許して京都に還幸あらせられ、神器を後小松天皇に御傳へに  
なつた。後醍醐天皇の吉野行幸以來、凡そ六十年にわたる兵亂が

こゝに鎮まることとなつた。

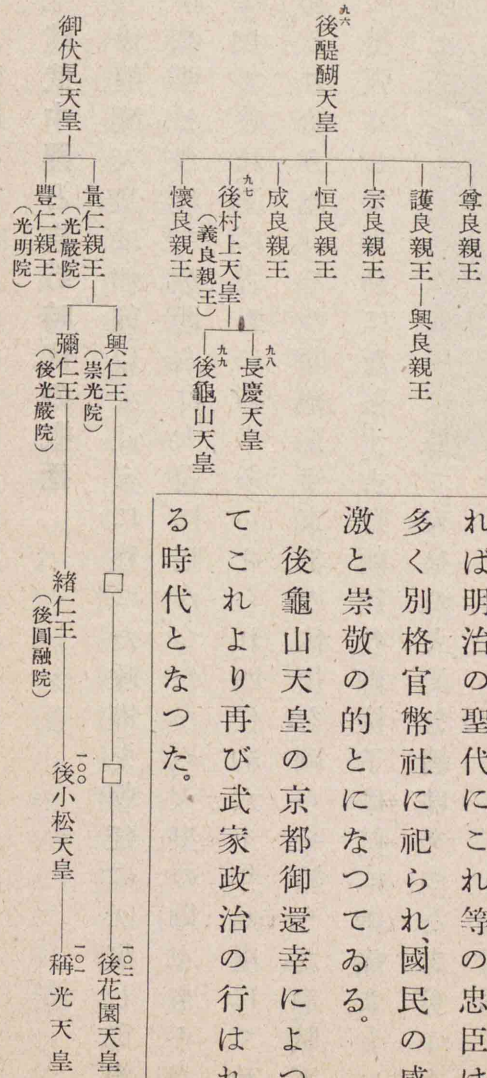
建武中興と吉野時代の概括

後醍醐天皇は頼朝以來武家に移つた政權を朝廷に回復し、御親  
政の世とされたが、世人は大義に暗かつたため、天皇の御志も不幸  
にして破れ、遂に吉野に行幸あらせられ、四代約六十年、此處にて政  
をとり給うた。その間絶えず京都の恢復を圖らせ給うたが、賊軍  
の勢強くして容易にならず、吉野朝廷の御様子は眞に御痛ましい  
限であつた。この前後に於て天皇の大業を輔け奉つた忠勇の士  
は燃えるやうな尊皇の精神を以て憤起し、生死を忘れて奮闘した。  
畏くも護良親王を始め、諸皇子は何れも御身を挺して朝廷のため  
につくされ、或は吉野に、陸奥に、九州に、或は吹雪の北陸に、または怒  
濤狂ふ東海に官軍を指揮し、その勢力の擴大を圖り給うたが、痛ま  
しくも護良、恒良、尊良の三親王は戦塵の内に薨じ給うた。

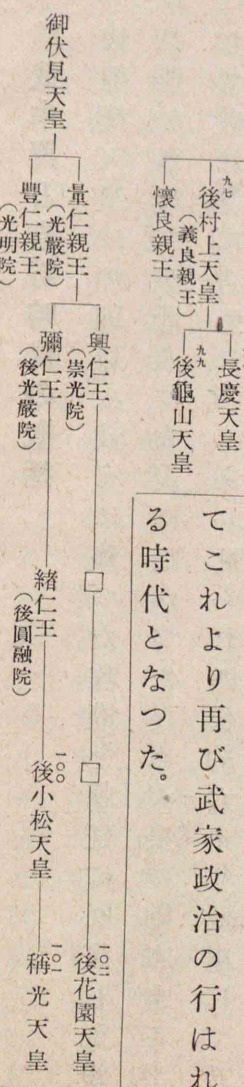
思ひぎや手も觸れざりし梓弓 起きふしわが身馴れんものとは 宗良親王  
 また七生までも朝敵を倒さうと誓つた楠木一族を始め、新田・北畠・  
 菊池其他諸氏の忠勇なる行爲こそ眞の武士道であり、大君の醜シマの  
 御楯タテと出で立つわれは」といふ我が國民精神の發露で、その壯烈は

鬼神を泣かしめる程であつた。されば明治の聖代にこれ等の忠臣は多く別格官幣社に祀られ國民の感激と崇敬の的になつてゐる。後龜山天皇の京都御還幸によつてこれより再び武家政治の行はれる時代となつた。

皇室御系圖(十)



建武中興	建武中興	建武中興
建武元年	建武二年	建武三年
建武四年	建武五年	建武六年
建武七年	建武八年	建武九年
建武十年	建武十一年	建武十二年
建武十三年	建武十四年	建武十五年
建武十六年	建武十七年	建武十八年
建武十九年	建武二十年	建武二十一年
建武二十二年	建武二十三年	建武二十四年
建武二十五年	建武二十六年	建武二十七年
建武三十年	建武三十一年	建武三十二年
建武三十四年	建武三十五年	建武三十六年
建武三十九年	建武四十年	建武四十一年
建武四十四年	建武四十五年	建武四十六年
建武四十九年	建武五十年	建武五十一年
建武五十四年	建武五十五年	建武五十六年
建武五十九年	建武六十年	建武六十一年
建武六十四年	建武六十五年	建武六十六年
建武六十九年	建武七十年	建武七十一年
建武七十四年	建武七十五年	建武七十六年
建武七十九年	建武八十年	建武八十一年
建武八十四年	建武八十五年	建武八十六年
建武八十九年	建武九十年	建武九十一年
建武九十四年	建武九十五年	建武九十六年
建武九十九年	建武一〇〇年	建武一〇一年



第五年表 建武中興と吉野時代年表

時代	天	皇	年	紀	元	重要事項	概	要	對	外	關	係
建武中興	後醍醐	建武	元	一九九四	建武中興。	天皇御親征(中興)						
			二	一九九五	北條時行の亂。護良親王害され給ふ。	吉野時代						
		延元	元	一九九六	足利尊氏の友。	尊氏叛く						
			二	一九九七	尊氏の入京と西走。多々良濱の戰。							
			三	一九九八	湊川の戰。名和長年戰死。吉野遷幸。							
			三	一九九八	金ヶ崎城の陥落。							
			四	一九九九	北畠顯家・新田義貞の戰死。尊氏勝手に將軍と稱す。	忠臣の奮戦						
		正平	三	二〇〇八	後醍醐天皇崩す。							
			四	二〇〇九	四條畷の戰。賀名生遷幸。							
			四	二〇〇九	足利基氏鎌倉に下る(關東管領の始)							
			六	二〇一〇	高師直殺さる。僧疎石歿す。							
			九	二〇一四	北畠親房薨す。							
			一三	二〇一八	尊氏死す。							
			一四	二〇一九	筑後川の戰。							
		元中	八	二〇五一	足利義満、山名氏清を滅ぼす。							
			九	二〇五二	京都遷幸。高麗亡ぶ。李成桂朝鮮國を建つ。	京都遷幸						
									元	起	滅	ぶ
										朝		鮮

## 第六篇 室町時代

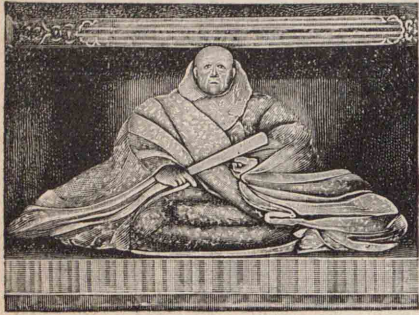
### 第一章 室町幕府の内治

#### 室町幕府

初め尊氏がほしきままに京都に幕府を開いたが、後  
龜山天皇の京都還幸の後、義満は征夷大將軍として、室町の幕府で  
政治を行ひ、諸豪族を抑へて幕府の基礎を固  
めた。その組織は鎌倉幕府の制にならひ、執  
権に相當する管領の下に侍所・政所・問注所を  
置いて政治を輔けしめ、地方には鎌倉に關東  
管領、九州・奥羽に探題を置き、また諸國にはも  
との如く守護・地頭を置いたが、これ等は概ね  
世襲的で次第に權力を増す者がでてきた。

幕府の組織

足利義満





金閣寺

義滿の奢侈 義滿は隱退後、奢侈に耽り、官位を求め、北山に豪華な別荘を構へ、金閣を造つて世を驚かし、諸寺を建立して國民の困苦を少しも顧みなかつた。また將軍を公方と稱し、或は明と交通して日本國王の稱を用ひ、不臣の行が多かつた。

内亂

足利氏が建武の中興を覆して、政治上の實權を握るにあたり、一族諸將に多くの領地を與へてその歡心を求めたため、將士の内には功を誇つてわがまゝをする者が多く、互に勢力を争つて内亂絶えず、幕府はその鎮壓に苦しんだ。



殊に關東管領は勢強く、關東公方と稱して幕府に對抗し、持氏に至り、將軍義教に反抗した。義教は豪氣な人で直ちにこれを滅ぼし、諸豪族を抑へて大いに幕府の勢をはつたが、遂に赤松滿祐のために殺

永享の亂

嘉吉の亂

兩公方の對立

された。これより次第に將軍の威が衰へ、世の中が益々亂れて、下剋上の世風が著しくなり、關東管領も分裂し、持氏の子成氏は古河に據つて古河公方と稱し、義政の弟政知の堀越公方と對立した。

義政の奢侈

將軍義政に至つては打續く内亂、天災、惡疫の流行に國費の缺乏、民の困苦は絶頂に達し、死屍道に横たはるの慘狀を呈する程であつたが、少しもそれを顧みず、奢侈を極め、義滿にならつて東山に銀閣を營み、遊樂に日を送つた。またその費用を得るために屢々重税を課し、或は貸借を無効にする暴令をも出したので、世の秩序は大いに亂れた。畏くも後花園天皇は民の慘狀に深く大御心を惱まし給ひ、義政に御製の詩を賜うて戒められた程であつた。

應仁の大亂

かくの如く世の騷亂が甚しくなつた時、義政の後嗣についての争が起り、また管領家の斯波、畠山兩家にも相續争が

徳政

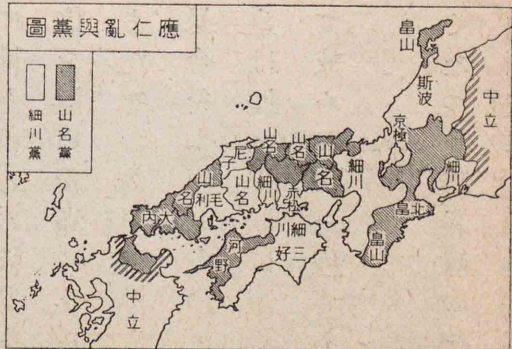
家督争

都の荒廢

あり、之をもとに天下は管領細川勝元と山名宗全の二派にわかれて應仁の大亂となつた。かくて京都を中心にした數萬の大軍が相戦ふこと十年餘にわたり、公卿武士の邸宅や社寺の兵火にかゝつて失はれるもの數知れず、萬代までの繁榮を期した花の都も全く焦土と化してしまひ、朝威は衰へ、公卿は諸國に流浪し、町人また兵火の都をすてて歸らず、

なれや知る都は野邊の夕雲雀 あがるを見ても落つる涙は

の慘ましい姿となつた。この兵亂のため歴代の文書寶物の失はれた物多く、我が國文化の上に實に一大損失を招いた。然し都の荒廢に反して地方諸侯の權が大となつたために、小田原・堺・兵庫・山



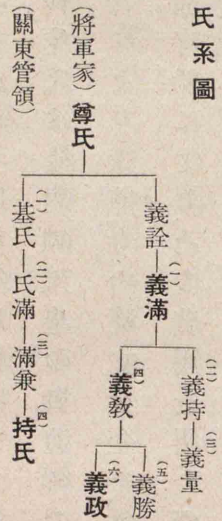
地方都市の勃興

口・博多などの地方都市が漸く勃興してきた。

皇室御系圖(十一)

後花園天皇<sup>一〇三</sup> 後土御門天皇<sup>一〇四</sup> 後柏原天皇<sup>一〇五</sup> 後奈良天皇<sup>一〇六</sup> 正親町天皇<sup>一〇七</sup> 誠仁親王<sup>一〇八</sup> 後陽成天皇<sup>一〇九</sup>

足利氏系圖



第二章 室町幕府の對外關係

明との交通 大陸との交通は元寇以來絶えてゐたが、商人の私的の通商があり、殊に元より明にかけて我が邊民が自由に貿易を

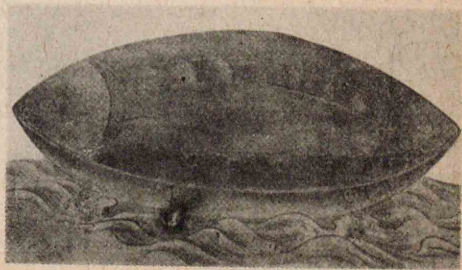
倭寇

なし、彼の官憲の壓迫に對しては勇敢に對抗し、また彼の暴民の之に加はる者多く、倭寇として怖れられた。

龜甲船

天龍寺船

室町幕府の外交は主に財政難を救ふため、彼の歡心を求めて屈從的な態度をも敢えてした。足利尊氏は後醍醐天皇の御追福のため、僧疎石の言により天龍寺の建立を企て、元との貿易船(天龍寺船)により、その費用を得たが、元に代つた明も倭寇に苦しみ、義滿にその禁止を求めた。義滿は財政難を貿易によつて救はんとし、明の要求を入れて倭寇を禁止し、また日本國王の號を僭稱し、彼に對して臣禮をとつた。義政に至つては榮華の内に育ち、奢を極めたので一層財政に苦しみ、遂に臣と稱して明に錢を求めるなど、國威を失ふことが大であつた。されば



勘合符

勘合符



彼我の貿易も盛となり、倭寇と區別するため、その船は勘合符を携へて往來した。

朝鮮との交通 朝鮮半島も倭寇に苦しみ、高麗が滅び、李成柱が朝鮮國をたてるや、その防備にとめたが、反面には對馬の宗氏を介して我が國との間に盛に貿易を行つた。

商都の繁榮

この頃の貿易は兵庫、堺、博多、平戸等で行はれたので、これ等の港は商業市となつて繁榮し、西國の大名、社寺及び商人などは盛に貿易につとめて利をはかり、周防の山口の如く、京都に代る繁榮を極めた所もあつた。

外交上の弊害

かくて幕府の外交は全く私利を圖るため、國家の面目を汚すことをも憚らず、嘗て聖徳太子が強大な隋に對し、嚴として對等の禮を以て交られた御精神に比すべくもなく、私慾

のために政權を握つた悪弊が、その極に達したものと云ふほかはない。然るに征西將軍懷良親王が倭寇禁止を要求せる明の書辭の無禮なるを責めて斷乎として之を却け給ひ、度重なる彼の威嚇にも屈せず、國家の面目を維持された外交は、これまた名分を紊した義滿義政の態度とよき對照をなしてゐる。

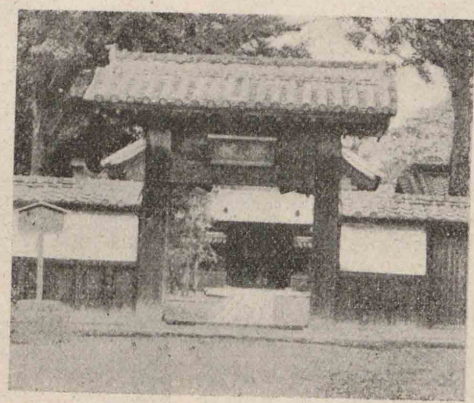
### 第三章 室町時代の文化

#### 禪風の文化

文化の特徴 この時代は明との貿易が盛であり、また禪僧が幕府の顧問となり、遣明使となつて彼の地の文化を傳へたので、明の影響をうけた禪宗風の文化が發達し、また後に民間に行はれた藝術が起つてきた。

宗教學問 佛教はまた前代の如く武士の間に禪宗が盛であり、一般民衆には日蓮宗・一向宗(浄土眞宗)等がよく行はれ、殊に一向宗は蓮

#### 五山文學 足利學校



如(ニホ)が出て一層ひろまつた。尊氏は天龍寺の他に、諸國に安國寺・利生塔を設け、義滿は京都・鎌倉の著名なる禪寺に順位をつけ、五山を定めた。

この時代の學問は禪僧によつて維持されたが、彼等は明の僧侶の風にならつて詩文をたしなんだので所謂五山文學が起り、また宋の學者朱熹などのたてた新しい學説をもとに儒教の研究が行はれ、教育も多く彼等によつてなされた。

兼良(カネラ)は學問に深く、また足利學校を再興して教育に力をつくした上杉憲實も出たが、學問は一般に不振であつた。

#### 美術工藝の發達

義滿義政等の奢侈の遊びは金閣・銀閣のやう

#### 建築

東求堂

東山慈照寺  
内の建物

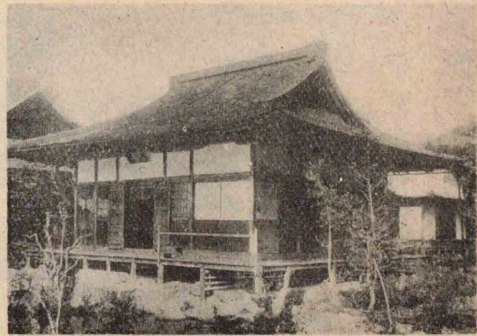
茶湯

茶室

東求堂内の  
茶室

東山時代

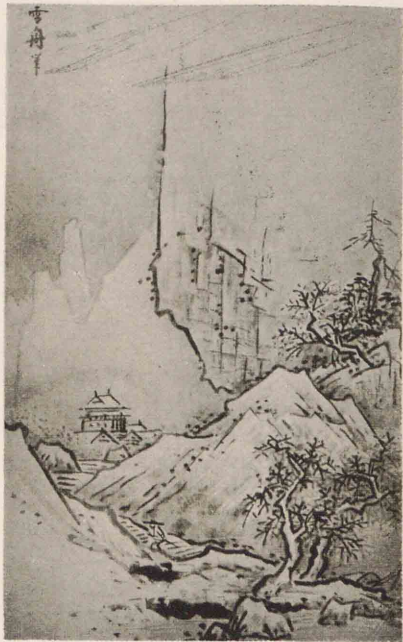
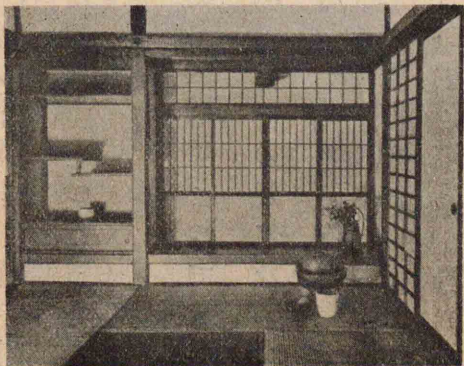
繪畫



な禪寺風の別荘をつくり、禪寺の學問所である書院造を取り入れ、庭園に於ける泉石の配置など何れも風雅清淡の趣をよくあらはした。殊に茶湯の風が盛に行はれ、義政は東山の別荘に茶室を設けて世の戦亂をよそに日夜茶事に耽つて清雅な氣分にひたつた。

この風がすべての文

化に強くあらはれ、殊に美術工藝の上からは東山時代といふ我が國美術史上の一大盛時を生み、就中繪畫の發展に見るべきものが多かつた。繪畫は宋・元の清楚な墨繪が傳はつて時人の嗜好に適し、さきには僧



筆舟雪



筆信元野狩



圖俗風代時町室

工 藝

國民藝術

能 樂

明兆ミチタカが知られ、義政の頃には水墨山水に長じ、明人を驚かした僧雪舟セツシュが、舟フネが出てその妙筆を振つた。またこの畫風と前代に盛に行はれた大和繪の粹をとつて狩野派を開いた狩野元信は、稀に見る名手が、大いに世の名聲を博した。繪畫の發達に伴ひ彫金・蒔繪の技術が進歩し、また茶湯の流行は陶磁器・漆器の發達を促した。彫金には後藤祐乘ゴトウユヅルが最も知られ、陶器の製法には祥瑞シヨウジ五郎大夫ゴロウダイフが明より製陶の法を得て歸り、唐津焼をおこし、茶湯に適する淡白風雅なものを製して世の稱讚を得た。



**風俗** この時代から茶道のほか、連歌レンカ・能樂ノ・狂言キョウゲン・謠曲ワカ・生花イハナ等、後世國民藝術としてひろく民間に行はれるものが起り、禮儀作法・料理の様式なども多く制

士風頹廢

定され、住宅も玄關床間を設け、襖を立て、庭園茶室をつくるなど、今日の住宅に似たものができた。かくて一般に奢侈を極め、遊藝が盛で、世の騒亂をよそに怪奇な風習も行はれ、野卑な遊樂が上下にひろがった。また武士は公卿僧侶と交つて武人としての特質を失ふに至り、社會の腐敗と共に士風もみだれ、一大革新が必要とされた。

### 第四章 戰國時代の社會

**戰國時代の世相** 應仁の亂後、幕府は全く有名無實となつてその命令は行はれず、將軍の實權は次第に下にうつり、功名富貴を望む者が各地に於て互ひに攻略し、或は主を倒し、友を討つても憚らず、弱肉強食、名門舊家の倒れて家臣の之に代る者多く、下剋上の氣風が漲ること一百餘年に及ぶ戰國時代となつた。

北條早雲

關東

武田信玄

越後

甲斐

駿河

上杉謙信

桶狭間の戰  
中國



#### 群雄割據

かくて群雄は各地に割據して爭奪を事としたが、次第に地方毎に統一されるやうになつた。關東では北條早雲が小身より身を起し、伊豆相模を併せて小田原城に據り、子氏綱孫氏康

よく遺業をついで關東に威を振つた。また越

後の上杉謙信、甲斐の武田信玄は相對立し、共に

上京を志して果さず、駿河の今川義元は勢力強

く、また上京の志があり、尾張まで進んだが、織田

信長のために桶狭間に奇襲されて倒れた。中

國では出雲の尼子氏と周防の大内氏が相争つ

てゐたが、安藝の毛利元就が遂に覇をとなへて



九州

毛利元就



獨り榮えた。また四國の長曾我部氏、九州の大友・島津の二氏等も地方の代表的のものであつたが、中央に遠く、影響するところが比較的少かつた。

**革新の氣運** かゝる時勢に於て諸將は常に油斷なく、緊張の内に生活し、その勢力の維持のためには民力の涵養に苦心し、亂世ながらも地方毎に革新の氣運が漲つて

ゐた。されば士民の愛撫、産業の開發、學問・教育の獎勵も行はれる風があり、北條氏康の仁政、武田信玄の鑛山採掘、大内氏による山口の繁榮等、その著しいもので、また學問・風雅のたしなみある武士も少くなかつた。

**皇室の御衰微と御恩徳** かゝる戰亂の世のため、皇室の御料地の失はれるもの多く、畏くも日々の供御にさへ御不自由がちでお

御聖徳

はしたが、幕府は如何ともすることができなかつた。宮殿は荒れはてたまゝ繕ふこともなく、諸種の御儀式は勿論、即位の禮、大葬の御儀さへとゞこほり勝ちの御有様であつた。然し萬世一系の皇統は嚴として動かず、御歴代の天皇が常に御身を忘れて民の上に御心をかけさせられ、その安穩を神佛に祈り給うた御仁慈は國民の齊しく感泣する所であつた。後奈良天皇は疫病に惱む萬民の苦を察せられ、民がかく困窮するのは民の親たる自分の徳が足りないからであるといふ意味の御言葉があり、御親ら經文を寫して災を攘はんことを御祈りになつた。されば世亂れても國民の復歸する所は常に皇室で、父母の慈悲を以て憐み給ふ大御心はやがて國民の心に通ひ、戰亂の間にも大内義隆・毛利元就及び本願寺等の獻金の事があり、清順尼の如きは女ながらも外宮の御造營に努力し奉つた。また群雄は何れも皇室を奉戴して天下に號令せん

國民の赤誠





第六年表 室町時代年表

時代	天皇	年號	紀元	重要事項	概	要	對外關係
(100)後小松	應永	元	二〇五四	足利義滿將軍職を辭し、子義持繼ぐ。 金闥成り、義滿こゝに移る。	室町幕府	(明)朝鮮 義滿通商 倭寇禁止	
(101)稱光	永享	元	二〇五七	三管領・四職を定む。			
(102)後花園	應永	四	二〇五八	應永の亂。			
	應永	五	二〇五九	義滿好を明に通ず。			
	應永	六	二〇六一	義滿好を明に通ず。			
	應永	八	二〇六八	義滿薨す。			
	應永	一五	二〇七九	將軍義持明との通好を謝絶す。			
	應永	二六	二〇八九	足利義教將軍となる。			
	應永	四	二〇九二	義教使を明に遣はして通好を復せしむ。			
	應永	一〇	二〇九八	永享の亂起る。			
	應永	一一	二〇九九	足利持氏亡ぶ。			
	應永	一〇	二〇九九	嘉吉の亂。			
	應永	一	二〇一〇	足利成氏關東管領となる。足利義政將軍となる。	幕府衰微 諸將の叛		
	應永	元	二〇一九	成氏古河に據る。			
	應永	元	二〇一五	足利政知堀越に來る。越田道灌江戸城を築く。			
	應永	元	二〇一七	應仁の亂起る。	戰國時代		
(103)後土御門	應仁	元	二〇二七	雪舟明より歸る。			
	應仁	元	二〇二九	山名宗全・細川勝元卒す。足利義尙將軍となる。			
	應仁	元	二〇三三	應仁の亂終る。			
	應仁	元	二〇三七	銀閣成り、義政こゝに移る。			
	應仁	元	二〇四三	足利義政薨す。	群雄割據		
	應仁	元	二〇四五	長氏(北條早雲)小田原を取る。			
	應仁	元	二〇五〇	ポルトガル人印度新航路を發見す。			
	應仁	元	二〇五五	即位式を行はせらる(踐祚後二十二年)。			
(104)後柏原	大永	元	二〇八二	即位式を行はせらる(踐祚後二十二年)。			
	大永	七	二〇八八	即位式を行はせらる(踐祚後二十二年)。			
(105)後奈良	天文	元	二〇九六	即位式を行はせらる(踐祚後十年)。			
	天文	二	二〇九八	ポルトガル人初めて種子島に來る。			
	天文	五	二〇一〇	北條氏康上杉氏を川越に破る。			
	天文	一五	二〇二〇	ガブリエル鹿兒島に來る。			
	天文	一八	二〇二三	陶晴賢大内義隆を弑す。			
	天文	二〇	二〇二五	川中島の戰。嚴島の戰。			
	天文	二二	二〇二七	桶狭間の戰。			
(106)正親町	弘治	元	二〇三五	川中島の戰。			
	弘治	三	二〇三九	桶狭間の戰。			
	弘治	四	二〇四〇	川中島の戰。			
	弘治	八	二〇四四	桶狭間の戰。			
	弘治	一〇	二〇四六	川中島の戰。			
	弘治	一四	二〇五〇	桶狭間の戰。			
	弘治	一八	二〇五四	川中島の戰。			
	弘治	二〇	二〇五六	桶狭間の戰。			
	弘治	二二	二〇五八	川中島の戰。			
	弘治	二四	二〇六〇	桶狭間の戰。			
	弘治	二六	二〇六二	川中島の戰。			
	弘治	二八	二〇六四	桶狭間の戰。			
	弘治	三〇	二〇六六	川中島の戰。			
	弘治	三二	二〇六八	桶狭間の戰。			
	弘治	三四	二〇七〇	川中島の戰。			
	弘治	三六	二〇七二	桶狭間の戰。			
	弘治	三八	二〇七四	川中島の戰。			
	弘治	四〇	二〇七六	桶狭間の戰。			
	弘治	四二	二〇七八	川中島の戰。			
	弘治	四四	二〇八〇	桶狭間の戰。			
	弘治	四六	二〇八二	川中島の戰。			
	弘治	四八	二〇八四	桶狭間の戰。			
	弘治	五〇	二〇八六	川中島の戰。			
	弘治	五二	二〇八八	桶狭間の戰。			
	弘治	五四	二〇九〇	川中島の戰。			
	弘治	五七	二〇九二	桶狭間の戰。			
	弘治	五九	二〇九四	川中島の戰。			
	弘治	六一	二〇九六	桶狭間の戰。			
	弘治	六三	二〇九八	川中島の戰。			
	弘治	六五	二〇一〇	桶狭間の戰。			
	弘治	六七	二〇一二	川中島の戰。			
	弘治	六九	二〇一四	桶狭間の戰。			
	弘治	七一	二〇一六	川中島の戰。			
	弘治	七三	二〇一八	桶狭間の戰。			
	弘治	七五	二〇二〇	川中島の戰。			
	弘治	七七	二〇二二	桶狭間の戰。			
	弘治	七九	二〇二四	川中島の戰。			
	弘治	八一	二〇二六	桶狭間の戰。			
	弘治	八三	二〇二八	川中島の戰。			
	弘治	八五	二〇三〇	桶狭間の戰。			
	弘治	八七	二〇三二	川中島の戰。			
	弘治	八九	二〇三四	桶狭間の戰。			
	弘治	九一	二〇三六	川中島の戰。			
	弘治	九三	二〇三八	桶狭間の戰。			
	弘治	九五	二〇四〇	川中島の戰。			
	弘治	九七	二〇四二	桶狭間の戰。			
	弘治	九九	二〇四四	川中島の戰。			
	弘治	一〇一	二〇四六	桶狭間の戰。			
	弘治	一〇三	二〇四八	川中島の戰。			
	弘治	一〇五	二〇五〇	桶狭間の戰。			
	弘治	一〇七	二〇五二	川中島の戰。			
	弘治	一〇九	二〇五四	桶狭間の戰。			
	弘治	一一一	二〇五六	川中島の戰。			
	弘治	一一三	二〇五八	桶狭間の戰。			
	弘治	一一五	二〇六〇	川中島の戰。			
	弘治	一一七	二〇六二	桶狭間の戰。			
	弘治	一一九	二〇六四	川中島の戰。			
	弘治	一二一	二〇六六	桶狭間の戰。			
	弘治	一二三	二〇六八	川中島の戰。			
	弘治	一二五	二〇七〇	桶狭間の戰。			
	弘治	一二七	二〇七二	川中島の戰。			
	弘治	一二九	二〇七四	桶狭間の戰。			
	弘治	一三一	二〇七六	川中島の戰。			
	弘治	一三三	二〇七八	桶狭間の戰。			
	弘治	一三五	二〇八〇	川中島の戰。			
	弘治	一三七	二〇八二	桶狭間の戰。			
	弘治	一三九	二〇八四	川中島の戰。			
	弘治	一四一	二〇八六	桶狭間の戰。			
	弘治	一四三	二〇八八	川中島の戰。			
	弘治	一四五	二〇九〇	桶狭間の戰。			
	弘治	一四七	二〇九二	川中島の戰。			
	弘治	一四九	二〇九四	桶狭間の戰。			
	弘治	一五一	二〇九六	川中島の戰。			
	弘治	一五三	二〇九八	桶狭間の戰。			
	弘治	一五五	二〇一〇	川中島の戰。			
	弘治	一五七	二〇一二	桶狭間の戰。			
	弘治	一五九	二〇一四	川中島の戰。			
	弘治	一六一	二〇一六	桶狭間の戰。			
	弘治	一六三	二〇一八	川中島の戰。			
	弘治	一六五	二〇二〇	桶狭間の戰。			
	弘治	一六七	二〇二二	川中島の戰。			
	弘治	一六九	二〇二四	桶狭間の戰。			
	弘治	一七一	二〇二六	川中島の戰。			
	弘治	一七三	二〇二八	桶狭間の戰。			
	弘治	一七五	二〇三〇	川中島の戰。			
	弘治	一七七	二〇三二	桶狭間の戰。			
	弘治	一七九	二〇三四	川中島の戰。			
	弘治	一八一	二〇三六	桶狭間の戰。			
	弘治	一八三	二〇三八	川中島の戰。			
	弘治	一八五	二〇四〇	桶狭間の戰。			
	弘治	一八七	二〇四二	川中島の戰。			
	弘治	一八九	二〇四四	桶狭間の戰。			
	弘治	一九一	二〇四六	川中島の戰。			
	弘治	一九三	二〇四八	桶狭間の戰。			
	弘治	一九五	二〇五〇	川中島の戰。			
	弘治	一九七	二〇五二	桶狭間の戰。			
	弘治	一九九	二〇五四	川中島の戰。			
	弘治	二〇一	二〇五六	桶狭間の戰。			
	弘治	二〇三	二〇五八	川中島の戰。			
	弘治	二〇五	二〇六〇	桶狭間の戰。			
	弘治	二〇七	二〇六二	川中島の戰。			
	弘治	二〇九	二〇六四	桶狭間の戰。			
	弘治	二一一	二〇六六	川中島の戰。			
	弘治	二一三	二〇六八	桶狭間の戰。			
	弘治	二一五	二〇七〇	川中島の戰。			
	弘治	二一七	二〇七二	桶狭間の戰。			
	弘治	二一九	二〇七四	川中島の戰。			
	弘治	二二一	二〇七六	桶狭間の戰。			
	弘治	二二三	二〇七八	川中島の戰。			
	弘治	二二五	二〇八〇	桶狭間の戰。			
	弘治	二二七	二〇八二	川中島の戰。			
	弘治	二二九	二〇八四	桶狭間の戰。			
	弘治	二三一	二〇八六	川中島の戰。			
	弘治	二三三	二〇八八	桶狭間の戰。			
	弘治	二三五	二〇九〇	川中島の戰。			
	弘治	二三七	二〇九二	桶狭間の戰。			
	弘治	二三九	二〇九四	川中島の戰。			
	弘治	二四一	二〇九六	桶狭間の戰。			
	弘治	二四三	二〇九八	川中島の戰。			
	弘治	二四五	二〇一〇	桶狭間の戰。			
	弘治	二四七	二〇一二	川中島の戰。			
	弘治	二四九	二〇一四	桶狭間の戰。			
	弘治	二五一	二〇一六	川中島の戰。			
	弘治	二五三	二〇一八	桶狭間の戰。			
	弘治	二五五	二〇二〇	川中島の戰。			
	弘治	二五七	二〇二二	桶狭間の戰。			
	弘治	二五九	二〇二四	川中島の戰。			
	弘治	二六一	二〇二六	桶狭間の戰。			
	弘治	二六三	二〇二八	川中島の戰。			
	弘治	二六五	二〇三〇	桶狭間の戰。			
	弘治	二六七	二〇三二	川中島の戰。			
	弘治	二六九	二〇三四	桶狭間の戰。			
	弘治	二七一	二〇三六	川中島の戰。			
	弘治	二七三	二〇三八	桶狭間の戰。			
	弘治	二七五	二〇四〇	川中島の戰。			
	弘治	二七七	二〇四二	桶狭間の戰。			
	弘治	二七九	二〇四四	川中島の戰。			
	弘治	二八一	二〇四六	桶狭間の戰。			
	弘治	二八三	二〇四八	川中島の戰。			
	弘治	二八五	二〇五〇	桶狭間の戰。			
	弘治	二八七	二〇五二	川中島の戰。			
	弘治	二八九	二〇五四	桶狭間の戰。			
	弘治	二九一	二〇五六	川中島の戰。			
	弘治	二九三	二〇五八	桶狭間の戰。			
	弘治	二九五	二〇六〇	川中島の戰。			
	弘治	二九七	二〇六二	桶狭間の戰。			
	弘治	二九九	二〇六四	川中島の戰。			
	弘治	三〇一	二〇六六	桶狭間の戰。			
	弘治	三〇三	二〇六八	川中島の戰。			
	弘治	三〇五	二〇七〇	桶狭間の戰。			
	弘治	三〇七	二〇七二	川中島の戰。			
	弘治	三〇九	二〇七四	桶狭間の戰。			
	弘治						

第七篇 安土・桃山時代

第一章 國內統一

織田信長の統一



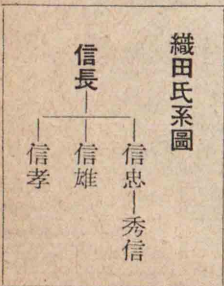
織田信長

勤皇

入京し、御所を修理し、御料を獻じ、京都の市街を復舊し、足利義昭を將軍として秩序の恢復を圖

全國が次第に地方毎に統一されつゝあつた時、尾張より出た織田信長は地の利と果斷とを以て漸く勢を得、今川義元を桶狭間に破つてより東海の雄となつた。時に正親町天皇は勅して御料地回復の大命を下されたので、信長は大いに感激して

織田氏系圖



足利氏滅ぶ

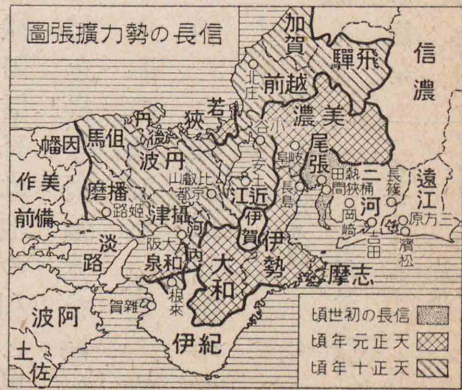
安土時代

長篠戦

るなど、功績が頗る大であつた。

信長は諸國の統一に意を用ひ、先づ近江・越前の軍を姉川に破り、ついで叡山を焼いてその勢力を毀ち、また將軍義昭と不和になり之を逐つたので、足利氏は絶え、室町幕府は滅んだ。また大阪の石山本願寺を攻めて之と和し、こゝに近畿地方の平定ができたので、近江に安土城を築いてこゝを根據に全國統一の業をすゝめた。この時代を安土時代といふ。

この頃、武田信玄は西上せんとして徳川家康を三方ヶ原に破つたが、間もなく病歿し、子の勝頼は父の志をついで兵を三河に出したが、長篠の戦に織田徳川の聯合軍に破られ、ついで天正十年に全



中國征伐

本能寺變

豊臣秀吉

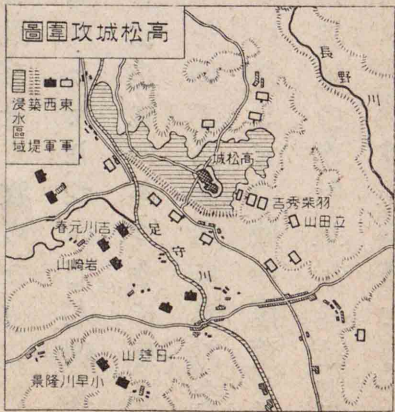
山崎戦



く滅ぼされた。越後の上杉氏は謙信の歿後また振はず、東國には北條氏のみ強大であつた。また、中國の毛利氏はその勢力大で上杉・武田の二氏と結び、足利義昭を援け、信長に對して一敵國の觀があつた。信長は部將羽柴秀吉をして之を討たしめ、己も出征せんとして入京した

時、部將明智光秀のために本能寺に殺され、天下統一の業を半途にして倒れた。

**秀吉の統一** 信長の統一の業を完成した者は秀吉である。秀吉は當時備中の高松城を圍んで、毛利氏の大軍に相對してゐたが、本能寺の變報を知るや、直ちに和して軍を返し、光秀を山崎に破つて信長の仇を報じた。



賤ヶ嶽戦

小牧山戦

統一

聚樂第

柴田勝家は秀吉の威名があがるのを見て之を除かうとし、賤ヶ嶽に戦つたが、却つて破れ、越前北庄に滅んだ。こゝに於て秀吉は大坂に宏大な城を築き、こゝを根據として、全國統一の業をすゝめ、ついで徳川家康と小牧山に戦つたが、その不利をさとして和した。かくて四國の長曾我部氏、九州の島津氏、關東の北條氏を討伐し、また北國の上杉氏をはじめ、伊達氏以下の奥羽の諸將を降して全國を統一し、應仁以來百餘年にわたつた戦亂を全く收めた。

**秀吉の尊皇** この間に秀吉は従一位關白となり、ついで太政大臣に任ぜられ、豊臣の姓を賜はつた。秀吉は皇恩のあつきに感じ、京都に聚樂第を造つて後陽成天皇の行幸を仰ぎ、諸大名に忠誠を誓はした。人々はこの盛儀を目のあたりに拜して皇威の復舊と隆盛に感泣せざるはなかつた。かくて御料地の奉獻、皇居の造營、皇大神宮の修造、朝儀の恢復等相ついて行はれ、益々尊皇の實をあげ

た。

諸制度の統一

大坂城



**秀吉の政治** 秀吉は諸大名を各地に封じたが、これ等をよく統べて中央集権の實をあげた。中央には五大老を置いて天下の大事を議せしめ、五奉行によつて民政を掌らしめた。また産業の發達によく意を用ひ、全國の田地を調査し、田制、税制、貨幣制等を始め、諸制度の改革されるものが多かつた。

**桃山時代の文化** かくて秀吉は統一の業を完成し、その晩年、桃山城（伏見城）にゐたので、その

豪壯の風

時代を桃山時代といふ。こゝに多年の戦亂治まり、美術・工藝が進んだが、秀吉の豪快な風をうけて、聚樂第・桃山城などの建築彫刻狩野永徳・山樂の健筆を振つた繪畫など、豪壯なものであらわれた。前代より行はれた茶湯は最も盛で、秀吉は當時聞えた千利休を師とし、北野の大茶會を始め、屢茶會を催して奨励したので益普及し、之に伴つて陶器漆器の製法も進んだ。産業も一般に進歩し、殊に西洋の技術をうけて金山・銀山の開發は著しく進み、江戸時代の繁榮の前驅をなした。

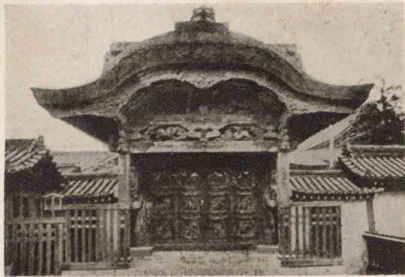
第二章 西洋文化傳來の影響

西洋人の渡來 室町時代の初頃から西洋人がしきりに東洋に來航して貿易を行つてゐたが、イスパニヤ・ポルトガルは最も熱心で、喜望岬を迂廻する航路が發見されてから、その商船の印度支那

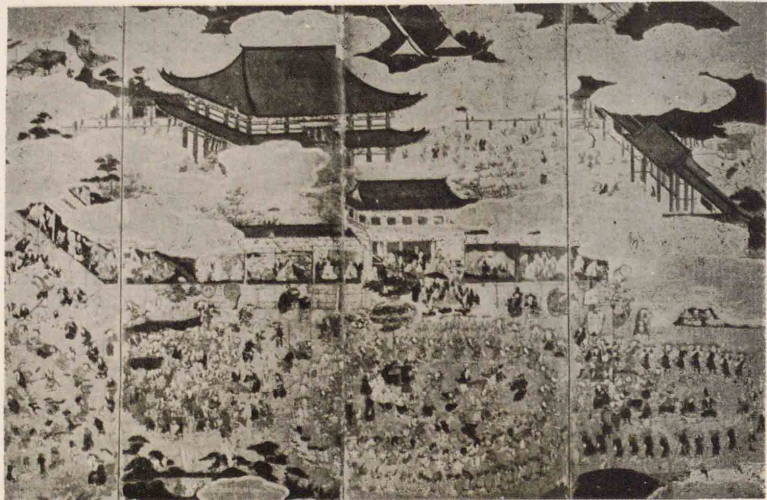
飛雲閣



西本願寺唐門



豊國祭圖



狩野山樂筆



西本願寺飛雲閣

聚樂第の一部をうつしたものといはれる。

西本願寺唐門

桃山城の遺構を徳川氏が寄進したものといはれ桃山城を偲ぶ遺物である。

豊國祭圖

慶長九年豊臣秀吉の七回忌に於ける豊國神社臨時大祭の圖である。方廣寺大佛の前で京都市民が亂舞した豊國踊の様子と當時の風俗とが見られる。

梅に禽鳥圖

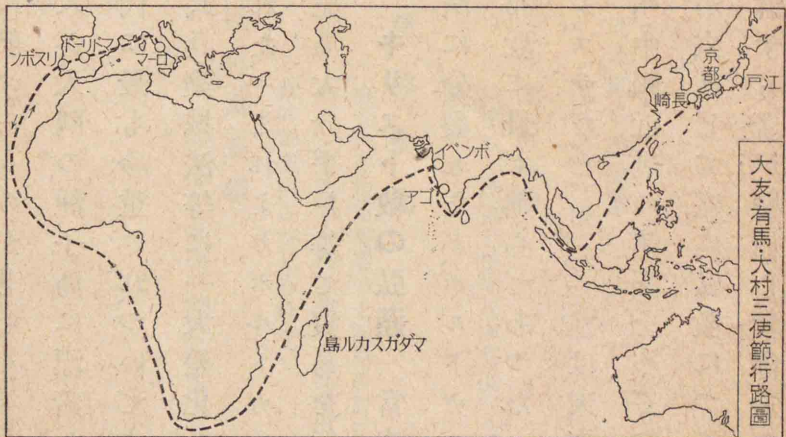
天球院本堂の襖繪で狩野山樂筆と傳へられる。

小銃傳來

に航するものが著しく増加した。天文十二年初めてポルトガル人が大隅の種子島に漂着したが、この時もたらした小銃は戰國時代に最も珍重され、ついで大砲も傳はつたので、我が國の戰術武器、武具、築城法等に一大變化を與へ、長篠の戰には既に小銃が用ひられた。これよりポルトガル人、イスパニヤ人が相ついで來航し、鹿兒島、大分、平戸等で貿易を行ひ、我が國人は彼等を南蠻人と稱した。キリスト教の弘通 當時ヨーロッパではキリスト教が新舊二派に分裂したが、ポルトガル、イスパニヤは舊教に屬し、東洋方面の布教に最も熱心であつた。印度に布教してゐた宣教師のフランシス・サヴィエル(イスパニヤ人)は天文十八年、鹿兒島に來てその教を傳へ、九州・中國・近畿の諸國をめづつて布教し、またついで多くの宣教師が來航して盛に弘教につくしたので、九州の諸大名をはじめ、之を信ずる者が増加し、教會堂や學校が諸處に設けられ、西洋の文化が

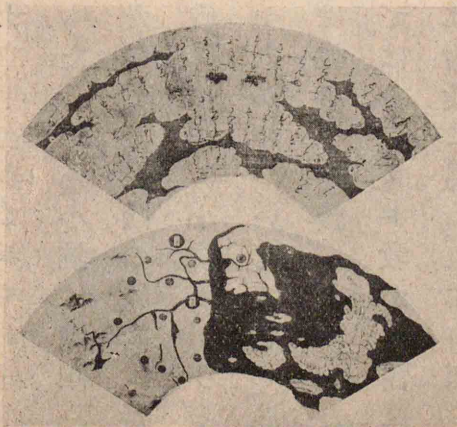
キリスト教保護

日支語對譯及三國地圖扇面



國內に弘まつた。當時我が國人はキリスト教のことを切支丹宗または天主教と云つてゐたが、信長は佛教徒を抑へるために之を保護し、九州の大友・大村有馬の諸侯の如きはその使者を遠くローマに遣はした程であつた。

かくキリスト教の弘まるにつれ、西

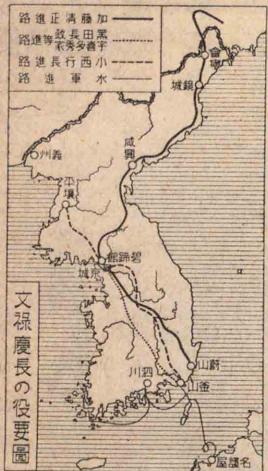


キリスト教禁止

洋の學藝が傳はり、國語を始め、各方面に影響をうけたものが多かつたが、信徒の中には先祖の位牌を棄て、社寺を毀つなど、我が國風に反する極端な行爲をなす者があり、また西洋諸國が布教を領土侵略の手段に用ひるとの説も行はれたので、秀吉は斷然キリスト教を禁止した。

文祿・慶長の役

**秀吉の海外發展策** 秀吉は國內統一の後、更に海外への發展をはかり、明を討つ目的で、文祿・慶長の二度にわたり、大軍を朝鮮に進めた。この兩役に於て加藤清正を始め、小早川隆景・島津義弘等の



奮戦は目覺ましく、殊に文祿の役には朝鮮八道は全く我が旗風に靡き、明の援軍も破れて爲す所を知らなかつた。秀吉はまたルソンに於けるイスパニヤの大守や、印度・臺灣に

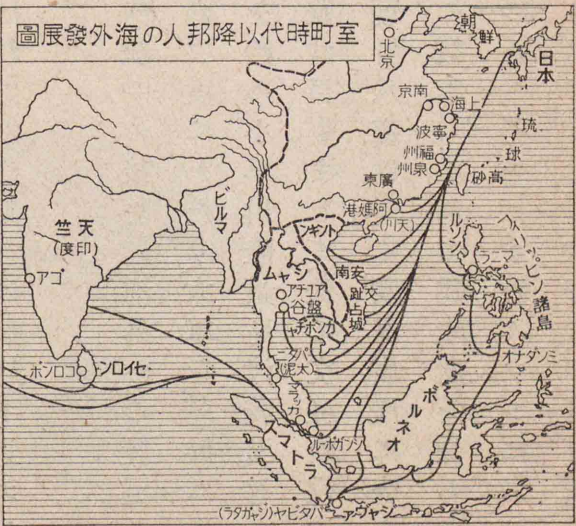


貿易

も使を送つてその入貢を促すなど意氣益高く、國威を振はせたが、慶長の役の中道にして薨じ、明の都に奠都しようとした。その雄圖は空しく夢と化した。なほ秀吉は貿易の發展を奨励したので、長崎・堺・京都等の商人で免許を受けて遠く安南・シヤム・印度方面にまで貿易船を送る者があり、國民の海外發展の氣風は著しかった。

安土桃山時代の概括

戰國兵亂の世を統一してその中に漲る革新の氣運のもとに行



桃山時代	
(1) 後陽成	
一三	四國平定。秀吉從一位關白となる。
一四	五奉行を置く。
一五	九州平定。秀吉聚樂第に移る。
一六	聚樂第行幸。秀吉大小判金を鑄造す。
一七	檢地を始む。
一八	北條氏亡ぶ。全國平定。徳川家康江戸に入る。
一九	秀吉書をフリップピンの太守に與ふ。
元	朝鮮の遠征(文祿の役)。
二	小西行長沈惟敬と和を議す。秀吉臺灣に入貢を促す。
三	秀吉伏見城を築く。
元	明使來る。
二	朝鮮の再征(慶長の役)。
三	朝鮮戰役終る。
三	秀吉薨す。朝鮮戰役終る。

尊皇

統一成る

對外發展

朝鮮征伐

朝鮮征伐

安土・桃山時代の概括  
 戦國兵亂の世を統一してその中に漲る革新の氣運のもとに行

第七年表 安土・桃山時代年表

時代	天皇	年號	紀元	重要事項	概	要	對外關係
天正	(二〇)正親町	永祿一一元 元龜元 天正元	二二二八 二二三〇 二二三三	信長入京。足利義昭將軍となる。 信長皇居を修め奉る。姉川の戦。 信長比叡山を燒く。 三方ヶ原の戦。 武田信玄卒す。足利氏亡ぶ。淺井・朝倉二氏亡ぶ。 長篠の戦。 安土城成り、信長こゝに移る。 羽柴秀吉中國征伐に赴く。 上杉謙信卒す。 信長本願寺と和す。 武田氏亡ぶ。高松城攻圍。本能寺の變。山崎の戦。大友・大村・有馬の三氏使を羅馬に派遣す。 賤ヶ嶽の戦。秀吉大阪城を修築す。 小牧・長久手の戦。 四國平定。秀吉從一位關白となる。 五奉行を置く。 秀吉太政大臣に任ぜられ、豐臣の姓を賜はる。 九州平定。秀吉聚樂第に移る。 聚樂第行幸。秀吉大小判金を鑄造す。 檢地を始む。 北條氏亡ぶ。全國平定。徳川家康江戸に入る。 戸に入る。 秀吉書をフイリッピンの太守に與ふ。 五大老を置く。 朝鮮の遠征(文祿の役)。 小西行長沈惟敬と和を議す。秀吉臺灣に入貢を促す。 秀吉伏見城を築く。 明使來る。 朝鮮の再征(慶長の役)。 秀吉薨す。朝鮮戰役終る。	信長による統一時代 尊皇 足利氏滅ぶ		(明)朝鮮 (ポルトガル) (イスパニヤ)
桃山	(一七)後陽成	慶長元	二二五八				朝鮮征伐
文祿		元	二二五二				朝鮮征伐
慶長		元	二二五八				朝鮮征伐

柴田勝家の妻

信長の妹で  
勝家と共に  
自害した



はれた大改革は信長に始まり、秀吉によつて完成された。さればこの時代には國民の進取・豪壯の氣風が強くあらはれ、各方面にわたつて積極的に活動が行はれたが、殊に海外發展に著しいものがあつた。皇威も舊に復し、大事は何れも天皇に奏して行はれたが、この時代は僅かに三十餘年で終つた。

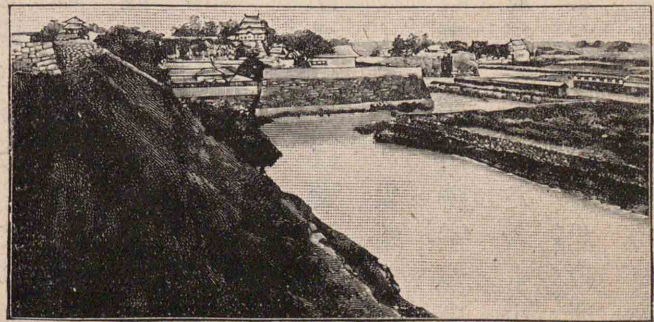
また戦亂の世の中では女子も平和な家庭をはなれて夫と生死を共にし、武田勝頼の妻や、柴田勝家の妻の如く、壯烈な最後を遂げた者も少くなかつた。また秀吉の妻北政所キタマサノや山内一豊の妻等も貞節内助の譽が高かつた。

# 第八篇 江戸時代

## 第一章 幕政の確立

### 一 封建制度の完成

江戸幕府 秀吉の薨後、子秀頼が幼いため、徳川家康が伏見城に於て政治をとつた。家康は廣大な關東を領して實力・名望共に諸大名を壓してゐたので、實權が次第にその手にうつつた。石田三成は毛利輝元等の同志と共に之を除かうとして、慶長五年關ヶ原に戦つたが、



江戸城

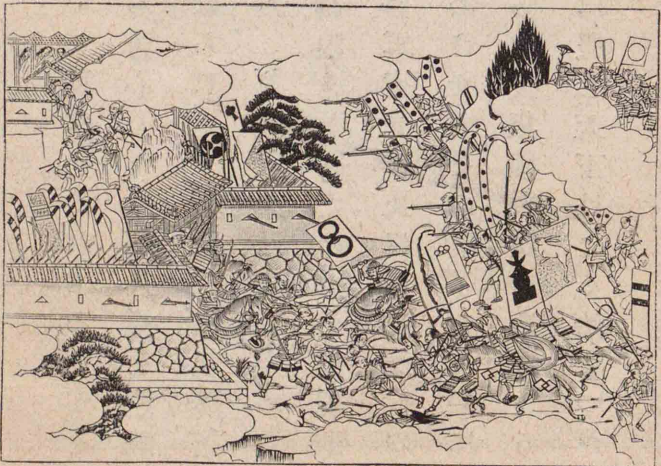
徳川家康

關ヶ原戦



一敗地にまみれてより、家康は全く天下の實權を握るに至つた。ついで家康は征夷大將軍に任ぜられて江戸に幕府をひらき、元和元年大阪夏の陣に豊臣氏を滅ぼして徳川氏の基礎を固め、二代秀忠・三代家光に至る間に幕府の組織制度が完成した。今日の東京市の殷盛のもとには實にこの時に始まつたのである。

幕府の組織 幕府の職制は、大老・老中・若年寄の三役が中心となり、その下に寺社奉行・勘定奉行・町奉行の三奉行を置いて、寺社の政務・幕府の財政及び江戸の市政を掌らしめた。地方の要地は之を幕府の直



豊臣氏滅ぶ  
大阪夏の陣

中央

地方

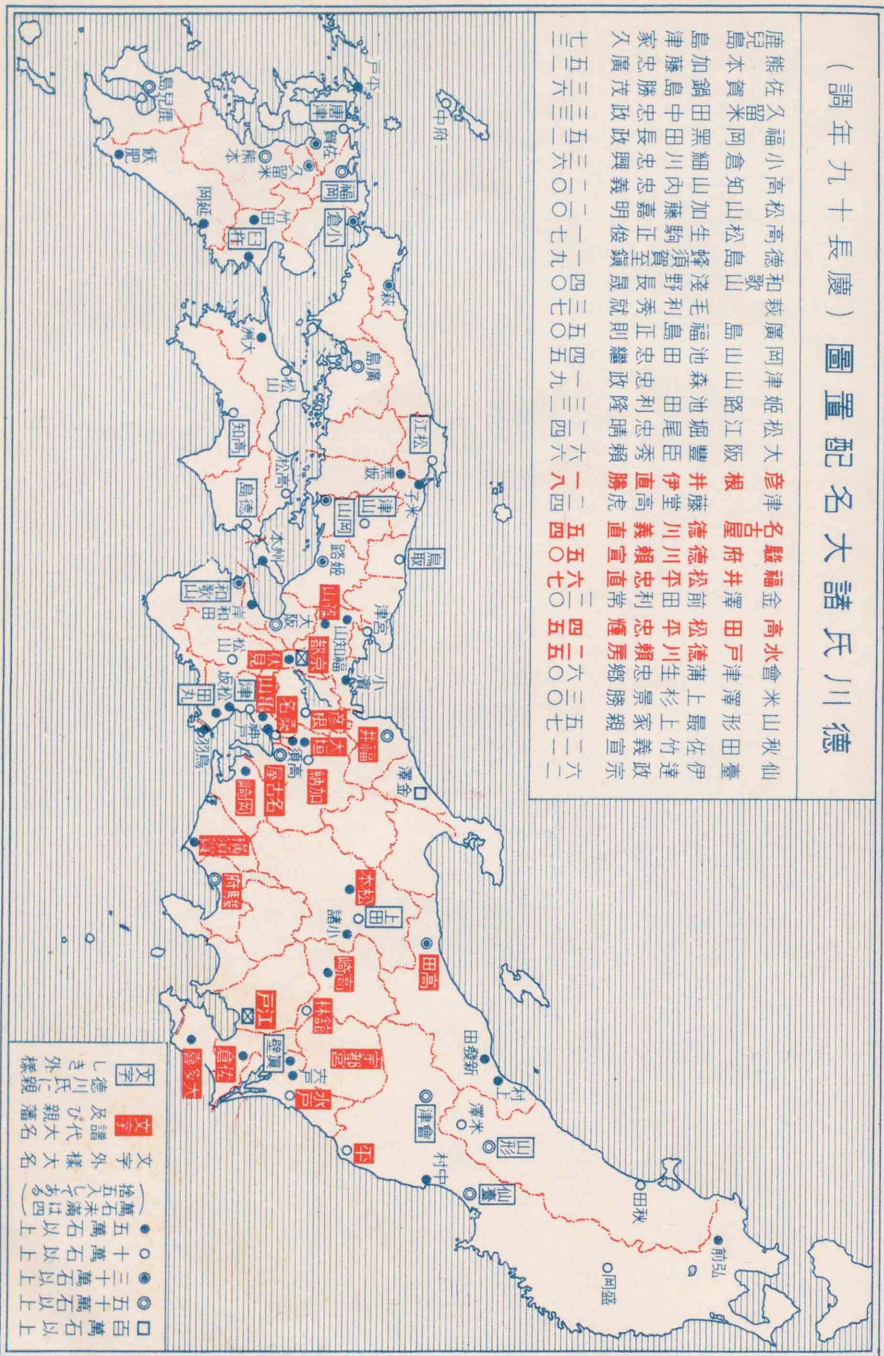
轄とし、郡代・代官を置いたが、特に重要な所には、所司代(京都)・城代(大阪・駿府)・奉行(山田・長崎・佐渡等)を置き、其の他は大名の領地として自由に治めしめ、封建制度をとつた。

**大名統制** 諸大名は親藩・譜代・外様の三種にわかれてゐたが、それ等の統整・配置については幕府が最も苦心した所で、外様を遠隔の地に配して幕府の要職にはたづさはらしめず、要所毎に親藩・譜代及び直轄地を置いて互に牽制させた。又、武家諸法度を定めて諸大名を束縛し、築城・婚姻等に嚴重な制限を加へたので、この規則に觸れて滅んだ家も少くなかつた。將軍家光は更に參勤交代の制を立て、大名を隔年毎に江戸につめさせ、且その妻子を江戸に置かしめる等、封建制度を採用しながら中央集権の實をあげようと努力したので、諸大名は幕府の威令に服し、天下はよく治まつた。

武家諸法度

參勤交代

(調年九十長慶) 圖置配名大諸氏川徳



二 外交と鎖國

朝鮮

**朝鮮支那との交通** 家康は諸外國との修好につとめたので、秀吉以來交通の絶えてゐた朝鮮が入貢し、將軍の代がはりには慶賀の使を我に送つた。明との國交は遂に恢復しなかつたが、彼の商人は常に長崎に来て貿易をなし、清の時代になつてもその關係がつゞいた。尙この間に明の遺臣が我が國の助力を得て恢復をはからうと企てる者もあり、また朱舜水シユンシュヰ、隱元インゲンなどが來朝して學問佛敎に大きな影響をあたへた。

明の遺臣

オランダ獨占

**オランダイギリスの來航** ポルトガル、イスパニヤについてオランダ人ヤン・ヨーステン、イギリス人ウィリヤム・アダムスが來り、家康は之を遇して海外の知識を得、或は外交上の顧問とし、又貿易を許した。然し後に通商上の競争でイギリス人が敗れ、オランダ人が貿易を獨占した。

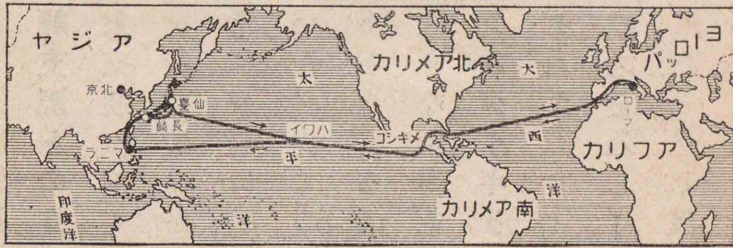
末吉船

朱印船

日本人町  
山田長政  
支倉常長

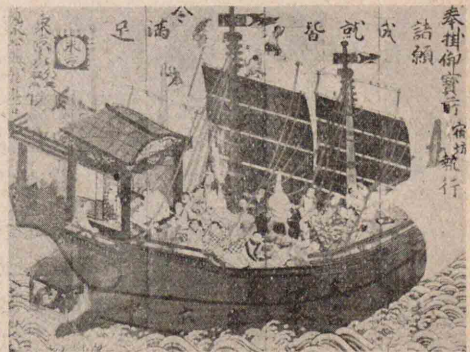
濱田彌兵衛

支倉常長航行路



國民の海外發展

かくて秀吉以來の海外發展の氣運は益興り、諸大名商人等の貿易船は幕府より許可の朱印狀をうけて、マカオ・アンナン・シヤム・ルソン等にまで乗出し、日本人町も各地に發達し、山田長政は日本人を率ゐてシヤムに活躍し、支倉常長の如きは伊達政宗の命により、太平・大西の兩洋をよこぎつてローマに使い、長崎の濱田彌兵衛は豪膽無類、臺灣にゐるオランダ人の横暴を懲



家光の禁教

島原亂

踏繪

宗門改

して日本人の意氣を示した。

キリスト教の禁止と鎖國 家康は秀吉の方針をついでキリス

ト教を禁じたが、貿易を盛にしたので、殆んどその効がなかつた。

家光は禁教の實をあげんとし、貿易をも犠牲にして邦人の海外渡

航を禁じ、或は信者を極刑に處するなど嚴重に取締つた。九州の

天草・島原地方には殊に信徒が多く、幕府の壓迫を憤つて亂を起し、

原城に據つたが、その勢強く、幕軍は惡戰苦闘

をかさね、翌年やうやく平定することを得た。

これよりキリスト教の取締りはいよゝ厳

重となり、全國戸毎に所屬の寺院を定め、宗門

帳を作つて一定時に宗門改を行つた。また西洋人を放逐し、布教

と關係のないオランダ人のみ貿易を許したが、これを出島にう

つして嚴重に取締つた。



鎖國の影響

かくて戦国時代以降社會に漲つてゐた海外發展の氣勢は挫け、印度・南洋の各地に出現した日本人町も忽ち衰滅し、我が開拓の地も歐人の手に歸し、國民は國內三百年の泰平に安逸の夢をむさぼつた。また貿易はオランダ支那に限られて振はず、洋書の輸入の禁と共に海外の進んだ文化を受け入れることも少く、世界の大勢に後れたが、然し國內の秩序はよく維持され、多年培はれた國民文化は益、隆盛を極めて廣く上下に普及するに至つた。

第二章 文化の興隆(元祿の前後)

上方文化

文化の進歩 幕府中心に封建の制度は完成され、世の中も全く泰平になつたので、こゝに學問を始め、美術・工藝・産業・交通等各方面に著しい發達をとげ、所謂元祿時代の文化をつくつたが、その中心地はまだ京都・大阪の上方地方であつた。

古書出版

學問教育の復興 家康は學問を好み、藤原惺窩やその門人林羅山などを重用し、また古書の保存出版などをはかり、京都に於ては後陽成天皇が御心を學問にとゞめられ、有用の書を印刷せしめ給うたので、戦国時代以來衰微の極にあつた學問教育は次第に興隆にむかつた。

漢學(儒學)

五代將軍綱吉は深く學問を好み、聖堂を湯島に建て、孔子を祭り、また林信篤を大學頭として學生の教育にあたらしめ、自らも屢之に臨んで書を講じた程であつたから、全國の諸藩は之にならつて藩校を起し、民間の儒者は私塾を開いて子弟の教育にあつた。聖堂の教育所は後の昌平

中江藤樹



坂學問所である。かくて元祿時代を中心として多くの儒者が輩出し、幕府に仕へた林家の外に中江藤樹・熊澤蕃山(了介)・山崎闇齋・木下順庵・新



井白石・伊藤仁齋及び東涯・荻生徂徠など、何れも學問に優れて名聲があり、儒學はむしろ我が國に於て隆盛となつた。これ等の學者の中には諸藩に仕へて治政上の顧問となつた者も少くなく、新井白石は幕府に仕へて外交・財政の上に大いなる功績があつた。

國文學も僧契沖ケイチノブが古學を研究して國學を興したが、また平民文學が盛になり、小説に井原西鶴サイカク俳諧に松尾芭蕉・戯曲に近松門左衛門が出るなど、世の泰平につれて一般民間にもてはやされ、元祿時代の氣風を最もよく特徴づけた。



近松門左衛門

**美術・工藝** かく世の中は泰平と共に華美になり、美術・工藝の發達が著しかつた。繪畫では狩野派に狩野探幽タンウ・土佐派に土佐光起ミツキが出てその派を中興し、世に重んぜられたが、之に對して平民の好みに應じ、當時の風俗を寫した浮世繪ウキエが盛になり、菱川師宣シノノブの名手

繪畫

國文學

が出た。また尾形光琳ミナモトは裝飾畫にその偉才を發揮し、英一蝶ヒコイチテフも一派をなして世に知られた。

**産業の發達** 家康は信長・秀吉の豪放な性質と異り、力めて節約・勤儉を奨めたが、また産業の開發に意を注いで國富の増加をはかり、西洋諸國との通商、佐渡・石見などの鑛山發掘によつて、幕府の藏は豊になり、財政的基礎が確立した。また農業の發達も著しく、元祿頃から地方に新田の開墾、灌漑水路の施設が盛に行はれ、農事の改良は進み、宮崎安貞ヤスサダは自ら諸國を廻つて栽培法の研究をなし、我が國最初の農業書を著はした。

**交通の進歩** 參勤交代の制は産業の發達と共に交通の進歩を促し、江戸を中心に奥州街道・中仙道・甲州街道・東海道等の主要道路が開かれ、各道路には宿驛が發達し、通信機關として商用の飛脚ヒキヤクが江戸・京都・大阪の間より、次第に東北方面へさへ及ぶに至つた。水

鑛業

農業

道路

水運

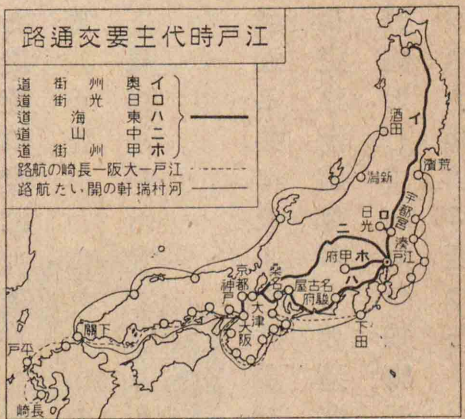
運も元祿の頃から盛になり、角倉了以は保津川・富士川等を改修して舟航を開き、海上では瀬戸内海と大阪・江戸間とが最も頻繁で、奥羽の海路は河村瑞軒によつて太平洋及び日本海廻りはじめられた。

商業

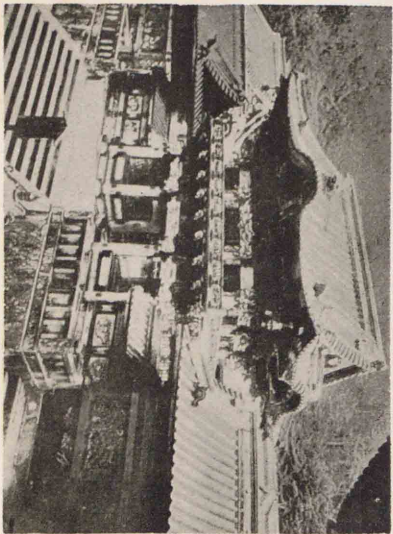
かくて商業は盛になり、江戸・大阪を始めとし、各城下町や港市が中心地となつて榮え、町人の金力が社會上重んぜられるに至つた。

文治主義

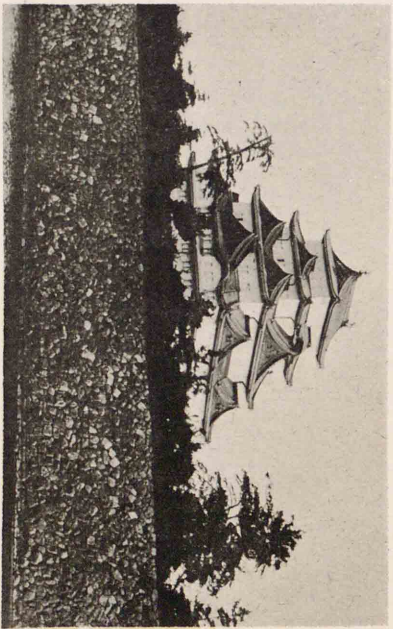
元祿の世相 江戸幕府は家光頃までは制度を整へ、文武の道を奨励し、風俗の肅正に意を用ひ、殊に綱吉は學問を中心に政治を勵んだので文化は益、開けた。然るにその後、政治に倦み、生類憐の惡令を出し、諸政を寵臣にまかせて遊樂に耽つたので政治が弛み、財



日光陽明門

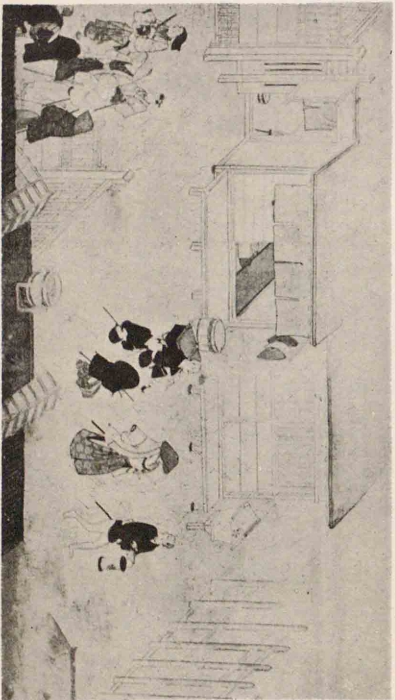


名古屋城



(筆齋北師葛)

裏漣沖川奈神



(筆宣師川蓬)

巻繪俗風

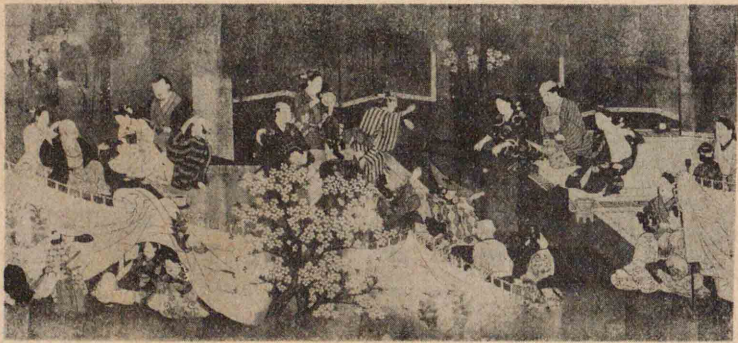
新井白石

元祿風俗



政を救ふため、貨幣を改鑄して悪質のものを發行した。また世は泰平に慣れてやうやく遊惰に流れ、奢侈の風が盛て、服装も華美となり、男子も紅の肌着をつけ、女子は振袖や幅廣の帯で美を競ふ所謂、元祿風を生じた。

**白石の改革** 將軍家宣は新井白石を用ひて外交・財政の改革、悪貨改鑄を行ひ、金・銀の流出を防いだが、一般になほ前代の風をうけて剛健の士風は輕視された。



### 第三章 幕府の中興

社會改革

吉宗の改革 吉宗は奢侈文弱の世風を改めんとし、學問の奨励と共に勤儉尙武の士風を養ひ、刑法を定め、江戸の市街を整へ、實用を重んじ、産業の開發につとめ、所謂享保の治と稱せられる幕府中興の業をなした。

#### 産業の發達

殖産興業の奨励によつて甘蔗、棉の栽培を始め、各種産物の製産著しく、また地方の各藩にも熊本、細川重賢、米澤の上杉治憲等のやうな名藩主が出て勤儉殖産につとめたので、兩毛地方の織物、信濃の生絲、甲斐の葡萄、瀬戸内海沿岸の食鹽、讃岐の砂糖、紀伊の蜜柑、阿波の藍等、地方獨特の産業が盛に興つた。

物産

徳川吉宗



洋書輸入  
杉田玄白  
蘭學の研究

實學

#### 洋學及び實用の學 西洋の學術は鎖國

以來殆んど傳はらなかつたが、吉宗はキリスト教と關係のない書物の輸入を許し、青木昆陽を長崎に遣はしてオランダ語を學ばしめた。かくてその門人前野良澤は杉田玄白等と苦心の結果、解體新書を譯し、大槻玄澤はオランダ語の文法書を著すなど、醫學者によつて蘭學の研究が行はれ、理學、砲學、兵學なども傳はり、漸く世界の大勢が明かになつてきた。

また元祿の頃、天文學、曆學に通じた澁川春海や數學者の關孝和等が出たが、これ等實用の學は吉宗の奨励によつて一層發達し、測量學に長じた伊能忠敬、農學、經濟の指導者として佐藤信淵、二宮尊徳等が出て、世を益するところが大であつた。

寛政の治 將軍家治の時、田沼意次が權を専らにし、且天災がつ



松平定信  
寛政異學の禁



づいたので人民の困窮が甚しかつた。家齊將軍となるや、松平定信は老中として弊政を改め、風俗の矯正につとめ、また當時の漢學者が互に異説を唱へて争つてゐたので、朱子學を正學とし、異學の禁令を出して教學の根本方針を定めた。

### 第四章 幕府の衰亡

#### 一 文化の爛熟と社會の頹廢

江戸文化  
文化の爛熟

文化文政時代 定信の隱退後、家齊は四十年にわたつて政治をとり、世は泰平で江戸の繁昌はその極に達し、上方の文化は多く江戸に移つて榮え、表面は江戸時代の全盛期であつた。當時の士民は多く文藝を弄び、歌舞演藝に耽つたので、小説・狂歌

文學

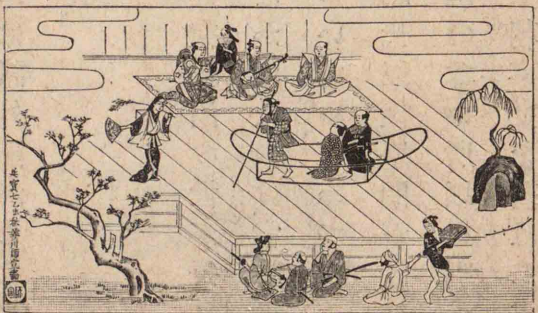
歌舞伎圖  
繪畫

社會の腐敗

川柳等が發達し、小説家では南總里見八犬傳の作者瀧澤馬琴を始め、山東京傳等が知られ、狂歌では太田南畝が出て、奇想を以て世人を驚かし、俳諧では天明の頃、與謝蕪村が出た。繪畫もまたこの世風をうけて浮世繪が盛で、葛飾北齋が殊に知られたが、寫生畫に妙を得た圓山應舉や南宗畫の谷文晁もそれぞれ一派をなした。

かゝる表面の華々しさは裏面に頹廢的氣

分をもち、上下只奢侈安逸に流れ、士風崩れ、武士も商人より借財してその日を送り、社會の最下に置かれた町人の實力が益々大となつた。然るにうち續く天保の凶作があり、下民の困窮言語に絶したが、財政難の幕府は救済に策なく、之を憤つた大鹽平八郎が亂を起



すなど、不隠の雲が全國にみなぎり、幕府衰亡の兆があらはれた。  
**天保の改革** 家慶將軍となるや、老中水野忠邦は政治の振作を  
 はかり、奢侈を禁じ、風俗の矯正を行つたが、時弊を改めることが出  
 来ず、且その手段が急激であつたので上下の不評を招き、つひに職  
 を退いた。然るに内には尊皇論が勃興し、外には諸外國がしきり  
 に近海に迫り、幕府の立場を益、困窮ならしめた。

二 尊皇思想の勃興



徳川光圀  
漢學者と尊皇思想

**學問と尊皇思想** 建武中興が中道に破れ、武家政治の世が長く  
 つゞいたのを人々が怪しまなかつたのは、當時の  
 國民に學問がなく、大義にくらいたためであつた。  
 然るに世が泰平となり、元祿時代以後學問が隆盛  
 になると、漢學者の中に我が國の尊い所以を唱へ  
 て神道を説いた山崎闇齋や、中朝事實を著はして

大日本史

國學者と尊皇思想

塙保己一

公家法度

國體の精華を示した山鹿素行のやうな人も出た。また將軍家綱  
 の時、水戸の徳川光圀は多くの學者をあつめて大日本史編修の業  
 をおこし、大義名分を明かにしたので、皇室を尊崇する水戸の學風  
 が起り、幕末には徳川齊昭、藤田東湖を生んだ。また契沖以來の古語、  
 古典の研究は吉宗の頃、その繼承者である荷田春滿、ついで賀茂真淵、  
 本居宣長、平田篤胤等が輩出して、益、國學を研究し、盲人ながら  
 も塙保己一は古典集成の大事業を行ひ、江戸の和學講談所で國學を教へる  
 など、我が古道は益、明かになつてきた。



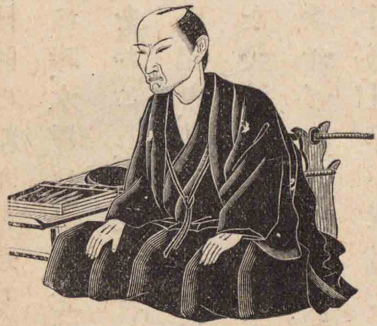
**皇室と幕府** 江戸幕府は皇室に對して皇居の修築、御料の獻上  
 などを始め、いろ／＼忠勤を勵んでゐたが、政治の實權を保持する  
 ために公家法度を定め、京都に所司代を置き、大小となく皇室の御  
 事に關係し、公卿を抑へてゐた。このために後水尾天皇の御讓位

尊號事件

があり、また光格天皇は御父典仁親王に太上天皇の尊號を奉らうとなされ、幕府の反対で御中止のやむなきに至るなど、幕府の態度に對してやうやく世の非難が高まつてきた。

尊皇運動

**尊皇論** かくて我が國體が次第に理解されるに至ると、幕府政治の世の中に不満を感じ、天皇親政の御代を理想として朝威の回復をはかるものが出てきた。この運動は吉宗以後にあらはれ、



頼山陽

山陵志

齋の學をついだ竹内式部は公卿の間に大義を説いて京を追はれ、ついでその同志山縣大貳は江戸にて刑せられたが、社會に漲りはじめた尊皇思想を抑へることは困難で、家齊のときに高山彦九郎は皇威の衰微を歎いて諸國を説きまはり、蒲生君平は荒れはてた皇陵をたづね、山陵志をあらはして世に警告し、頼

日本政記執筆間

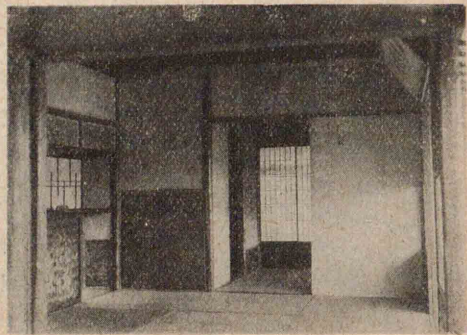
京都市にある。

山陽は憂國の筆を振ふこと廿餘年、日本外史、日本政記を著し、その明快なる文章によつて大義名分をとき、大いに人心を鼓舞した。かゝる尊皇家の事績はやがて王政復古に導く大きな力となつたのである。

三 對外關係

ロシア人の來航

我が國が鎖國を續けてゐる間に、西洋諸國は競



海國兵談

伊能忠敬



つて東洋に勢力を得ようとしてゐた。寛政の頃、林子平は海國兵談を著して海防の急を論じたが、却つて世を騒がすものとして罪せられた。然るに子平の先見に違はず、ロシア人が北海道に來航したので、幕府は急に北

文政の撃攘令  
洋學者の活動

邊の警備を嚴にし、近藤重藏・間宮林藏に命じて北海道・樺太を探檢させ、伊能忠敬をして實測地圖をつくらせ、松前奉行を北海道に置くなど防備につとめ、文政年間には外國船撃攘の令を出した。

洋學の活用 かくて國防は益、嚴に



なり、西洋の兵學を究めた高島秋帆や江川坦庵に軍事の改革を行はしめ、坦庵は葦山に反射爐を築いて大砲を鑄造し、徳川齊昭や島津齊彬も亦西洋の

ペリー來航

文物を研究し、兵器をつくつて海防に備へた。また蘭書を通して洋學は益發達し、西洋の事情に通じた者も少くなく、渡邊崋山等は時勢を考へて外國船撃攘に反對したが、幕府のために捕へられた。  
和親及び通商條約 幕府もまた四圍の事情を察して撃攘の令をゆるめたが、嘉永六年、アメリカ合衆國の使者ペリーが浦賀に來

江川坦庵

和親條約  
浦賀來航

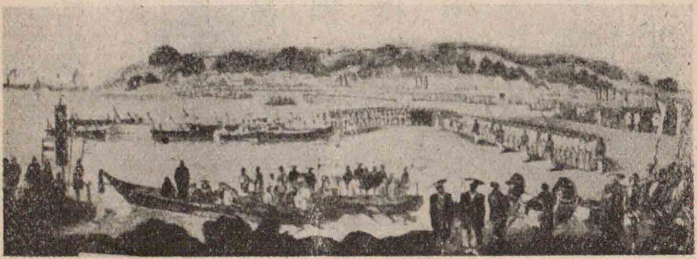
航し、ついでロシヤの使者も長崎にきて共に開國を求めた。幕府は處置に窮して遂に朝廷に奏請し奉り、翌安政元年やむなく、下田・函館の二港を開き、米・露・英・蘭と和親條約を結んだ。然しなほ幕府は通商を許さなかつたので、アメリカ合衆國の總領事ハリスは列國の情勢を説いて通商を求め、幕府はまた處置に窮したが、遂に大老井伊直弼は事態の切迫せるを見て國家の安危を一身にひきう

安政假條約

ペリー



け、勅許を経ないで通商條約に調印し、ついで蘭・露・英・佛の諸國とも同様の條約を結んだ。之を安政の假條約と





いひ、永年にわたつた幕府の鎖國政策もこゝに破れ、内外人の貿易が行はれ、世界の諸國と國交を開くに至つた。

安政の大獄

直弼が勅許を経ずして假條約を結んだ事は志士の憤慨を招き、且將軍繼嗣の問題に直弼は衆望を斥けたので、世論いよゝゝ沸騰した。こゝに於て直弼は異論を制し幕威の發揚をはからんとして、反對者をことごとく處罰した。このために天下の人心益々激し、遂に櫻田門外に要撃せられて倒れ、幕府の威光は全く地に墜ちた。



井伊直弼

櫻田門外の變

第五章 大政奉還

幕威墜つ

幕威の失墜 世の泰平に武士の實力が衰へ、國內に於ける尊皇攘夷の論は諸外國の開國要求と共に幕府の立場を益々困難にし、且井伊直弼の横死によつてその中心人物を失ひ、幕府は政權を維持する力なく、やがては大政を奉還しなければならぬ運命となつた。

公武合體 この難局をきりぬける策として老中安藤信正は公武合體を唱へて尊皇攘夷論を鎮めんとし、將軍家茂のために、孝明天皇の御妹和宮親子内親王の御降嫁を仰いだ。宮は關東に赴くよりは剃髪しようとの御希望であつたが、遂に國內が圓滑に治まる爲ならばと雄々しい御決心のもとに僅か十六歳にして江戸にお下りになつた。

坂下門外の變

おしまじな君と國との爲なれば 身は武藏野の露と消ゆとも

しかし信正は却つて志士の反感をうけ、坂下門外で傷つけられた。こゝに幕府の威信は一層墜ち、京都では討幕を唱へる者もあり、世の中は益々騒がしくなつてきた。この時薩摩の島津久光は公武合體によつて國論の統一をはからうとし、勅使を奉じて江戸に下り、幕政の改革に大いに盡力した。

攘夷決行

攘夷 當時京都に於ては長州藩士を中心に攘夷論が勢を占め、三條實美等の公卿も之を唱へ、遂に勅使が東下して幕府に攘夷の決行を命ぜられることになつた。幕府も遂に勅命を拜して決行の日を定めたので、期日に至り、長州藩は下關海峡を通過する外國船の砲撃を行つた。これより攘夷の氣勢大いになり、攘夷親征の議さへ起つたが、かゝる時勢を



三條實美

朝議一變

憂へた松平容保は朝臣中の溫和派と共に之に反對し、その中止を奏上したので、朝議は一變し、長州藩は宮門守護の任をとかれ、三條實美等攘夷派の公卿も都を逐はれた。

蛤御門の變

第一回長州征伐

下關攻撃

第二回長州征伐

長州征伐 時に長州藩士はその罪を赦されんことを請うて上京し、蛤御門の附近で會津薩摩桑名の兵と戦つて敗退した。こゝに於て幕府は直ちに長州征伐の軍をおこしたが、その時、下關は英・米・佛・蘭の四國聯合艦隊に攻撃されたので、長州藩は之と和し、ついで幕府に罪を謝して事がおさまつた。然るに長州藩内では高杉晋作等の主戦派が藩論をくつがへして兵をあげたので、再び長州征伐となつたが、諸大名の中には幕命に従はないものがあり、その威令が行はれなかつたため、幕軍は利を失ひ、且將軍家茂も大阪に病死し、間もなく孝明天皇崩御あらせられたので、明治天皇は勅して征長の軍を解かしめられた。

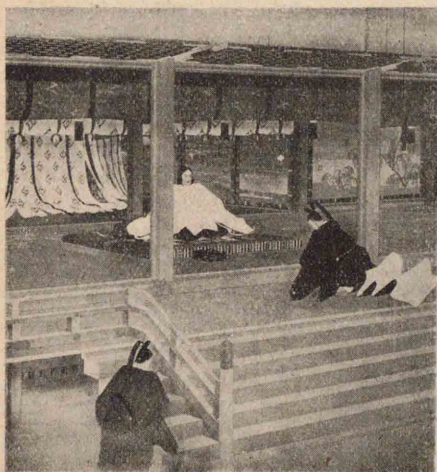
明治天皇

討幕の企

大政奉還 長州征伐の失敗は幕府の無力をあらはし、もはや國政をとる實權を失つたので、比較的穩和論であつた薩摩藩も長州藩と聯合して討幕の計畫をすゝめるに至り、國內に大事變が起る憂が多かつた。土佐の前藩主山内豊信はこの情勢を憂ひ、その臣後藤象二郎をつかはし、平和に解決せんとして將軍慶喜に説いた。慶喜はよく時勢を察し、もはや幕府の存在は不可能であると考へ

大政奉還

明治天皇御踐  
祚



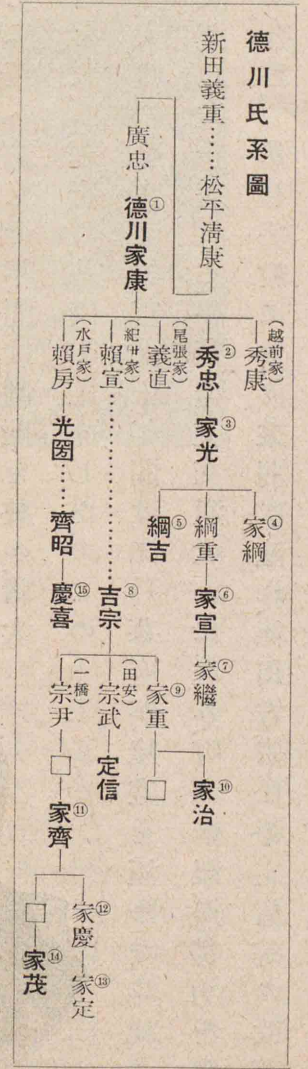
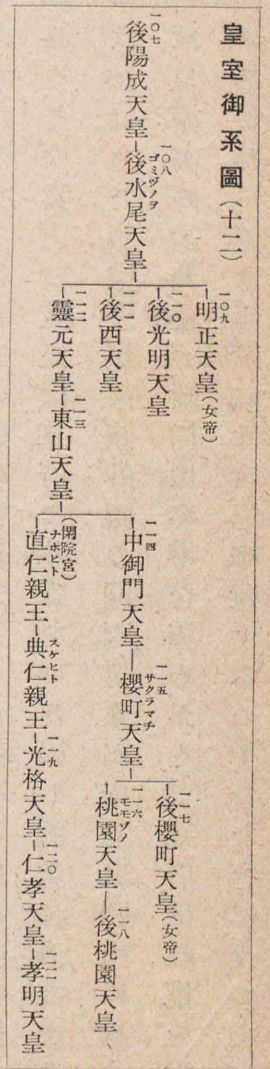
て、謹んで大政の奉還を請ひ、勅許を得た。こゝに於て江戸幕府は家康以來二百六十五年で倒れ、永い間の武家政治が終を告げ、神勅の御精神により天皇御親しく萬機をみそなはせ給ふ世となつた。

江戸時代の概括

徳川慶喜

關ヶ原の戦後約二百七十年の間江戸に於て徳川氏が政治をとつたので江戸時代又は徳川時代といふ。家康より家光に至る約五十年間は制度を整へ、諸大名を服し、幕府の基礎が確立した。この後、家齊の頃まで約百九十年間は江戸幕府が隆盛を極めた時代で、文運の進歩著しく、學藝、産業、交通大いに進み、町人階級が勢力を得てきた。然し一般に奢侈柔弱に流れ、徳川吉宗・松平定信等の改革もあつたが、次第に幕府の財政は窮乏し、また武士の經濟上の困窮甚しく、その實力の減退は幕府の基礎をゆるがし、次第に衰兆をあらはしてきた。家齊以來、諸外國の開國要求が強くなり、又國內に起つた尊皇攘夷の論が盛んで、政局は多事を極め、かくて幕府は政權を維持することができず、遂に大政を奉還するのやむなきに至つた。





代時亡表		學問發	
(一三)明	治	元西	(一三)後
明治	元	延寶	(一三)靈
二二五二八	二二五二七	延寶	(一三)東
二二五二九	二二五二六	貞享	山
	二二五二五	元祿	元
	二二五二四	三	明曆
	二二五二三	四	三
	二二五二二	五	二
	二二五二一	六	一
	二二五二〇	七	〇
	二二五一九	八	〇
	二二五一八	九	〇
	二二五一七	一〇	〇
	二二五一六	一一	〇
	二二五一五	一二	〇
	二二五一四	一三	〇
	二二五一三	一四	〇
	二二五一二	一五	〇
	二二五一一	一六	〇
	二二五一一	一七	〇
	二二五一一	一八	〇
	二二五一一	一九	〇
	二二五一一	二〇	〇
	二二五一一	二一	〇
	二二五一一	二二	〇
	二二五一一	二三	〇
	二二五一一	二四	〇
	二二五一一	二五	〇
	二二五一一	二六	〇
	二二五一一	二七	〇
	二二五一一	二八	〇
	二二五一一	二九	〇
	二二五一一	三〇	〇
	二二五一一	三一	〇
	二二五一一	三二	〇
	二二五一一	三三	〇
	二二五一一	三四	〇
	二二五一一	三五	〇
	二二五一一	三六	〇
	二二五一一	三七	〇
	二二五一一	三八	〇
	二二五一一	三九	〇
	二二五一一	四〇	〇
	二二五一一	四一	〇
	二二五一一	四二	〇
	二二五一一	四三	〇
	二二五一一	四四	〇
	二二五一一	四五	〇
	二二五一一	四六	〇
	二二五一一	四七	〇
	二二五一一	四八	〇
	二二五一一	四九	〇
	二二五一一	五〇	〇
	二二五一一	五一	〇
	二二五一一	五二	〇
	二二五一一	五三	〇
	二二五一一	五四	〇
	二二五一一	五五	〇
	二二五一一	五六	〇
	二二五一一	五七	〇
	二二五一一	五八	〇
	二二五一一	五九	〇
	二二五一一	六〇	〇
	二二五一一	六一	〇
	二二五一一	六二	〇
	二二五一一	六三	〇
	二二五一一	六四	〇
	二二五一一	六五	〇
	二二五一一	六六	〇
	二二五一一	六七	〇
	二二五一一	六八	〇
	二二五一一	六九	〇
	二二五一一	七〇	〇
	二二五一一	七一	〇
	二二五一一	七二	〇
	二二五一一	七三	〇
	二二五一一	七四	〇
	二二五一一	七五	〇
	二二五一一	七六	〇
	二二五一一	七七	〇
	二二五一一	七八	〇
	二二五一一	七九	〇
	二二五一一	八〇	〇
	二二五一一	八一	〇
	二二五一一	八二	〇
	二二五一一	八三	〇
	二二五一一	八四	〇
	二二五一一	八五	〇
	二二五一一	八六	〇
	二二五一一	八七	〇
	二二五一一	八八	〇
	二二五一一	八九	〇
	二二五一一	九〇	〇
	二二五一一	九一	〇
	二二五一一	九二	〇
	二二五一一	九三	〇
	二二五一一	九四	〇
	二二五一一	九五	〇
	二二五一一	九六	〇
	二二五一一	九七	〇
	二二五一一	九八	〇
	二二五一一	九九	〇
	二二五一一	一〇〇	〇

徳川家康の御代に於ける諸事を知るに、  
 狩野探幽歿す。  
 徳川綱吉將軍となる。  
 生類憐みの令を發す(後屢、之を重ぬ)。  
 聖堂を湯島に移す。  
 徳川光圀淺川に碑を建つ。  
 米使ハリス下田に來る。  
 老中堀田正睦上京。井伊直弼大老となる。假條約の調印。家定薨す。安政の獄起る。家茂將軍となる。安橋本左内・吉田寅次郎等刑せらる。櫻田門の變。  
 和宮の降嫁。  
 坂下門の變。島津久光入京す。勅使大原重徳の東下。生麥の變。勅使三條實美の東下。  
 將軍家茂入京。長藩の外國船艦砲撃。薩藩の英艦擊退。七朝臣長門に走る。蛤御門の變。長州征伐。佛・米・蘭・英四國の聯合艦隊下關を砲撃す。毛利敬親の謝罪。  
 長州再征。安政假條約の勅許。家茂薨じ、慶喜將軍となる。  
 明治天皇踐祚。兵庫開港の勅許。慶喜の大政奉還。王政復古の大號令を發す。  
 鳥羽・伏見の戰。上野戰爭。奥羽戰爭。維新の戰亂終る。

文政の發達  
 元祿時代  
 安政假條約  
 尊皇攘夷  
 亡衰の府幕  
 清國人及びオランダ人のみ來航  
 米・露・蘭・英  
 通商條約  
 米・露・蘭・英・佛  
 外國船砲撃  
 下關砲撃

第八年表 江戸時代年表

時代	天皇	年號	紀元	重要事項	概	要	對外關係
(一〇七)後陽成	慶長	五八	二二六〇	關ヶ原の戰。 徳川家康將軍に任せらる。 朝鮮との交通再び開く。 島津家久琉球を征服す。和蘭人に貿易を許す。	江戸幕府(武家政治)	立確の礎基府幕	ポルトガル イスパニヤ 西洋諸國 オランダ
(一〇八)後水尾	正寛永	七〇	二二七〇	天主教の禁を嚴にす。 英人に貿易を許す。支倉常長羅馬に使す。 大阪冬の陣。豊臣氏亡ぶ。公家法度・武家諸法度を頒つ。 家康薨す。 日光東照宮落成す。 家光將軍となる。 洋書の輸入を禁す。 再び天主教禁令を發す。 參觀交代の制を定む。 海外渡航を禁す。 島原の亂。 島原の亂終る。天主教の禁を嚴にす。 西洋諸國(和蘭を除く)との貿易を禁じ、その國人の來朝を禁す。	徳川氏の統一 制度確立	幕府の確立	イギリス
(一一〇)後光明	明曆	三三	二二七一	徳川光圀(大日本史の編纂を始む。 狩野探幽歿す。 徳川綱吉將軍となる。 生類憐みの令を發す(後屢、之を重ぬ)。 聖堂を湯島に移す。 徳川光圀(海防)に碑を建つ。 貨幣の改鑄。 光圀薨す。 赤穂義士の復仇。 徳川家宣將軍となり、新井白石を任用す。 貨幣改鑄。 貨幣改鑄。徳川家繼將軍となる。 徳川吉宗將軍となる。 洋書の禁をゆるむ。 足高の制を定む。	鎖國	盛隆の間學	鎖國 明滅ぶ 清國人及びオランダ人のみ來航
(一二三)東山	貞享	四四	二二四七				
(一二三)靈元	延寶	八二	二二三四				
(一二三)後西明	明曆	三三	二二七一				
(二四)中御門	寶永	六六	二二六九		白石の改革		
(二五)櫻町	享保	三七	二二七〇		吉宗の中興		
(二六)桃園	寶曆	九〇	二四一九				
(二七)後櫻町	明和	四〇	二四二〇				
(二八)後桃園	安永	七元	二四三二		尊皇運動起る		

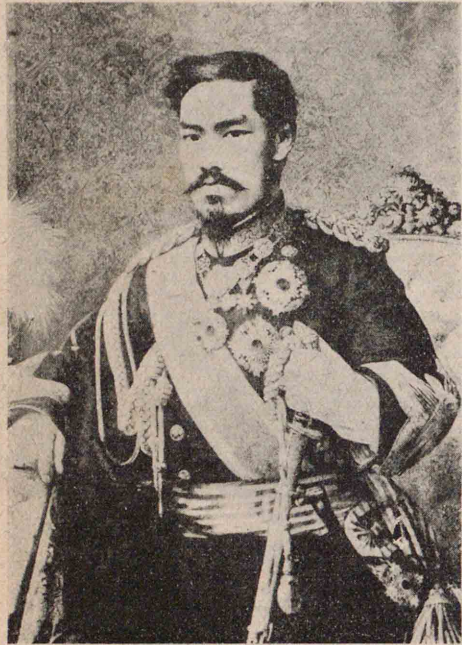
太字は小學國史年表にあるもの

(朝鮮)



明治大帝

萬機御親裁



第九篇 明治維新と明治時代

第一章 明治維新

明治維新

朝廷は慶喜の大政奉還を御許しになり、直ちに王政

復古の大號令を發せられ、

神武天皇創業の御精神に

かへり、萬機を天皇が御親

裁あらせられる旨を御告

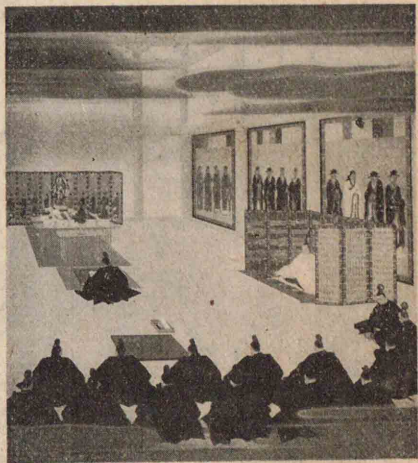
げになつた。

五箇條の御誓文 明治

元年三月、天皇紫宸殿に臨

ませ給ひ、御親ら天地の神

五箇條の御誓文の煥發



々をまつゝて新政の大方針を御誓ひになつた。

一 廣ク會議ヲ興シ、萬機公論ニ決スヘシ。

一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ。

一 官武一途庶民ニ至ル迄各

西郷隆盛

々其志ヲ遂ケ、人心ヲシテ僂マサラシメンコトヲ要ス。

一 舊來ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基クヘシ。

一 智識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スヘシ



勝安芳

この御誓文は過去の封建世襲の制度を改めて、人材を用ひ、輿論を尊重し、上下一致して先進國の文明をうけ入れ、以て皇運の發展を圖らうとする御方針を御示しになつたもので、畏くも天皇御親ら衆の模範にならうと仰せ給うた。



鳥羽伏見の戦  
彰義隊

**舊幕臣の不平** しかるに大政奉還の後、薩長二藩の態度に不満を抱く舊幕臣は慶喜を擁して大阪より入京せんとしたが、官軍のために鳥羽伏見に破られ、慶喜は海路江戸へ逃れた。ついで朝廷は諸藩の兵を出して江戸を攻めしめられたので、慶喜は深くつゝしみ、勝安芳をして罪を謝せしめ、江戸城を明け渡して水戸に退いた。然しなほ之を喜ばない舊幕臣は或は上野の彰義隊となり、或



奥羽戦争  
五稜郭の戦

静寛院宮

(和宮親  
子内親王)

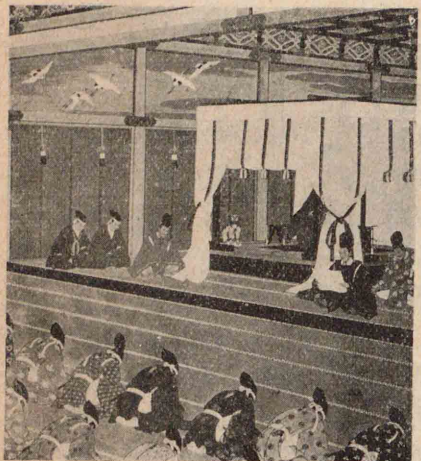


は松平容保を中心とする奥羽諸藩の同盟をつくり、又は北海道の五稜郭によるなど、薩長に對する反感のため、順逆を誤つてしきりに官軍に抵抗したが、何れも破られて明治二年海内悉く平定した。

家茂に御降嫁の和宮は後に静寛院宮と申されたが、官軍が江戸にせまつた際、慶喜に恭順をすゝめ、江戸の市民をお諭しになり、又使を京都につかはして江戸攻撃の見合せを御歎願になつた。かくて江戸の開城が平和の内に行はれたのも宮の御配慮によるところが多かつた。宮は實に御不幸の一生を終へさせ給ふたが、難局に處して臣道・婦道を全うせられたのである。

世の中の憂きてふ憂きを身一つに 取り集めたる心地こそすれ

**東京奠都** 明治元年、江戸を東京と改め、翌二年、天皇は賢所を奉じて東京に行幸あらせられ、永くこの地を帝都と奠<sup>サマ</sup>めて、一新の政治を行ふ中心とされた。



**統一の政治** 大政奉還により、幕府や幕臣の領地は朝廷にかへり、府縣となつたが、各藩の領地はもとのまゝであるため、政府の歳入が少なくて多大な國費を支辨し得ないのみならず、眞に統一の政治を行ふことが出来なかつた。木戸孝允<sup>タカヨシ</sup>は之を憂ひ、諸藩主に説いてその支配せる土地、人民の奉還を熱心にすゝめたため、明治二年、薩摩長門・土佐・肥前の四藩主が版籍奉還を奏請し、ついで他の諸藩も之になつたので、朝廷では舊藩主を知藩事

版籍奉還  
廢藩置縣

廢藩置縣

としてその舊領を治めさせられた。然しこれでは從來とあまり變らず、統一の効果がないたため、四年になつて全く藩を廢して縣となし、新に知事を任命した。ここに於て封建の制は全く廢され、集權統一の實があがることになり、維新の大業が全く成つた。

第二章 明治初年の施政

外國との和親

開國和親の外交 明治政府は開國和親の方針で諸外國と交り、岩倉具視等を歐米に遣はして修交に努め、またその文化を視察せしめた。然し國家の面目をあくまでも維持し、明治七年臺灣蕃人の暴行に對して清國に嚴重な抗議をなし、ついで征臺の軍を送つた。また朝鮮が我が修好の議を斥け、禮を缺くことが多かつたので、我が朝野に征韓論が起つたが、國內の改革に急なため、隠忍して専ら勸告につとめ、江華島に於ける彼の暴舉を責めて遂に修好を

征韓論

約さしめ(明治九年)またロシヤと境界を定め、千島樺太を交換して禍亂の源を絶つなど、和平の方針を實行した。

制度文物の改善

かゝる間に國內に於ける制度文物の改善をはかり、士農工商の階級を廢して四民平等とし、學制を定め、太陽曆を採用し、徴兵令を布いて國民皆兵となし、また通信交通機關の發達を圖り、或は北邊の地の開拓に努めるなど、内治の一新に大いに努力した。

改新の反動

かく明治の新政府はしきりに歐米の文物制度を採用し、一歩でも先進國の地位に近づかうと努力したため、稍もすれば改革の急にすぎる事が多かつた。國民の中には之に不平を抱く者があり、たま／＼征韓論に破れて地方に下つた者多

熊本城

四民平等  
學制  
徴兵令



地方の亂

西南の役

く、人心動搖し、遂にこれ等の人々は佐賀・熊本・萩等に亂を起して政府に反對したが、何れも平定された。明治十年鹿兒島の不平の徒が西郷隆盛を擁して兵を擧げた西南の役は、最も大なる反動であり、犠牲であつたが、この平定を最後として地方の騷亂も全く治まり、中央政府の威權が確立し、ついで國內が整頓される時代に入つた。

### 第三章 立憲政治の確立と國內の整備

法令制度の整備

立憲政治の確立 明治十年以後は法令制度を整へることに全力がそゝがれ、立憲制の確立に、法典の編纂に、不平等條約の改正に目覺ましい努力が續けられた。

萬機を公論に決せんとする御誓文の御趣旨は、中央及び地方制度の改革にあらはれた。初め板垣退助等が民選議員設立の議を

元老院  
大審院

伊藤博文

上つたが、明治八年に至り、元老院大審院が設けられ、ついで地方長官會議、府縣會が開かれ、漸次輿論が採用されるに至つた。又民間に於ても立憲政治の確立を叫ぶ者も多くなり、畏くも明治天皇は



一般の政治思想が進歩したのを御覽になり、明治十四年大詔を下して、來る廿三年を期して國會を開くべき旨を宣し給ひ、また伊藤博文等に憲法起草の大命を下し給うた。博文等は命をうけ、西洋諸國を巡つてその憲法制度及び立憲政治の實際を調査し、歸朝の後、明治十八年にはその取調によつて内閣制度が定められた。かくて二十二年に至り、天皇親しく大日本帝國憲法を欽定あらせられ、紀元節の佳辰に御發布になり、また皇室典範を制定あらせられ、

内閣制度

大日本帝國憲法  
皇室典範

憲法制定



翌二十三年には第一回帝國議會  
會が東京に招集された。かく  
の如く立憲政治の確立は全く  
明治天皇の大御心によるもの  
で、國史のあとにしたがひ、西洋  
の長所をもとり入れて國家の  
根本となる法が定められたの  
である。

また市町村制、府縣制も定められ、刑法、民法などの重要法律も整  
ひ、新興の意氣に充ちた。

**條約改正問題** 先に江戸幕府が諸外國と結んだ假條約は法權  
稅權などに不利な點が少くなかつたので、明治の初年以來我が政  
府は條約改正を屢交渉したが、容易に認められなかつた。然るに

岩倉大使に隨  
つた少女の留  
學生

治外法權撤廢

内治の整備、法典の編纂に力を致し、國力の  
充實と立憲政治の確立を行つたので、諸外  
國も漸くこれを認め、遂に明治二十七年イ  
ギリスが先づ同意し、ついで明治二十七、八  
年の役に大勝するや、他の諸國も悉く治外  
法權撤廢に應ずるに至つた。

**文化の發達** 明治維新は復古の精神よ



り出たが、盛に西洋の文化を輸入して國  
家の發展を圖つたので、國民の向學心は  
強く、岩倉具視等が歐米に派遣せられた  
際には十歳前後の年少の少女さへこれ  
に隨つて渡米し、父母の膝下を離れて勉  
勵した程であつた。

福澤諭吉



歐米文化

大隅重信



しかし一般に歐米心酔の風が強くと、稍もすれば本末を誤つて我が國固有のものゝ顧みられない事が多かつた。教育は學制が布かれてより、普通教育が次第にゆきわたり、西洋の文化をとつてその

慶應義塾

早稻田大學

進歩著しく、多くの官公立の學校が設立され、また福澤諭吉の慶應義塾、大隅重信の東京專門學校(早稻田大學)は私立の代表的なものとして知られたが、一般に西洋文明に酔うて我が固有の道德の輕視される事が多かつた。

狩野芳崖筆

學問は洋書の翻譯が中心になり、藝術にも從來の様式が全く顧みられず、繪畫に於ける狩野派の名手



狩野<sup>カノ</sup>芳崖<sup>ハルキ</sup>橋本<sup>ハシモト</sup>雅邦<sup>マサキ</sup>も世にいられられず、過去の傑作にも見捨てられた物が多かつた。

かゝる情勢に對して漸く國粹保存を叫ぶ聲が強くなり、やがて教育學藝を始め各方面に復古の精神が興つてきたが、この時明治天皇は教育に關する勅語を賜はり、國民の據るべきところを明かにし、正しき道への發展を御示しになつた。

教育勅語

#### 第四章 國威の發展と文化經濟の進歩

**朝鮮問題** 朝鮮は日支兩國の中間に存して古來何れかの勢力をうけ、常に東洋に於ける外交問題の發生地の感があつた。我が國は東洋平和の上から、その健全なる發達を望んだが、清國は之を屬國視し、その内政に干渉せんとしたので、日清兩國の關係はこの問題を中心に紛争を極めるに至つた。然るに朝鮮内でも我が國

清國の干渉

内争

天津條約

東學黨の亂

明治天皇廣島大本營に於て軍務を統べ給ふ



に頼つて國政を改め、獨立を固くせんとする獨立黨と専ら清國に頼らんとする事大黨とに分れて争つたので、明治十八年我が國は清國との間に天津條約を結び、兩國は朝鮮に駐兵をやめ、出兵の必要あるときには互に通知することにした。

明治二十七八年戰役 然るに明治二十七年朝鮮に東學黨の亂が起るや、清國は屬國の難を救ふと稱して出兵し、朝鮮の内政改革を行はうとする我が國の議を退け、あまつさへ威嚇の態度に出たので、遂に兩國の和親が破れ、宣戰の大詔が發せられた。畏くも明治天皇は廣島に大本營を進めて日夜軍務を統べ給ひ、また國をあげての後援に我が軍の士氣は大いに振ひ、海陸共

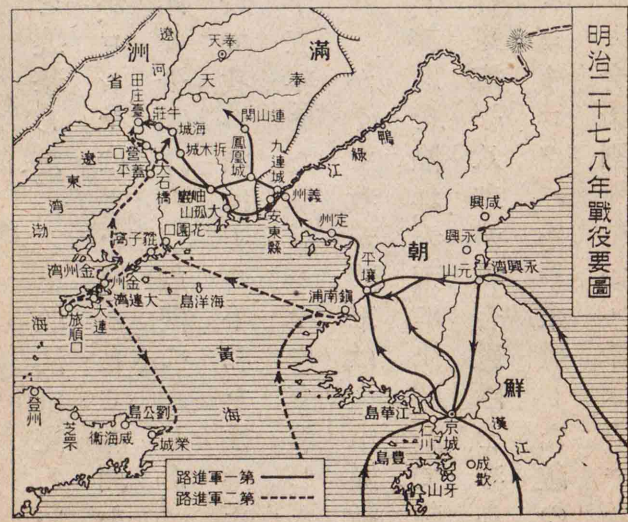
下關係約

三國干涉

韓と改稱

に奮戰して大勝を博した。ここに於て清國は屈し、下關係約によつて臺灣澎湖島及び遼東半島を割き、償金二億兩を出し、朝鮮の獨立を認めること等を約した。

然るに當時滿洲に南下せんとの野心を有してゐたロシアは、ドイツ及びフランスを誘ひ、東洋平和のためと稱して遼東半島の還附を我に強請したので、涙を吞んで之を清國に返還した。之を三國干涉といふ。然し朝鮮は我が國の力によつて獨立し得るに至り、ついで國號を韓と改めた。



北清事變

北清事變 清國がこの戦に於てその無力をあらはすや、歐米の諸國は之を壓迫して盛に利權を求め、その勢力を扶殖したため、清國民の排外思想が強くなり、明治三十三年義和團と稱する暴徒が北支那地方に亂を起して外國人を襲撃した。之を北清事變といひ、各國聯合軍の手で平定されたが、ロシアは之を機として滿洲を占領し、韓國をも威歴したので東洋の平和は再び危機に瀕した。

明治三十七八年戰役

明治三十七八年戰役 このに於て我が國はその平和を維持せんとして日英同盟を結び、(明治三十五年)また屢、ロシアに交渉したが効なく、遂に兩國の開戦となつた。かくて我が陸軍は大山巖指揮のもとに滿洲に轉戦して連勝し、旅順を陥れ、奉天に快勝して敵を北方に追ひ攘つた。また海軍は東郷平八郎が聯合艦隊を率ゐ、旅順の敵艦隊を全滅し、ついで遙々ヨーロッパから來航した敵の大艦隊を撃滅した。やがてアメリカ合衆國大統領ルーズヴェル

ロシアの野心

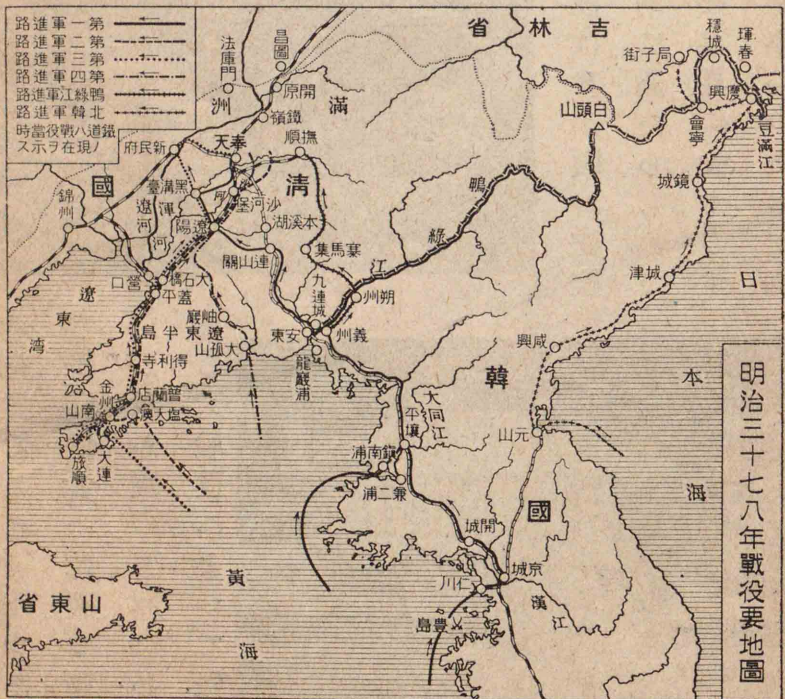
日英同盟

ポーツマス條約

この勸めによりポーツマスに於て條約を結び、ロシアは樺太の南半を割き、南滿洲の鐵道及び旅順大連一帶の租借權を譲り、また韓國に於ける我が國の優越權を認めめた。

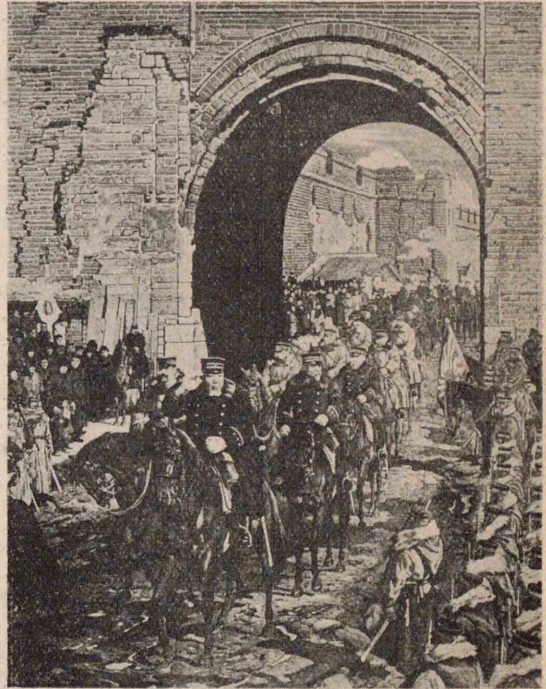
この役は實に我が國力の飛躍的發展を遂げる動機をなし、これより國際間に重要な地位を占め、同時に東洋平和の

國力の發展



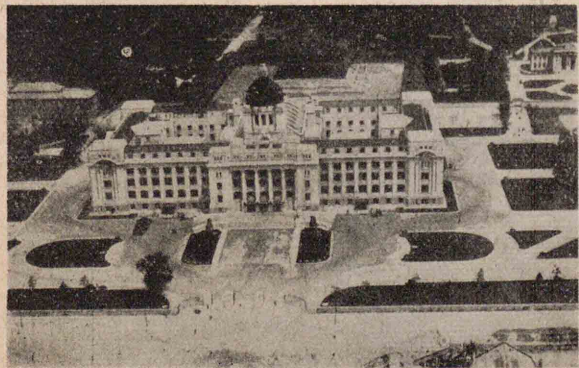
明治三十七八年戰役要地圖

奉天入城



鍵を握ることゝなつた。  
韓國併合 韓國の獨立は我が國の二回にわたる大戦役によつて保

朝鮮總督府



統監

護され、ロシヤとの戦役後は我が國が統監を置いて、統治の指導援助にあたらしめた。然し多年にわたる積弊は容易に改まらず、東洋禍亂の源となる怖が多かつたので、相

勝安芳



この御誓文は過去の封建世襲の制度を改めて、人材を用ひ、輿論を尊重し、上下一致して先進國の文明をうけ入れ、以て皇運の發展を圖らうとする御方針を御示しになつたもので、畏くも天皇御親ら衆の模範にならうと仰せ給うた。

鳥羽伏見の戦  
彰義隊

**舊幕臣の不平** しかるに大政奉還の後、薩長二藩の態度に不満

を抱く舊幕臣は慶喜を擁して大阪より入京せんとしたが、官軍のために鳥羽伏見に破られ、慶喜は海路江戸へ逃れた。ついで朝廷は諸藩の兵を出して江戸を攻めしめられたので、慶喜は深くつゝしみ、勝安芳をして罪を謝せしめ、江戸城を明け渡して水戸に退いた。然しなほ之を喜ばない舊幕臣は或は上野の彰義隊となり、或



奥羽戦争

五稜郭の戦

静寛院宮

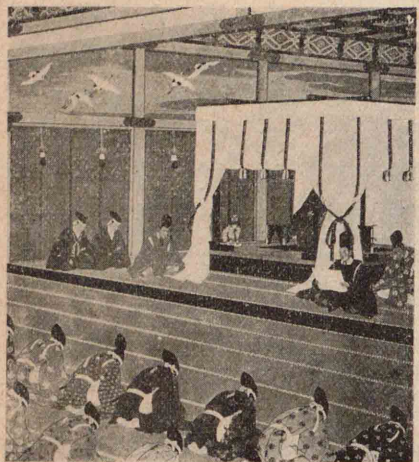
(和宮親  
子内親王)



は松平容保を中心とする奥羽諸藩の同盟をつくり、又は北海道の五稜郭によるなど、薩長に對する反感のため、順逆を誤つてしきりに官軍に抵抗したが、何れも破られて明治二年海内悉く平定した。

家茂に御降嫁の和宮は後に静寛院宮と申されたが、官軍が江戸にせまつた際、慶喜に恭順をすゝめ、江戸の市民をお諭しになり、又使を京都につかはして江戸攻撃の見合せを御歎願になつた。かくて江戸の開城が平和の内に行はれたのも宮の御配慮によるところが多かつた。宮は實に御不幸の一生を終へさせ給ふたが、難局に處して臣道、婦道を全うせられたのである。世の中の憂きてふ憂きを身一つに 取り集めたる心地こそすれ

東京奠都 明治元年、江戸を東京と改め、翌二年、天皇は賢所を奉じて東京に行幸あらせられ、永くこの地を帝都と奠<sup>サダメ</sup>めて一新の政治を行ふ中心とされた。



統一の政治 大政奉還により、幕府や幕臣の領地は朝廷にかへり、府縣となつたが、各藩の領地はもとのまゝであるため、政府の歳入が少なくて多大な國費を支辨し得ないのみならず、眞に統一の政治を行ふことが出来なかつた。木戸孝允<sup>タカヨシ</sup>は之を憂ひ、諸藩主に説いてその支配せる土地、人民の奉還を熱心にすゝめたため、明治二年、薩摩長門、土佐、肥前の四藩主が版籍奉還を奏請し、ついで他の諸藩も之にならつたので、朝廷では舊藩主を知藩事

廢藩置縣

版籍奉還

廢藩置縣

としてその舊領を治めさせられた。然しこれでは從來とあまり變らず、統一の効果がないたため、四年になつて全く藩を廢して縣となし、新に知事を任命した。ここに於て封建の制は全く廢され、集權統一の實があがることになり、維新の大業が全く成つた。

第二章 明治初年の施政

外國との和親

開國和親の外交 明治政府は開國和親の方針で諸外國と交り、岩倉具視等を歐米に遣はして修交に努め、またその文化を視察せしめた。然し國家の面目をあくまでも維持し、明治七年臺灣蕃人の暴行に對して清國に嚴重な抗議をなし、ついで征臺の軍を送つた。また朝鮮が我が修好の議を斥け、禮を缺くことが多かつたので、我が朝野に征韓論が起つたが、國內の改革に急なため、隱忍して専ら勸告につとめ、江華島に於ける彼の暴舉を責めて遂に修好を

征韓論

四民平等  
學制  
徵兵令

熊本城

約さしめ(明治九年)またロシアと境界を定め、千島樺太を交換して禍亂の源を絶つなど、和平の方針を實行した。

制度文物の改善 かゝる間に國內に於ける制度文物の改善をはかり、士農工商の階級を廢して四民平等とし、學制を定め、太陽曆を採用し、徵兵令を布いて國民皆兵となし、また通信交通機關の發達を圖り、或は北邊の地の開拓に努めるなど、内治の一新に大いに努力した。

改新の反動 かく明治の新政府はしきりに歐米の文物制度を採用し、一步でも先進國の地位に近づかうと努力したため、稍もすれば改革の急にすぎる事が多かつた。國民の中には之に不平を抱く者があり、たま／＼征韓論に破れて地方に下つた者多



地方の亂

西南の役

く、人心動搖し、遂にこれ等の人々は佐賀、熊本、萩等に亂を起して政府に反對したが、何れも平定された。明治十年鹿兒島の不平の徒が西郷隆盛を擁して兵を擧げた西南の役は、最も大なる反動であり、犠牲であつたが、この平定を最後として地方の騷亂も全く治まり、中央政府の威權が確立し、ついで國內が整頓される時代に入つた。

### 第三章 立憲政治の確立と國內の整備

法令制度の整備

**立憲政治の確立** 明治十年以後は法令制度を整へることに全力がそそがれ、立憲制の確立に、法典の編纂に、不平等條約の改正に目覺ましい努力が續けられた。

萬機を公論に決せんとする御誓文の御趣旨は、中央及び地方制度の改革にあらはれた。初め板垣退助等が民選議員設立の議を

元老院  
大審院

伊藤博文

上つたが、明治八年に至り、元老院、大審院が設けられ、ついで地方長官會議、府縣會が開かれ、漸次輿論が採用されるに至つた。又民間に於ても立憲政治の確立を叫ぶ者も多くなり、畏くも明治天皇は



内閣制度  
大日本帝國憲法  
皇室典範

一般の政治思想が進歩したのを御覽になり、明治十四年大詔を下して、來る廿三年を期して國會を開くべき旨を宣し給ひ、また伊藤博文等に憲法起草の大命を下し給うた。博文等は命をうけ、西洋諸國を巡つてその憲法制度及び立憲政治の實際を調査し、歸朝の後、明治十八年にはその取調によつて内閣制度が定められた。かくて二十二年に至り、天皇親しく大日本帝國憲法を欽定あらせられ、紀元節の佳辰に御發布になり、また皇室典範を制定あらせられ、

憲法制定



翌二十三年には第一回帝國議會  
會が東京に招集された。かく  
の如く立憲政治の確立は全く  
明治天皇の大御心によるもの  
で、國史のあとにしたがひ、西洋  
の長所をもとり入れて國家の  
根本となる法が定められたの  
である。

また市町村制、府縣制も定められ、刑法、民法などの重要法律も整  
ひ、新興の意氣に充ちた。

**條約改正問題** 先に江戸幕府が諸外國と結んだ假條約は法權  
稅權などに不利な點が少くなかつたので、明治の初年以來我が政  
府は條約改正を屢、交渉したが、容易に認められなかつた。然るに

岩倉大使に隨  
つた少女の留  
學生

治外法權撤廢

内治の整備、法典の編纂に力を致し、國力の  
充實と立憲政治の確立を行つたので、諸外  
國も漸くこれを認め、遂に明治二十七年イ  
ギリスが先づ同意し、ついで明治二十七八  
年の役に大勝するや、他の諸國も悉く治外  
法權撤廢に應ずるに至つた。

**文化の發達** 明治維新は復古の精神よ



り出たが、盛に西洋の文化を輸入して國  
家の發展を圖つたので、國民の向學心は  
強く、岩倉具視等が歐米に派遣せられた  
際には十歳前後の年少の少女さへこれ  
に隨つて渡米し、父母の膝下を離れて勉  
勵した程であつた。

福澤諭吉



歐米文化

大隅重信



しかし一般に歐米心酔の風が強く、稍もすれば本末を誤つて我が國固有のものゝ顧みられない事が多かつた。教育は學制が布かれてより、普通教育が次第にゆきわたり、西洋の文化をとつてその

慶應義塾

早稻田大學

進歩著しく、多くの官公立の學校が設立され、また福澤諭吉の慶應義塾、大隅重信の東京專門學校(早稻田大學)は私立の代表的なものとして知られたが、一般に西洋文明に酔うて我が固有の道德の輕視されるが多かつた。

狩野芳崖筆

學問は洋書の翻譯が中心になり、藝術にも從來の様式が全く顧みられず、繪畫に於ける狩野派の名手



狩野<sup>カノ</sup>芳崖<sup>ハルカ</sup>橋本<sup>ハシモト</sup>雅邦<sup>マサキ</sup>も世にいれられず、過去の傑作にも見捨てられた物が多かつた。

かゝる情勢に對して漸く國粹保存を叫ぶ聲が強くなり、やがて教育學藝を始め各方面に復古の精神が興つてきたが、この時明治天皇は教育に關する勅語を賜はり、國民の據るべきところを明かにし、正しき道への發展を御示しになつた。

教育勅語

#### 第四章 國威の發展と文化經濟の進歩

**朝鮮問題** 朝鮮は日支兩國の中間に存して古來何れかの勢力をうけ、常に東洋に於ける外交問題の發生地の感があつた。我が國は東洋平和の上から、その健全なる發達を望んだが、清國は之を屬國視し、その内政に干渉せんとしたので、日清兩國の關係はこの問題を中心に紛争を極めるに至つた。然るに朝鮮内でも我が國

清國の干渉

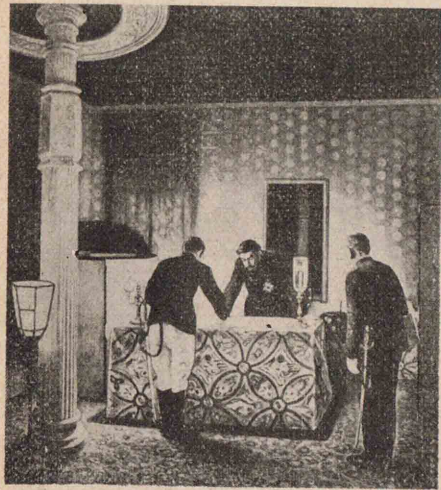
内争

天津條約

東學黨の亂

に頼つて國政を改め、獨立を固くせんとする獨立黨と専ら清國に頼らんとする事大黨とに分れて争つたので、明治十八年我が國は清國との間に天津條約を結び、兩國は朝鮮に駐兵をやめ、出兵の必要あるときには互に通知することにした。

明治天皇廣島大本營に於て軍務を統べ給ふ



明治二十七八年戰役 然るに明治二十七年朝鮮に東學黨の亂が起るや、清國は屬國の難を救ふと稱して出兵し、朝鮮の内政改革を行はうとする我が國の議を退け、あまつさへ威嚇の態度に出たので、遂に兩國の和親が破れ、宣戰の大詔が發せられた。畏くも明治天皇は廣島に大本營を進めて日夜軍務を統べ給ひ、また國をあげての後援に我が軍の士氣は大いに振ひ、海陸共

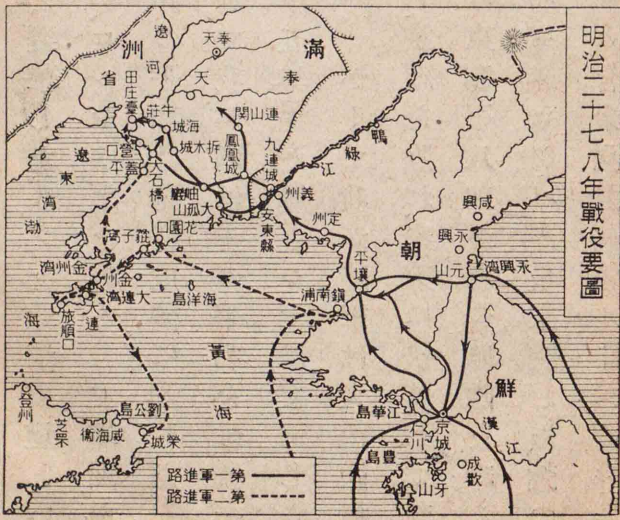
下關係約

に奮戰して大勝を博した。ここに於て清國は屈し、下關係約によつて臺灣澎湖島及び遼東半島を割き、償金二億兩を出し、朝鮮の獨立を認めること等を約した。

三國干涉

韓と改稱

然るに當時滿洲に南下せんとの野心を有してゐたロシアは、ドイツ及びフランスを誘ひ、東洋平和のためと稱して遼東半島の還附を我に強請したので、涙を吞んで之を清國に返還した。之を三國干涉といふ。然し朝鮮は我が國の力によつて獨立し得るに至り、ついで國號を韓と改めた。



北清事變

北清事變 清國がこの戦に於てその無力をあらはすや、歐米の諸國は之を壓迫して盛に利權を求め、その勢力を扶植した。清國民の排外思想が強くなり、明治三十三年義和團と稱する暴徒が北支那地方に亂を起して外國人を襲撃した。之を北清事變といひ、各國聯合軍の手で平定されたが、ロシアは之を機として滿洲を占領し、韓國をも威壓したので東洋の平和は再び危機に瀕した。

明治三十七八年戰役

明治三十七八年戰役 此に於て我が國はその平和を維持せんとして日英同盟を結び、(明治三十五年)また屢、ロシアに交渉したが効なく、遂に兩國の開戦となつた。かくて我が陸軍は大山巖指揮のもとに滿洲に轉戦して連勝し、旅順を陥れ、奉天に快勝して敵を北方に追ひ攘つた。また海軍は東郷平八郎が聯合艦隊を率ゐ、旅順の敵艦隊を全滅し、ついで遙々ヨーロッパから來航した敵の大艦隊を撃滅した。やがてアメリカ合衆國大統領ルーズヴェル

ロシアの野心

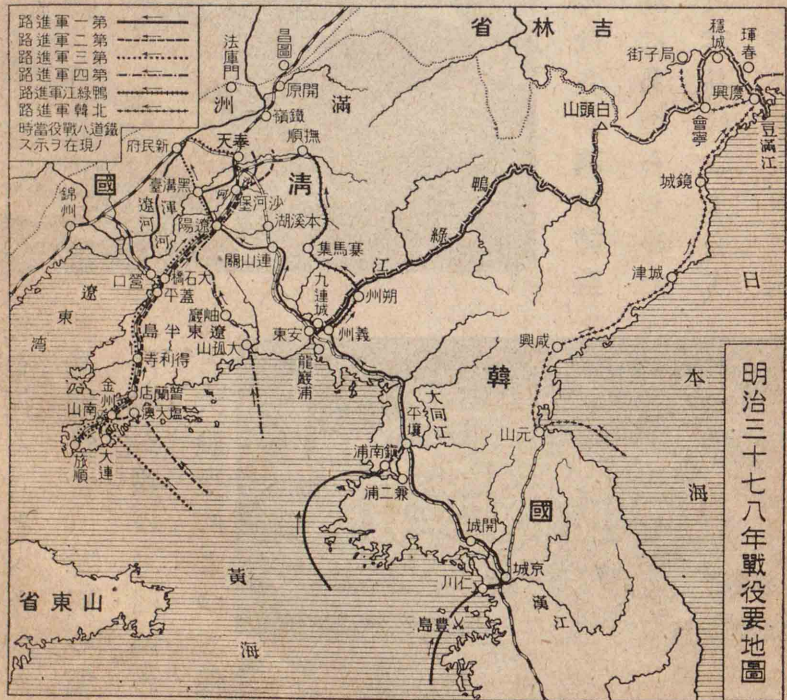
日英同盟

ポーツマス條約

この勸めによりポーツマスに於て條約を結び、ロシアは樺太の南半を割き、南滿洲の鐵道及び旅順、大連一帶の租借權を譲り、また韓國に於ける我が國の優越權を認め

國力の發展

この役は實に我が國力の飛躍的發展を遂げる動機をなし、これより國際間に重要な地位を占め、同時に東洋平和の



奉天入城

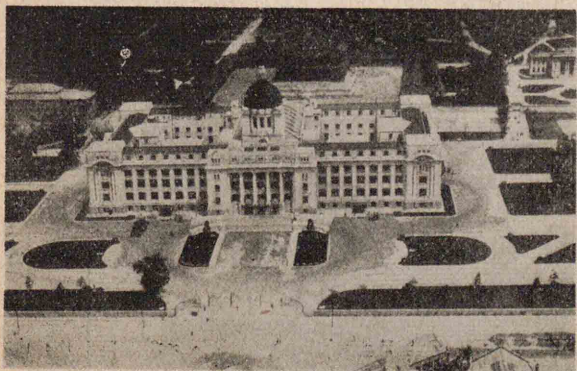


朝鮮總督府

統監

護され、ロシアとの戦役後は我が國が統監を置いて、統治の指導援助にあたらしめた。然し多年にわたる積弊は容易に改まらず、東洋禍亂の源となる怖が多かつたので、相

鍵を握ることゝなつた。  
韓國併合 韓國の獨立は我が國の二回にわたる大戦役によつて保



經濟の發展

互の幸福のため彼の要請を容れて明治四十三年我が國に併合し、以て東洋永遠の平和を圖つた。  
國內の發展 この大戦役を機に明治時代の經濟文化は共に大發展を遂げた。關稅權は平等になり、諸種の産業は大資本・大組織に營まれるに至り、商工業國としての地位を占める基をつくつた。鐵道は主要なものを國有に統一してその發達を圖り、電話及び無線電信も著しく進歩してきた。

學藝の發達

學藝では東西の長所が融合される傾向があり、西洋の學術がよく研究され、殊に科學の發達が著しかつた。文學に於ては俳句の正岡子規が復古を唱へて一派をなし、小説に尾崎紅葉等が出て江戸文學にもとづいたが、樋口一葉は若くして才筆をうたはれ、西洋文學の坪内逍遙ツネヲ・森鷗外オウゾウ等もまたあらはれた。



樋口一葉

文學

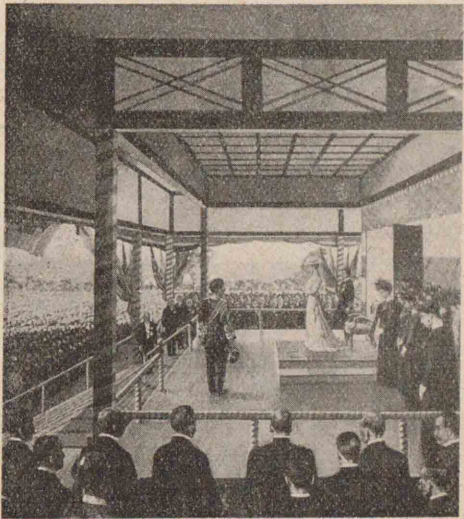


戊申詔書

戦後の世風 かゝる国力の短日月の發達により、財政の膨脹、國債の増加は甚大となつたが、上下共に戦勝にほこつて奢侈に流れ、質實の風が失せんとしたので、明治天皇は戊申詔書を御下賜にな

り(明治四十年)國民の覺醒を求め、益國運發展に努力すべきことを諭し給うた。

赤十字社行啓



御仁徳と社會事業 天皇の御

仁徳は多くの貧民の上に及び、御手許金の御下賜をもとに今日大きな事業をしてゐる濟生會が起り、また皇后も御慈愛の御心深くましまし、社會救濟の事業に御力を致された。西南の役に佐野常民は博愛社をおこし、明治二十年にはこれを日本赤十字社と改め

濟生會

赤十字社

愛國婦人會

奥村五百子

て萬國赤十字社同盟に加入し、ここに戦傷病者の救護を中心にして一般國民の健康増進、疾病の豫防に活動することになつた。また北清事變後、奥村五百子は愛國婦人會を創設し、其の他博愛慈善の事業を起すもの多く、不幸な同胞を救濟する機關が備はつてきた。



明治時代の概括

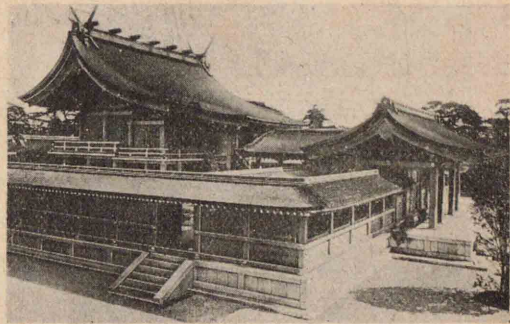
明治天皇の四十五年にわたる御治世程著しい發展を遂げた時代は東西古今にその比を見ない。明治維新は六百七十餘年以來の武家政治が廢された我が國未曾有の變革に始まり、五ヶ條の御誓文により新政の御方針が定まつた。

初め約十年の間は制度の改革が急で過去の社會が全く改められ、一方にはこの改革に對する反動があつたが、何れも平定し、中央

政府のもとに完全に集権が行はれた。

明治十年頃から立憲政治の建設、諸制度整備の時代で、大寶令にならつた従來の官制は全く一新せられて、内閣制度がたてられ、大日本帝國憲法の發布及び皇室典範の制定があり、ついで地方制度の完備、諸法典の編纂と共に不平等條約改正の努力がつけられた。また社會一般には歐米心酔の風が甚しく漲つてゐたが、國粹保存の風も漸く興つて之に對立せんとしたとき教育勅語が御下賜せられたのである。

外交に於ける平和の方針も朝鮮問題を中心に清國と兵火を交へ、またロシヤと戦ふのやむなきに至つたが、この兩戦役に於て我が國威は輝き、ついで韓國の併合によつて全



明治神宮

時		代	
立	時	國	力
確	代	展	時
(一三)明	治		
二〇	二五	四七	四七
二一	二五	四八	四八
二二	二五	四九	四九
二三	二五	五〇	五〇
二四	二五	五一	五一
二五	二五	五二	五二
二六	二五	五三	五三
二七	二五	五四	五四
二八	二五	五五	五五
二九	二五	五六	五六
三〇	二五	五七	五七
三一	二五	五八	五八
三二	二五	五九	五九
三三	二五	六〇	六〇
三四	二五	六一	六一
三五	二五	六二	六二
三六	二五	六三	六三
三七	二五	六四	六四
三八	二五	六五	六五
三九	二五	六六	六六
四〇	二五	六七	六七
四一	二五	六八	六八
四二	二五	六九	六九
四三	二五	七〇	七〇
四四	二五	七一	七一
四五	二五	七二	七二
市町村制發布。	憲法發布。嘉仁親王皇太子に立ち給	東學黨の亂。日清戦役起る。條約改	對外發展
教育勅語下る。國會開設さる。	正始まる。	朝鮮國號を韓と改む。	經濟的發展
	下ノ關係條約締結。臺灣平定。	改正條約實施。	展進力國
	北清事變。	日英同盟成る。	日清戦役
	日露戦役起る。	日本海々戰。ポーツマス條約。韓國	北清事變
	に統監府を置く。	日佛協約成る。日韓新協約成る。日	條約改正
	露協約成る。	日韓新協約成る。日	日露戦役
	戊申詔書下る。	韓國併合。	諸國と協
	日英改正條約成る。	日英改正條約成る。	定を結ぶ
	明治天皇崩御。	明治天皇崩御。	

心に清國と兵火を交へたロシアと戦ふのやむなきに至つたか  
この兩戰役に於て我が國威は輝き、ついで韓國の併合によつて全

第九年表 明治時代年表

時代	天	皇	年	號	紀	元	重要事項	概	要	對	外	關	係
明治	元	二五二八	鳥羽・伏見の戰。五箇條の御誓文。 上野戰爭。奥羽戰爭。東京行幸。 東京奠都。版籍奉還。國內平定。	御親政 國內平定	維新の業大成	清國と修好	歐米修好						
	二	二五二九	廢藩置縣。岩倉大使を歐米に派遣す。 學制を頒つ。										
	三	二五三〇	徵兵令發令。太陽曆實施。征韓論起 る。岩倉大使歸朝す。西郷隆盛等辭 職す。	社會の急變 地方の反動	社會改革	好朝 鮮と修	臺灣征伐 露との境を 定む						
	四	二五三一	佐賀の亂。臺灣征伐。										
	五	二五三二	千島・樺太の交換。江華島事件。地 方官會議。										
	六	二五三三	朝鮮との修好條約成る。熊本・萩等 の亂。										
	七	二五三四	西南の役。										
	八	二五三五	府縣會開設。										
	九	二五三六	國會開設の詔下る。										
	一〇	二五三七	朝鮮京城の變。伊藤博文を歐洲に遣 はす。										
	一一	二五三八	朝鮮京城の變。										
	一二	二五三九	朝鮮京城の變。										
	一三	二五四〇	朝鮮京城の變。										
	一四	二五四一	朝鮮京城の變。										
	一五	二五四二	朝鮮京城の變。										
	一六	二五四三	朝鮮京城の變。										
	一七	二五四四	朝鮮京城の變。										
	一八	二五四五	朝鮮京城の變。										
	一九	二五四六	朝鮮京城の變。										
	二〇	二五四七	朝鮮京城の變。										
	二一	二五四八	市町村制發布。										
	二二	二五四九	憲法發布。嘉仁親王皇太子に立ち給 ふ。										
	二三	二五五〇	教育勅語下る。國會開設さる。										
	二四	二五五一	東學黨の亂。日清戰役起る。條約改 正始まる。	對外發展									
	二五	二五五二	下ノ關係締結。臺灣平定。										
	二六	二五五三	朝鮮國號を韓と改む。										
	二七	二五五四	朝鮮國號を韓と改む。										
	二八	二五五五	朝鮮國號を韓と改む。										
	二九	二五五六	朝鮮國號を韓と改む。										
	三〇	二五五七	朝鮮國號を韓と改む。										
	三一	二五五八	朝鮮國號を韓と改む。										
	三二	二五五九	改正條約實施。										
	三三	二五六〇	北清事變。										
	三四	二五六一	北清事變。										

第九年表 明治時代年表

時代	明治	治	時	代	
天	皇	年	號	元	
明治	元	二五二八	二五二九	二五三〇	
二五三〇	二五三一	二五三二	二五三三	二五三四	
二五三五	二五三六	二五三七	二五三八	二五三九	
二五四〇	二五四一	二五四二	二五四三	二五四四	
二五四五	二五四六	二五四七	二五四八	二五四九	
二五五〇	二五五一	二五五二	二五五三	二五五四	
二五五五	二五五六	二五五七	二五五八	二五五九	
二五六〇	二五六一	二五六二	二五六三	二五六四	
二五六五	二五六六	二五六七	二五六八	二五六九	
二五七〇	二五七一	二五七二			
重要事項	鳥羽・伏見の戦。五箇條の御誓文。上野戦争。奥羽戦争。東京行幸。東京奠都。版籍奉還。國內平定。廢藩置縣。岩倉大使を歐米に派遣す。學制を頒つ。徴兵令發令。太陽曆實施。征韓論起る。岩倉大使歸朝す。西郷隆盛等辭職す。佐賀の亂。臺灣征伐。千島・樺太の交換。江華島事件。地方官會議。朝鮮との修好條約成る。熊本・萩等の亂。西南の役。府縣會開設。國會開設の詔下る。朝鮮京城の變。伊藤博文を歐洲に遣はす。朝鮮京城の變。天津條約。内閣制度定まる。朝鮮京城の變。市町村制發布。憲法發布。嘉仁親王皇太子に立ち給ふ。教育勅語下る。國會開設さる。東學黨の亂。日清戦役起る。條約改正始まる。下ノ關係條約締結。臺灣平定。朝鮮國號を韓と改む。改正條約實施。北清事變。日英同盟成る。日露戦役起る。日本海々戰。ポーツマス條約。韓國に統監府を置く。日佛協約成る。日韓新協約成る。日露協約成る。戊申詔書下る。韓國併合。日英改正條約成る。明治天皇崩御。	御親政 國內平定 社會の急變 地方の反動	國內平定 社會の急變 地方の反動	維新の業成る 社會の改革	歐米修好 好清國と修 臺灣征伐 露との境を定む
概	要	對外關係			
經濟の發展	對外發展	法典編纂	對外發展	經濟の發展	
展進力國	展發のへ治政憲立	京城變 京城變 天津條約	好朝鮮と修 臺灣征伐 露との境を定む	日清戦役 條約改正 日英同盟 北清事變 諸國と協定を結ぶ	
韓國併合					

乃木靜子辭世  
の書

く東洋の指導者としての地位を占め、天智天皇以來千二百餘年にわたる半島經營中止の懸案が解決した。この間に不平等條約も全く廢され、經濟・文化に著しい發展をなし、漸く東西の文化を融合して獨自のものをつくらんとするに至つた。

この著しい發展も實に明治天皇の御威徳によるもので、大御心を常に國家・國民の上に注がせ給ひ、その御下賜になつた多くの詔勅は永く國民の鑑として千載不滅の光を放ち、天皇の神去りましし後も明治神宮に國民舉つてその御徳を慕ひ奉るのである。

うつし世を神去りまし、大君の

みあとしたひて我はゆくなり

乃木希典

大正元年九月十三日夜、明治天皇御大葬の御鹵簿が宮城御出發の頃、乃木大將夫妻は壯烈な自刃をとげて天皇に殉じ奉つた。

出てきて  
かへりませぬの  
なりとさく  
乃木の湯子に  
送るおのり

### 第十篇 大正・昭和時代

#### 第一章 歐洲大戰と國威の躍進

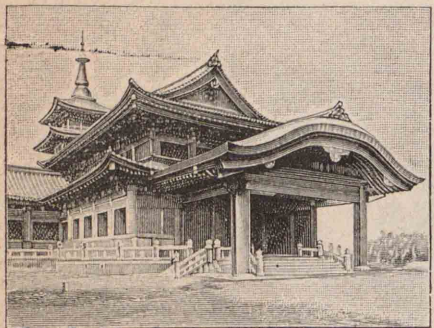
**歐洲大戰** 大正三年ヨーロッパに大戰が勃發し、ドイツ・オーストリア・ハンガリー等の同盟國がロシア・フランス及びイギリス等の聯合國と戰を開いたが、その影響は全世界に波及し、東洋に於てもドイツは膠州灣を根據地とし、東洋の安寧を脅かしたので我が國は日英同盟の義を重んじ、ドイツに對し宣戰を布告し、膠州灣を攻略し、ついで南洋諸島を占領した。また遠く地中海に軍艦を派遣し、或はロシアに革命が起きて秩序が亂れたので、シベリヤに出兵して東洋に戰禍の及ぶのを防ぐなど、東亞の鎮護に活躍した。かくて講和會議に於ては五大強國の一として重きをなし、膠州灣及び山東半島に於けるドイツの利權を譲り受け、また赤道以北の

#### 日獨開戰

#### 國際聯盟

#### ワシントン會議

#### 震災記念堂



舊ドイツ領南洋諸島を統治する委任を受けた。

**國威の躍進** 五年にわたる大戰の慘禍を経験した諸國民の間には平和を欲する念強く、國際聯盟を設けて世界永遠の平和を圖らうとし、我が國もこの常任理事國として平和に貢獻するところが大きであつた。然しまだ國際關係にも不安がつゞいたので大正十年末、アメリカ合衆國が首唱してワシントン會議を開くことになつた。我國はこれに参加して主力艦や太平洋の防備を制限し、イギリス・アメリカ合衆國・フランスと太平洋に於ける相互の領土の尊重を約して日英同盟を廢棄し、支那に關しては九箇國條約を結んでその領土保全を約し、同時に膠州灣地方を支那に還附することとなつた。

關東大震災

經濟の進歩また著しく、大戰當時は物資の供給國として重きをなし、大正十二年、關東地方に大震災が起つて東京・横濱を始め、その被害が甚大を極めたが、國民は堅忍不拔、大正天皇の御下賜になつた國民精神作興に關する詔書の御旨を奉じて着々とその復舊につとめ、世界の驚異のもとに今日の盛況をつくりあげた。

第二章 東洋の形勢と我が國の世界的地位

昭和の聖代 大正天皇崩御あらせられるや、今上陛下即位し給ひ、昭和と改元せられた。天皇は皇太子の御頃、ヨーロッパ諸國を御訪問遊ばされ、御歸朝の後には攝政の重任に御就きになり、御英資に加ふるに豊富な御經驗とをもつて、今や我が國を統治あそばされる。

東洋の形勢

支那は先に清國が滅んで共和國となり(明治四十五年)中

聖上陛下



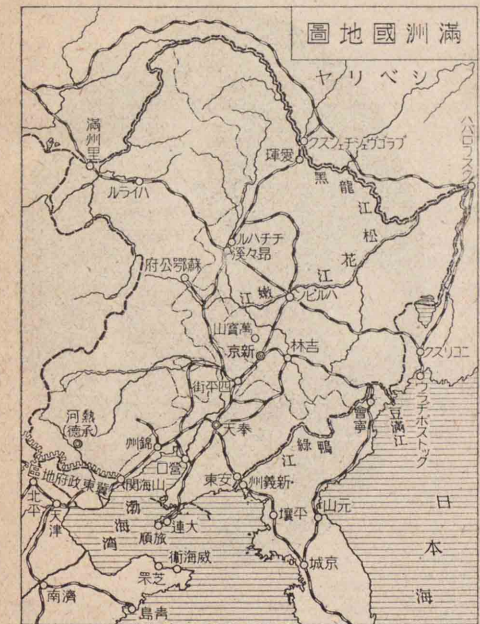
中華民國  
ロシア

排日の氣風

利を得、兩國の國交が回復せられた(大正十四年)。また支那に對しては指導援助を惜まず、その健全な發達を希つて膠州灣を還すなど、東洋平和の發展につとめたが、彼は我が平和の眞意を誤解して排日の氣風強く、屢、我が商品の不買同盟を行ひ、遂には我が國が尊い犠牲を拂つて獲得した滿蒙に於ける利權をも踏みにじらうとして不法な振舞を屢、行つた。

滿洲建國

滿洲事變 昭和六年九月、突如滿洲に起つた支那兵の暴行に對し、自衛上敢然立つてその不法を責め、滿洲事變つゞいて上海事變となつた。之に端を發して滿洲三千萬の民衆は獨立し、王道政治を目標とする滿洲國を建設したが(昭和七年)、やがて帝國となり、溥儀執政を皇帝に戴いた。我が國は滿洲國を承認して共同防衛を約し、



政治・經濟をはじめ、すべてにわたつてその發展を援けた。然るに國際聯盟は我が國の公正な精神を誤解し、滿洲國の獨立を認めなかつたので、斷然これを離脱し、我が獨自の方針にすゝむことになつた(昭和八年)。

國際聯盟離脱

ロンドン會議

ワシントン條約廢棄

平和への希望

ワシントン條約廢棄 ワシントン條約締結後、補助艦の競争が烈しくなつたから、昭和五年イギリスの首唱によつてロンドン會議が開かれ、日英米三國の補助艦を制限した。然しこの兩條約共に我が艦艇保有の割合が英米に比して不利益であり、殊に滿洲事變後の興隆日本の情勢に適しないので、昭和九年條約上の權利にもとづき、ワシントン條約廢棄をアメリカ合衆國に通告し、帝國獨自の立場を維持すると共に公平なる眞の軍備制限案を提示したが、英米の容れるところとならなかつた。

國際聯盟離脱もワシントン條約廢棄も國家生存上の必要からて世界の平和を希ひ之に對する努力は從來と少しも變らないのである。

防共協定 ロシヤはソヴィエト聯邦となり、その後國力を回復し、豊富な資源のもとに活躍をはじめたが、共產主義を宣傳して世



日獨伊防共協定

界の平和を脅かさうとしたので、我が國はドイツとこの防止を約し、ついでイタリヤも之に参加した。(昭和十一年)

支那事變

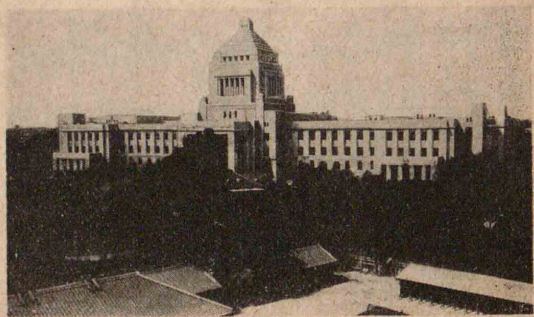
我が國は日滿支三國の提携により東洋を平和ならしめることにつとめてきたが、支那の國民政府は排日の態度を改めず、屢、不法の行爲をなし、遂に昭和十二年七月彼の暴舉のために支那事變が起つた。我が國はこゝに膺懲ヨウヂョウの軍を出すことになつたが、北支那及び中支那方面に於ける我が忠勇なる將士の奮戦は目覺ましく、北京上海について敵の首都南京を攻略し、更に進んで第二の根據地、漢口をも占領した。一方南支那に於ける我が迅速果敢の行動はたちまち廣東を陥して敵の門戸を閉じ、聖戰一年半にしてその重要地點を悉く我が手に收めた。こゝに於て東洋の平和と支那民衆の幸福とを圖るために、新しくできた中華民國臨時維新兩政府の健全な發達をたすけ、治安の維持文化・經濟の開發

支那事變

共產主義の驅逐等つとめてゐる。

經濟界の大發展

滿洲事變が起ると共にわが產業界の發展が著しく、その廉價で優れた製品の輸出は西洋諸國の産業を壓したため、イギリス・フランス・オランダの如きは、その屬領をして我が商品の輸入に高率關稅をかけて制限を加へしめるなどの行爲に出て、世界の貿易は次第に各國の勢力圏内に鎖される傾向となつた。然しこれにも拘らず、我が商品は廣く世界に進出し、昭和十二年度の貿易額は七十億圓に近く、事變中とはいへ未曾有の盛況を示した。また滿洲國の發展は日滿兩國の經濟上の提携を益、緊密にしてきた。支那事變は我が國未曾有の大事變であるが、我が經濟力は微動



帝國議事堂

貿易制限策

だにせず、かつて世界大戦に際して歐洲諸國がうけた程の困窮もなく、國民一致して益、その基礎を固め、ひたすら聖戰の目的貫徹につとめてゐる。

結 論

國民の覺悟

神代の昔、天照大神の下し給うた神勅の御精神は連綿として國史の底を流れ、之を體して萬民を慈み給ふ御歷代天皇の御徳と、これを奉戴して皇室に仕へ奉る國民の忠誠とが光輝ある我が國體をつくつたのである。

世の變化につれて皇威の御不振の時代もあつたが、國民の覺醒は常に國史に顧みて皇室への復歸であつた。國民は皇室の御力によつて正道に導かれ、皇室へ復歸することによつて正道を歩い

たのである。世の發展は常に皇威の振興した時であつた。

また我が國民は固有の文化を維持すると共に外來文化を同化して新らしい文化を創造した。佛教も儒教も我が國に入つて我が固有の文化と同化し、充分なる發展をなしたのである。

昭和の聖代は肇國以來曾てない世界的地位を占め、世界最大の關心事である東洋の平和は一に我が國の雙肩にかゝつてきた。我が國は列國に對してはあくまでも親善を維持して共榮を圖ると共に、軍備に於ては不脅威<sup>フキョウキ</sup>不侵略の原則を主張し、東洋に於けるその平和と發展とを圖つてゐるのである。されば獨伊兩國と協定して共產主義の波及を防ぎ、滿洲國を指導援助してその驚くべき發展をもたらし、我が眞意を解せずしてむしろ東洋の禍亂を招かんとする支那の國民政府を膺懲したのもこの任務を果さんとするのに外ならない。されどこの任務を遂行するには前途に幾

多の困難が存してゐる。

滿洲事變が起るや、婦人も銃後にあつて國家のために盡さうとの熱意より大日本國防婦人會が生まれその會員も全國に及び、愛國婦人會と共に大きな活動をしてゐる。又支那事變に際して生まれ、幾多の美談の中にも女性の赤心が偲ばれ、わが兒の戦死を御國のためとよるこぶ母の心こそ曾ての楠木正行の母や、文永役後の尼真阿の心情と少しも變らぬものである。

國史を通して流れる美しい國民精神は何れも家庭に培はれたもので、この指導の中心は常に女性にあつた。確固とした志操のもとに健全な家庭をつくり、これをよく指導し、以て國家の發展に貢獻する道に進むこそ婦人に與へられた任務である。

### 新撰女子國史 低學年用 終

昭和		和		時		代	
二五八六	二五八七	二五八八	二五八九	二五九〇	二五九一	二五九二	二五九三
二五九四	二五九五	二五九六	二五九七	二五九八	二五九九	二六〇〇	二六〇一
大正天皇崩御、 今上天皇踐祚。 大正天皇御大葬。 即位の大禮を挙げ給ふ。	ロンドン軍縮會議。 滿洲事變起る。ジュネーヴ軍縮會議 開かる。	上海事變。滿洲國承認。 國際聯盟退通告。 滿洲國帝政宣布。 ワシントン條約廢棄通告。 海軍軍備制限會議退。 日獨防共協定成立。 支那事變起る(七月)。 日獨伊防共協定成立。 南京陥落(十二月)。 廣東占領(十月)。 漢口占領(十月)。	經濟界の大發展 世界的地位の確保	支那事變	滿洲事變	上海事變	軍縮會議 聯盟退 脫退

第十年表 大正・昭和時代年表

時代	大正	昭和
天皇	(三)大正	(四)今上
年號	大正	昭和
元	二五七二	二五八〇
紀元	二五七三	二五八〇
重要事項	<p>大正天皇踐祚。御大葬。</p> <p>昭憲皇太后崩御。歐洲の大戦始まる。獨逸に對して宣戰す。青島陥落。獨逸南洋諸島占領。</p> <p>日支條約成る。即位大禮を擧げ給ふ。裕仁親王の立太子式舉行。</p> <p>東部シベリヤに出兵す。獨逸聯合國と休戰す。</p> <p>ヴェルサイユ條約成る。</p> <p>裕仁親王の御外遊。ワシントン會議開かる。裕仁親王攝政となり給ふ。</p> <p>關東大震災。陪審法公布。</p> <p>米國移民制限新法實施。</p> <p>普通選舉法公布。</p> <p>大正天皇崩御。</p> <p>今上天皇踐祚。</p> <p>大正天皇御大葬。</p> <p>即位の大禮を擧げ給ふ。</p>	<p>ロンドン軍縮會議。</p> <p>滿洲事變起る。ジュネーヴ軍縮會議開かる。</p> <p>上海事變。滿洲國承認。</p> <p>國際聯盟退脱通告。</p> <p>滿洲國帝政宣布。</p> <p>ワシントン條約廢棄通告。</p> <p>海軍軍備制限會議退脱。</p> <p>日獨防共協定成立。</p> <p>支那事變起る(七月)。</p> <p>日獨伊防共協定成立。</p> <p>南京陥落(十二月)。</p> <p>廣東占領(十月)。</p> <p>漢口占領(十月)。</p>
概要	<p>世界強國の一と認めらる</p> <p>三大海軍國の一</p>	<p>經濟界の大發展</p> <p>世界的地位の確保</p>
對外關係	<p>支那</p> <p>歐米</p> <p>大戦參加</p> <p>日支條約</p> <p>講和會議</p> <p>ワシントン會議</p>	<p>支那事變</p> <p>上海事變</p> <p>滿洲事變</p> <p>軍縮會議</p> <p>聯盟退脱</p>

文部省檢定濟

高等女子學校歷史科用 昭和十四年一月十六日

昭和十二年十一月二十五日印刷  
昭和十二年十二月八日發行  
昭和十三年十二月二十五日訂正再版印刷  
昭和十三年十二月三十日訂正再版發行

著作權所有

著者

廣島高等師範學校附屬中學校

發行者兼

東京市神田區神保町一丁目二十五番地  
合資會社 東京修文館  
代表者 鈴木金之助

發行者

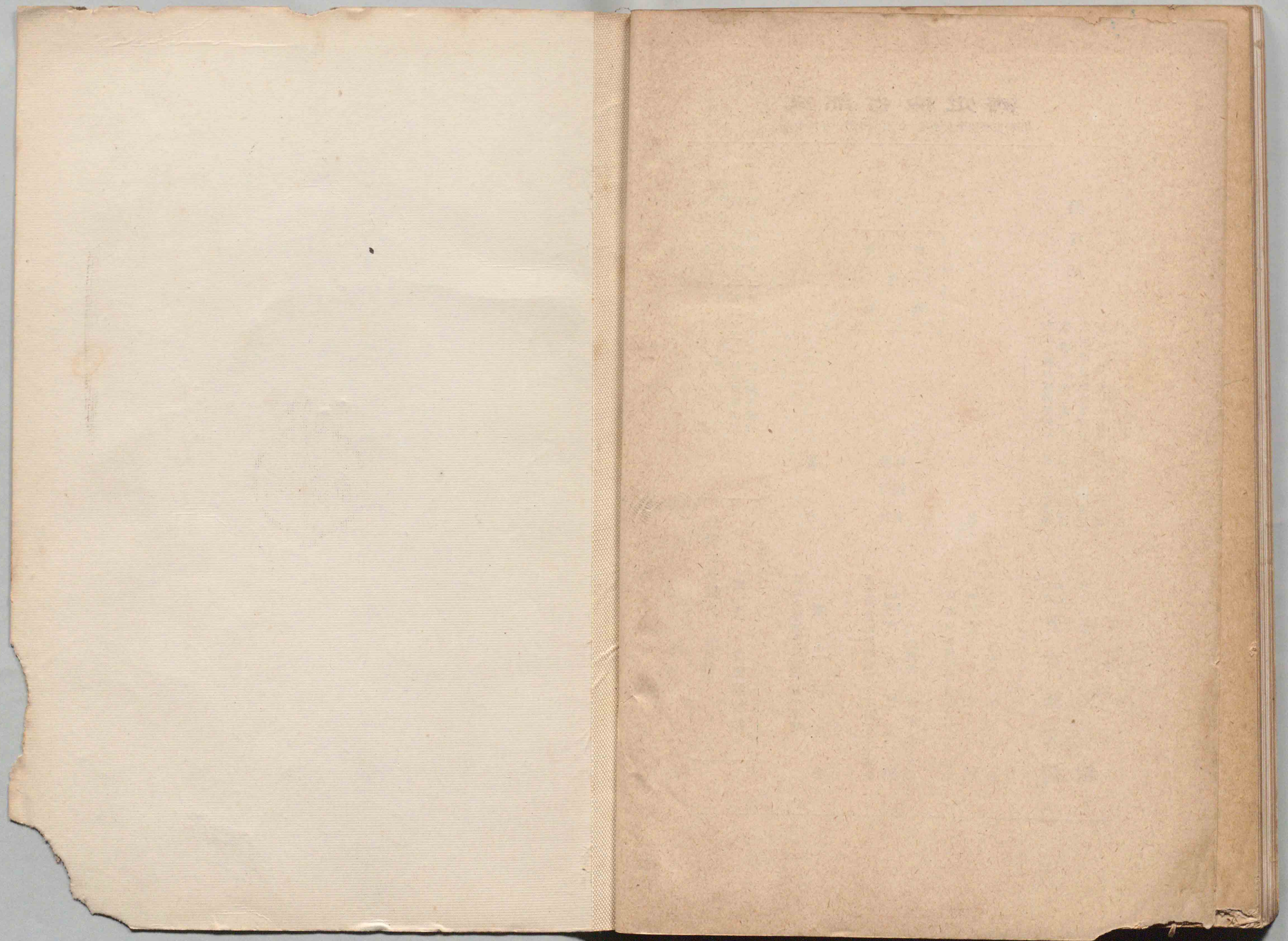
大阪市東區博勞町五丁目五十六番地  
合資會社 修文館  
代表者 鈴木常松

發行所

東京市神田區神保町一丁目二十五番地  
振替口座東京二六四四番  
大阪市東區博勞町五丁目五十六番地  
振替口座大阪四七一一番

合資會社 東京修文館  
株式會社 修文館

新撰女子國史 低學年用  
定價 金壹圓拾錢





広島大学図書

2000035917



庫

9

17